

# 門

夏目漱石

青空文庫



## 一

宗助は先刻から縁側へ坐蒲団を持ち出して、日当りの好さ  
 そうな所へ気楽に胡坐あぐらをかいて見たが、やがて手に持つている雑  
 誌を放り出すと共に、ごろりと横になつた。秋日和あきびよりと名のつく  
 ほどの上天氣なので、往来ひじまくらを行く人の下駄げたの響が、静かな町だけ  
 に、朗らかに聞えて来る。肱枕ひじまくらをして軒から上を見上げると、  
 奇麗きれいな空が一面に蒼く澄んでいる。その空が自分の寝ている縁側  
 の、窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。たまの日曜  
 にこうして緩くり空を見るだけでもだいぶ違うなと思ひながら、

眉を寄せて、ぎらぎらする日をしばらく見つめていたが、まほくなつたので、今度はぐるりと寝返りをして障子の方を向いた。障子の中では細君が裁縫をしている。

「おい、好い天気だな」と話しかけた。細君は、

「ええ」と云つたなりであつた。宗助も別に話がしたい訳でもなかつたと見えて、それなり黙つてしまつた。しばらくすると今度は細君の方から、

「ちつと散歩でもしていらつしやい」と云つた。しかしその時は宗助がただうんと云う生返事を返しただけであつた。

二三分して、細君は障子の硝子の所へ顔を寄せて、縁側に寝てゐる夫の姿を覗いて見た。夫はどう云う了見か両膝を

曲げて海老のえびように窮屈になつてゐる。そうして両手を組み合わして、その中へ黒い頭を突つ込んでいるから、脇に挟まれて顔がちつとも見えない。

「あなたそんな所へ寝ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の言葉は東京のような、東京でないような、現代の女学生に共通な一種の調子を持つてゐる。

宗助は両脇の中で大きな眼をぱちぱちさせながら、「寝やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

それからまた静かになつた。外を通る護謨車のベルの音が二三度鳴つた後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。宗助は仕立おろしの紡績織の背中へ、自然じねんと浸み込んで来る光線の暖あ

たたかみ 味を、シャツの下で貪ぼるほど味いながら、表の音を聴くともなく聴いていたが、急に思い出したように、障子越しの細君を呼んで、

およね 御米、きんらい 近来の近の字はどう書いたつけね」と尋ねた。細君はあき 別に呆れた様子もなく、若い女に特有なけたましい笑声も立てず、

おうみ 「近江のおうの字じやなくつて」と答えた。

「その近江のおうの字が分らないんだ」

のさし 細君は立て切った障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物も指を出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしよう」と云つたぎり、物指の先を、字の留つた所へ置

いたなり、澄み渡つた空を一しきり眺め入つた。宗助は細君の顔ながも見ずに、

「やつぱりそうか」と云つたが、冗談じょうだんでもなかつたと見えて、別に笑もしなかつた。細君も近の字はまるで気にならない様子で、「本当に好い御天氣だわね」と半ばなかひとりごと独り言のようないながら、障子を開けたまままた裁縫しごを始めた。すると宗助は肱で挟んだ頭もたを少し擡げて、

「どうも字と云うものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「なぜ」

「なぜって、いくら容易い字やさしでも、こりや変だと思つて疑ぐり出すと分らなくなる。この間も今こんにち日の今こんの字で大変迷つた。紙の

上へちゃんと書いて見て、じつと眺めていると、何だか違つたような気がする。しまいには見れば見るほど今らしくなくなつて来る。——御前おまいそんな事を経験した事はないかい』

「まさか」

「おれだけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

「あなたどうかしていらつしやるのよ」

「やつぱり神経衰弱のせいかも知れない」

「そうよ」と細君は夫の顔を見た。夫はようやく立ち上つた。

針箱と糸屑いとくずの上を飛び越すように跨またいで、茶の間の襖ふすまを開けると、すぐ座敷である。南が玄関で塞ふきがれているので、突き当りの障子が、日向から急に這入つて来た眸はいには、うそ寒く映つた。

そこを開けると、ひさしせま  
廂に逼るようなこうぱい  
勾配の崖が、縁鼻から聳え  
てるので、朝の内は当つて然るべきはずの日も容易に影を落さ  
ない。崖には草が生えている。下からして一側も石で畳んでな  
いから、いつ壊れるか分らない虞があるのだけれども、不思議に  
まだ壊れた事がないそうで、そのためか家主も長い間昔のままに  
して放つてある。もつとも元は一面の竹藪たけやぶだつたとかで、それ  
を切り開く時に根だけは掘り返さずに土堤どての中に埋めて置いたか  
ら、地は存外緊しまつていますからねと、町内に二十年も住んでいる  
八百屋おやじの爺が勝手口でわざわざ説明してくれた事がある。その時  
宗助はだつて根が残つていれば、また竹が生えて藪になりそうな  
ものじやないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、ああ

切り開かれて見ると、そう甘く行くもんじやありませんよ。しかし崖だけは大丈夫です。どんな事があつたつて壊えつこはねえんだからと、あたかも自分のものを弁護でもするように力んで帰つて行つた。

崖は秋に入つても別に色づく様子もない。ただ青い草の匂が褪めて、不揃にもじやもじやするばかりである。薄だの薦だのと云う洒落たものに至つてはさらに見当らない。その代り昔の名残りの孟宗もうそうが中途に二本、上方に三本ほどすつくりと立つている。それが多少黄に染まつて、幹に日の射すときなぞは、軒から首を出すと、土手の上に秋の暖味あたたかみを眺められるような心持がする。宗助は朝出て四時過に帰る男だから、日の詰まるこの頃は、滅多めった

に崖の上をのぞく暇ひまをもなかつた。暗い便所から出て、手水鉢ちようすばちの水を手に受けながら、ふと廊ひさしの外を見上げた時、始めて竹の事を思い出した。幹の頂いたきこまに濃かな葉が集まつて、まるで坊ぼうずあたま主頭のよう見える。それが秋の日に醉つて重く下に向いて、寂ひとり重なつた葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉めたてたて座敷へ帰つて、机の前へ坐つた。座敷とは云いながら客を通すからそう名づけるまでで、実は書斎とか居間とか云う方が穩当である。北側に床があるのとこで、申訳のために変な軸じくを掛けて、その前に朱しゆでい泥の色をした拙せつな花はないけ活が飾つてある。欄間には額がくもない。ただ真しんちゅう鍮の折釘おれくぎだけが二本光つてゐる。その他には硝子戸ガラス戸の張つた書棚が一つある。けれども

中には別にこれと云つて目立つほどの立派なものも這入つていな  
い。

宗助は銀金具(ぎんかなぐ)の付いた机の抽出(ひきだし)を開けてしきりに中を検べ  
出したが、別に何も見つけ出さないうちに、はたりと締めてしま  
つた。それから硯箱(すずりばこ)の蓋(ふた)を取つて、手紙を書き始めた。一本  
書いて封をして、ちよつと考えたが、

「おい、佐伯(さえき)のうちは中六番町(なかろくばんちょう)何番地だつたかね」と襖越(ごし)  
に聞いた。

「二十五番地じやなくつて」と細君は答えたが、宗助が名宛を書  
き終る頃になつて、

「手紙じや駄目よ、行つてよく話をして来なくつちや」と付け加

えた。

「まあ、駄目までも手紙を一本出しておこう。それでいけなかつたら出掛けるとするさ」と云い切つたが、細君が返事をしないので、

「ねえ、おい、それで好いだろう」と念を押した。

細君は悪いとも云い兼ねたと見えて、その上争いもしなかつた。

宗助は郵便を持つたまま、座敷から直ぐ玄関に出た。<sup>す</sup>細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立つたが、これは茶の間の縁<sup>えん</sup>伝いに玄関に出た。

「ちょっと散歩に行つて来るよ」

「行つていらっしやい」と細君は微笑しながら答えた。

三十分ばかりして格子こうしががらりと開いたので、御米はまた裁縫しごとの手をやめて、縁伝いに玄関へ出て見ると、帰つたと思う宗助の代りに、高等学校の制帽かぶを被つた、弟の小六こうろくが這入つて來た。袴はかまの裾すそが五六寸しか出ないくらいの長い黒羅紗くろらしゃのマントのボタンボタンを外しながら、

「暑い」と云つている。

「だつて余まりあんだわ。この御天気にそんな厚いものを着て出るなんて」

「何、日が暮れたら寒いだろうと思つて」と小六は云いいわけ訳わけを半分しながら、嫂あにによめあとの後に跟いて、茶の間へ通つたが、縫い掛けてある着物へ眼を着けて、

「相変らず精が出ますね」と云つたなり、長火鉢の前へ胡坐をかいた。嫂は裁縫を隅の方へ押しやつておいて、小六の向へ来て、ちよつと鉄瓶てつびんをおろして炭を継ぎ始めた。

「御茶ならたくさんです」と小六が云つた。

「厭？」と女学生流に念を押した御米は、

「じゃ御菓子は」と云つて笑いかけた。

「あるんですか」と小六が聞いた。

「いいえ、無いの」と正直に答えたが、思い出したように、「待

つてちようだい、あるかも知れないわ」と云いながら立ち上がる

拍子ひょうしに、横にあつた炭取を取り退けて、袋戸棚ふくろどだなを開けた。小

六は御米の後姿うしろすがたの、羽織はおりが帶で高くなつた辺あたりを眺めていた。

何を探すのだからなかなか手間てまが取れそうなので、  
 「じゃ御菓子も廃しにしましよう。それよりか、今日は兄さんは  
 どうしました」と聞いた。

「兄さんは今ちよいと」と後向のまま答えて、御米はやはり戸棚  
 の中を探している。やがてぱたりと戸を締めて、

「駄目よ。いつの間にか兄さんがみんな食べてしまつた」と云い  
 ながら、また火鉢の向むこうへ帰つて來た。

「じゃ晩に何か御馳走ごちそうなさい」

「ええしてよ」と柱時計を見ると、もう四時近くである。御米は  
 「四時、五時、六時」と時間を勘定かんじょうした。小六は黙つて嫂の  
 顔を見ていた。彼は實際嫂の御馳走には余り興味を持ち得なかつ

たのである。

「姉さん、兄さんは佐伯さえきへ行つてくれたんですかね」と聞いた。  
「この間から行く行くつて云つてゐる事は云つてゐるよ。だけど、  
兄さんも朝出て夕方に帰るんでしよう。帰ると草臥くたびれちまつて、  
御湯に行くのも大儀そうなんですもの。だから、そう責めるのも  
実際御氣の毒よ」

「そりや兄さんも忙がしいには違なかろうけれども、僕もあれが  
きまらないと気がかりで落ちついて勉強もできないんだから」と  
云いながら、小六は真しん鍼ちゆうの火箸ひばしを取つて火鉢ひばちの灰の中へ何か  
しきりに書き出した。御米はその動く火箸の先を見ていた。  
「だから先刻さつき手紙を出しておいたのよ」と慰めるように云つた。

「何て」

「そりやわたし私もつい見なかつたの。けれども、きつとあの相談よ。

今に兄さんが帰つて来たら聞いて御覧なさい。きつとそうよ」

「もし手紙を出したのなら、その用には違ないでしよう」

「ええ、本当に出したのよ。今兄さんがその手紙を持つて、出しに行つたところなの」

小六はこれ以上弁解のような慰藉いしゃのような嫂あによめの言葉に耳を借し

たくなかつた。散歩に出る閑ひまがあるなら、手紙の代りに自分で足を運んでくれたらよさそうなものだと思うと余り好い心持でもなかつた。座敷へ来て、書棚の中から赤い表紙の洋書を出して、方々ページはぐを剥はがつて見ていた。

## 二

そこに氣のつかなかつた宗助は、町の角まで来て、切手と  
 「敷島」を同じ店で買つて、郵便だけはすぐ出したが、その足  
 でまた同じ道を戻るのが何だか不足だつたので、啣え煙草の煙を  
 秋の日に揺つかせながら、ぶらぶら歩いているうちに、どこか遠  
 くへ行つて、東京と云う所はこんな所だと云う印象をはつきり頭  
 の中へ刻みつけて、そうしてそれを今日の日曜の土産に家へ帰つ  
 て寝ようと云う気になつた。彼は年来東京の空気を吸つて生きて  
 いる男であるのみならず、毎日役所の行通には電車を利用し

て、賑やかな町を二度ずつはきつと往つたり来たりする習慣になつてゐるのではあるが、身体と頭に樂がないので、いつでも上の空そらで素通りをする事になつてゐるから、自分がその賑やかな町の中に活いきていると云う自覺は近來とんと起つた事がない。もつとも平へいぜい生いっぺんは忙がしさに追わられて、別段氣にも掛からないが、七日間に一返の休日が来て、心がゆつたりと落ちつける機会に出逢であうと、不斷の生活が急にそわそわした上調子うわちょうしに見えて来る。必竟よう自分は東京の中に住みながら、ついまだ東京というものを見た事がないんだという結論に到着すると、彼はそこにいつも妙な物淋しささびを感じるのである。

そう云う時には彼は急に思い出したように町へ出る。その上懷ふところ

に多少余裕よゆうでもあると、これで一つ豪遊ごうゆうでもしてみようかと考える事もある。けれども彼の淋しみは、彼を思い切つた極端に驅り去るほどに、強烈の程度なものでないから、彼がそこまで猛進する前に、それも馬鹿馬鹿しくなつてやめてしまう。のみならず、こんな人の常態として、紙入の底が大抵の場合には、軽拳いましを戒める程度内に膨らんでいるので、億劫おつくうな工夫を凝らすよりも、懐ふところところで手てをして、ぶらりと家うちへ帰る方が、つい樂になる。だから宗助の淋しみは單なる散歩か勸工場縦覧ぐらいなところで、次の日曜まではどうかこうか慰藉いしゃされるのである。

この日も宗助はともかくもと思つて電車へ乗つた。ところが日曜の好天氣にもかかわらず、平常よりは乗客が少ないので例にな

く乗心地が好かつた。その上乗客がみんな平和な顔をして、どれもこれも悠<sup>ゆつ</sup>たりと落ちついているように見えた。宗助は腰を掛けながら、毎朝例刻に先を争つて席を奪い合いながら、丸の内方面へ向う自分の運命を顧みた。出勤刻限の電車の道<sup>みちづれ</sup>伴ほど殺風景なものはない。革<sup>かわ</sup>にぶら下がるにしても、天鷲<sup>びろうど</sup>絨に腰を掛けるにしても、人間的な優<sup>やさ</sup>しい心持の起つた試<sup>ためし</sup>はいまだかつてない。自分もそれでたくさんだと考えて、器械か何ぞと膝<sup>ひざ</sup>を突き合せ肩を並べたかのごとくに、行きたい所まで同席して不意と下りてしまふだけであつた。前の御婆さんが八つぐらいになる孫娘の耳の所へ口を付けて何か云つているのを、傍<sup>そば</sup>に見ていた三十怡<sup>がつこう</sup>好<sup>がく</sup>の商家の御神<sup>おかげみ</sup>さんらしいのが、可愛らしがつて、年を聞いたり名を尋

ねたりするところを眺めていると、今更ながら別の世界に来た  
ような心持がした。

頭の上には広告が一面に枠に嵌めて掛けてあつた。宗助は平生これにさえ気がつかなかつた。何心なしに一番目のを読んで見ると、引越は容易にできますと云う移転会社の引札であつた。その次には経済を心得る人は、衛生に注意する人は、火の用心を好むものは、と三行に並べておいてその後に瓦斯竈を使えと書いて、瓦斯竈から火の出ている画まで添えてあつた。三番目には露国文豪トルストイ伯傑作「千古の雪」と云うのと、バンカラ喜劇小辰大一座と云うのが、赤地に白で染め抜いてあつた。

宗助は約十分もかかつて、すべての広告を丁寧に三返ほど読

み直した。別に行つて見ようと思うものも、買って見たいと思うものも無かつたが、ただこれらの広告が判然と自分の頭に映つて、そうしてそれを一々読み終せた時間のあつた事と、それをことごとく理解し得たと云う心の余裕が、宗助には少なからぬ満足を与えた。彼の生活はこれほどの余裕にすら誇りを感じるほどに、日曜以外の出入りには、落ちついていられないものであつた。

宗助は駿河台するがだい下で電車を降りた。降りるとすぐ右側の窓硝まどガラ子スの中に美しく並べてある洋書に眼がついた。宗助はしばらくその前に立つて、赤や青や縞や模様の上に、鮮かに叩き込んである金文字を眺めた。表題の意味は無論解るが、手に取つて、中を檢べて見ようという好奇心はちつとも起らなかつた。本屋の前を

通ると、きっと中へ這入つて見たくなつたり、中へ這入ると必ず何か欲しくなつたりするのは、宗助から云うと、すでに一昔し前の生活である。ただ History 『ヒストリ』 of 『オフ』 Gambling 『ガムブリング』（博奕史）と云うのが、ことさらに美装して、一番真中に飾られてあつたので、それが幾分か彼の頭に突飛な新し味を加えただけであつた。

宗助は微笑しながら、急忙しい通りを向側へ渡つて、今度は時計屋の店を覗き込んだ。金時計だの金鎖が幾つも並べてあるが、これもただ美しい色や恰好として、彼の眸に映るだけで、買いたい了簡を誘致するには至らなかつた。その癖彼は一々絹糸で釣るした価格札を読んで、品物と見較べて見た。そうして

実際金時計の安価なのに驚ろいた。

蝙蝠傘屋の前にもちよつと立ちどまつた。西洋小間物を売る店先では、礼帽の傍にかけてあつた襟飾りに眼がついた。

自分の毎日かけているのよりも大変柄が好かつたので、価を聞いてみようかと思つて、半分店の中へ這入りかけたが、明日から襟飾りなどをかけ替えたところが下らない事だと思い直すと、急に

墓口の口を開けるのが厭になつて行き過ぎた。呉服店でもだいぶ立見をした。鶴御召だの、高貴織だの、清凌織だの、

自分の今日まで知らずに過ぎた名をたくさん覚えた。京都の襟新と云う家の出店の前で、窓硝子へ帽子の鍔を突きつけるようにく寄せて、精巧に刺繡をした女の半襟を、いつまでも眺

めていた。その中にちよど細君に似合いそうな上品なのがあつた。買つて行つてやろうかという気がちよつと起るや否や、そりや五六年前<sup>ぜん</sup>の事だと云う考が後から出て来て、せつかく心持の好い思いつきをすぐ揉<sup>も</sup>み消してしまつた。宗助は苦笑しながら窓硝子を離れてまた歩き出したが、それから半町ほどの間は何だかつまらないような気分がして、往来にも店先にも格段の注意を払わなかつた。

ふと気がついて見ると角に大きな雑誌屋があつて、その軒先には新刊の書物が大きな字で広告してある。梯子<sup>はしご</sup>のような細長い梓<sup>わく</sup>へ紙を張つたり、ペンキ塗の一枚板へ模様画みたような色彩を施こしたりしてある。宗助はそれを一々読んだ。著者の名前も作<sup>さくぶ</sup>

物の名前も、一度は新聞の広告で見たようでもあり、また全く新奇のようでもあつた。

この店の曲り角の影になつた所で、黒い山高帽あぐらを被かぶつた三十ぐらいの男が地面の上へ氣樂そうに胡坐あぐらをかいて、ええ御子供衆の御慰おなぐさみと云いながら、大きな護謨風船ゴムふうせんを膨ふくらましてゐる。それが膨れると自然と達磨だるまの恰好かつこうになつて、好加減いいかげんな所に眼口まで墨で書いてあるのに宗助は感心した。その上一度息を入れると、いつまでも膨れてゐる。かつ指の先へでも、手の平の上へでも自由に尻すわが据すわる。それが尻の穴へ楊枝ようじのような細いものを突つ込むとしゅうつと一度に収縮してしまつ。

忙がしい往来の人は何人でも通るが、誰も立ちどまつて見るほ

どものはない。山高帽の男は賑<sup>にぎ</sup>やかな町の隅に、冷やかに胡坐<sup>あぐら</sup>をかいて、身の周囲<sup>まわり</sup>に何事が起りつつあるかを感じざるもののごとくに、ええ御子供衆の御慰みと云つては、達磨を膨らましている。宗助は一銭五厘出して、その風船を一つ買って、しゆつと縮ましてもらつて、それを袂<sup>たもと</sup>へ入れた。奇麗<sup>きれい</sup>な床屋へ行つて、髪を刈りたくなつたが、どこにそんな奇麗なのがあるか、ちよつと見つからぬうちに、日が限<sup>かぎ</sup>つて來たので、また電車へ乗つて、宅<sup>うち</sup>の方へ向つた。

宗助が電車の終点まで来て、運転手に切符を渡した時には、もう空の色が光を失いかけて、湿つた往来に、暗い影が射し募る頃であつた。降りようとして、鉄の柱を握つたら、急に寒い心持が

した。いつしょに降りた人は、皆な離れ離れになつて、事あり氣に忙がしく歩いて行く。町のはずれを見ると、左右の家の軒から家根<sup>やね</sup>へかけて、仄<sup>ほの</sup>白<sup>しろ</sup>い煙りが大氣の中に動いているように見える。宗助も樹<sup>き</sup>の多い方角に向いて早足に歩を移した。今日の日曜も、暢<sup>のん</sup>びりした御天氣も、もうすでにおしまいだと思うと、少しはかないようなまた淋<sup>さみ</sup>しいような一種の氣分が起つて來た。そして明日<sup>あした</sup>からまた例によつて例のごとく、せつせと働らかなくてはならない身體<sup>からだ</sup>だと考えると、今日半日の生活が急に惜しくなつて、残る六日<sup>むいかはん</sup>半の非精神的な行動が、いかにもつまらなく感ぜられた。歩いているうちにも、日当の悪い、窓の乏しい、大きな部屋の模様や、隣りに坐<sup>すわ</sup>つている同僚の顔や、野中さんちよつと

と云う上官の様子ばかりが眼に浮かんだ。

魚勝と云う看屋の前を通り越して、その五六軒先の露次とも横丁ともつかない所を曲ると、行き当りが高い崖で、その左右に四五軒同じ構の貸家が並んでいる。ついこの間までは疎らな杉垣の奥に、御家人ごけにんでも住み古したと思われる、物寂ものさびた家も一つ地所のうちに混まじっていたが、崖の上の坂井さかいという人がここを買つてから、たちまち萱葺かやぶきを壊して、杉垣を引き抜いて、今のような新らしい普請ふしづに建て易うちてしまつた。宗助の家は横丁を突き当つて、一番奥の左側で、すぐの崖下だから、多少陰氣えいきはあるが、その代り通りからはもつとも隔つているだけに、まあ幾分か閑静だろうと云うので、細君と相談の上、とくにそこをえらんだのであ

る。

宗助は七日なのかに一返の日曜ももう暮れかかつたので、早く湯にでも入つて、暇があつたら髪でも刈つて、そうして緩ゆつくり晩食ばんめしを食おうと思って、急いで格子こうしを開けた。台所の方で皿さら小鉢こばちの音がする。上がろうとする拍子ひょうしに、小六こうろくの脱ぬぎ棄すてた下駄げたの上へ、気がつかずに足を乗せた。曲こごんで位置ととのを調あえているところへ小六が出て來た。台所の方で御米およねが、

「誰？ 兄さん？」と聞いた。宗助は、

「やあ、來ていたのか」と云いながら座敷へ上つた。先刻郵便さつきを出してから、神田を散歩して、電車を降りて家へ帰るまで、宗助の頭には小六の字も閃ひらめかなかつた。宗助は小六の顔を見た

時、何となく悪い事でもしたようにきまりが好くなかった。

「御米、御米」と細君を台所から呼んで、

「小六が来たから、何か御馳走ごちそでもするが好い」と云いつけた。

細君は、忙がしそうに、台所の障子しようじを開け放したまま出て来て、座敷の入口に立つていたが、この分り切つた注意を聞くや否や、「ええ今直じき」と云つたなり、引き返そうとしたが、また戻つて来て、

「その代り小六さん、憚り様はばかさま。座敷の戸たを閉てて、洋灯ランプを点つけてちょうだい。今私も清も手が放せないところだから」と依頼たのんだ。小六は簡単に、

「はあ」と云つて立ち上がつた。

勝手では清が物を刻む音がする。湯か水をざあと流しへ空ける音がする。「奥様これはどちらへ移します」と云う声がする。

「姉さん、ランプの心を剪る鋏はどこにあるんですか」と云う小六の声がする。しゆうと湯が沸つて七輪の火へかかつた様子である。

宗助は暗い座敷の中で默然と手焙へ手を翳していた。灰の上に出た火の塊まりだけが色づいて赤く見えた。その時裏の崖の上の家主の家の御嬢さんがピヤノを鳴らし出した。宗助は思い出したように立ち上がりつて、座敷の雨戸を引きに縁側へ出た。孟宗竹が薄黒く空の色を乱す上に、一つ二つの星が燐めいた。ピヤノの音は孟宗竹の後から響いた。

## 三

宗助そうすけと小六こうろくが手拭てぬぐいを下げる、風呂ふろから帰つて来た時は、座敷ざぶとんの真中に真四角な食卓てあぶりを据えて、御米およねの手料理が手際てぎわよくその上に並べてあつた。手焙てあぶりの火も出がけよりは濃い色に燃えていた。洋灯ランプも明るかつた。

宗助が机の前の座蒲団ざぶとんを引き寄せて、その上に樂々らくらくと胡坐あぐらを搔かいた時、手拭と石鹼シャボンを受取つた御米は、

「好い御湯だつた事？」と聞いた。宗助はただ一言、

「うん」と答えただけであつたが、その様子は素氣ないと云うよ

りも、むしろ湯上りで、精神が弛緩した氣味に見えた。

「なかなか好い湯でした」と小六が御米の方を見て調子を合せた。  
 「しかしああ込んじや溜らないよ」と宗助が机の端へ肱を持たせながら、倦怠るそうに云つた。宗助が風呂に行くのは、いつでも役所が退けて、家へ帰つてからの事だから、ちようど人の立て込む夕食前の黄昏である。彼はこの二三カ月間ついぞ、日の光に透かして湯の色を眺めた事がない。それならまだしもだが、ややともすると三日も四日もまるで銭湯の敷居を跨がずに過してしまう。日曜になつたら、朝早く起きて何よりも第一に奇麗な湯に首だけ浸つてみようと、常は考えているが、さてその日曜が来て見ると、たまに悠々く寝られるのは、今日ばかりじやないかと云

う気になつて、つい床のうちでぐずぐずしているうちに、時間が遠慮なく過ぎて、ええ面倒だ、今日はやめにして、その代り今度の日曜に行こうと思い直すのが、ほとんど惰性のようになつている。

「どうかして、朝湯にだけは行きたいね」と宗助が云つた。

「その癖朝湯に行ける日は、きっと寝坊なさるのね」と細君は調戯うような口調であつた。小六は腹の中でこれが兄の性來の弱点であると思い込んでいた。彼は自分で学校生活をしているにもかかわらず、兄の日曜が、いかに兄にとつて貴といかを会得できなかつた。六日間の暗い精神作用を、ただこの一日で暖かに回復すべく、兄は多くの希望を二十四時間のうちに投げ込んでいる。

だからやりたい事があり過ぎて、十の二三も実行できない。否、その二三にしろ進んで実行にかかると、かえつてそのために費やす時間の方が惜しくなつて来て、ついまた手を引込めて、じつとしているうちに日曜はいつか暮れてしまうのである。自分の気晴しや保養や、娯楽もしくは 好尚こうしょうについてですら、かように節儉しなければならない境遇にある宗助が、小六のために尽さないのは、尽さないのでない、頭に尽す余裕よゆうのないのだとは、小六から見ると、どうしても受取れなかつた。兄はただ手前勝手な男で、暇があればぶらぶらして細君と遊んでばかりいて、いつこう頼りにも力にもなつてくれない、真底は 情合じょうあいに薄い人だぐらいに考えていた。

けれども、小六がそう感じ出したのは、つい近頃の事で、実を云うと、佐伯との交渉が始まつて以来の話である。年の若いだけ、すべてに性急な小六は、兄に頼めば今日明日にも方がつくものと、思い込んでいたのに、何日までも埒らちが明かないのみか、まだ先方へ出かけてもくれないので、だいぶ不平になつたのである。

ところが今日帰りを待ち受けて逢つて見ると、そこが兄弟で、別に御世辞も使わないうちに、どこか暖昧あたたかみのある仕打も見えるので、つい云いたい事も後廻しにして、いつしよに湯になんぞ這入はいつて、穏やかに打ち解けて話せるようになつて來た。

兄弟は寛ろいで膳ぜんについた。御米も遠慮なく食卓の一隅ひとすみを領りょうした。宗助も小六も猪口ちょくを二三杯ずつ干した。飯にかかる前に、

宗助は笑いながら、

「うん、面白いものが有つたつけ」と云いながら、袂から買つて来た護謨風船の達磨を出して、大きく膨らませて見せた。そうして、それを椀の蓋の上へ載せて、その特色を説明して聞かせた。御米も小六も面白がつて、ふわふわした玉を見ていた。しまいに小六が、ふうつと吹いたら達磨は膳の上から畳の上へ落ちた。それでも、まだ覆らなかつた。

「それ御覧」と宗助が云つた。

御米は女だけに声を出して笑つたが、御櫃の蓋を開けて、夫の飯を盛いながら、

「兄さんも随分呑気ね」と小六の方を向いて、半ば夫を弁護する

よう云つた。宗助は細君から茶碗を受取つて、一言の弁解もなく食事を始めた。小六も正式に箸を取り上げた。

達磨はそれぎり話題に上らなかつたが、これが緒になつて、三人は飯の済むまで無邪気に長閑な話をつづけた。しまいに小六が氣を換えて、

「時に伊藤さんもとんだ事になりましたね」と云い出した。宗助は五六日前伊藤公暗殺の号外を見たとき、御米の働いている台所へ出て来て、「おい大変だ、伊藤さんが殺された」と云つて、手に持つた号外を御米のエプロンの上に乗せたなり書斎へ這入つたが、その語氣からいうと、むしろ落ちついたものであつた。

「あなた大変だつて云う癖に、ちつとも大変らしい声じやなくつ

てよ」と御米が後から冗談<sup>あひじょうだん</sup>半分にわざわざ注意したくらいである。その後日ごとの新聞に伊藤公の事が五六段ずつ出ない事はないが、宗助はそれに目を通しているんだか、いないんだか分らないほど、暗殺事件については平気に見えた。夜帰つて来て、御米が飯の御給仕をするときなどに、「今日も伊藤さんの事が何か出ていて」と聞く事があるが、その時には「うんだいぶ出でいる」と答えるぐらいだから、夫の隠袋<sup>かくし</sup>の中に置んである今朝の読殻<sup>よみがら</sup>を、<sup>あと</sup>後から出して読んで見ないと、その日の記事は分らなかつた。御米もつまりは夫が帰宅後の会話の材料として、伊藤公を引合に出すぐらいのところだから、宗助が進まない方向へは、たつて話を引張りたくはなかつた。それでこの二人の間には、号外発行の

当日以後、今夜小六がそれを云い出したまでは、公け<sup>おおや</sup>には天下を動かしつつある問題も、格別の興味をもつて迎えられていなかつたのである。

「どうして、まあ殺されたんでしよう」と御米は号外を見たとき、宗助に聞いたと同じ事をまた小六に向つて聞いた。

「短銃<sup>ピストル</sup>をポンポン連発したのが 命<sup>めい</sup>中<sup>いちゆう</sup>したんです」と小六は正直に答えた。

「だけどさ。どうして、まあ殺されたんでしよう」

小六は要領を得ないような顔をしている。宗助は落ちついた調子で、

「やっぱり運命だなあ」と云つて、茶碗の茶を旨<sup>うま</sup>そうに飲んだ。

御米はこれでも納得ができなかつたと見えて、

「どうしてまた満洲などへ行つたんでしょう」と聞いた。

「本当に」と宗助は腹が張つて充分物足りた様子であつた。

「何でも露西亞に秘密な用があつたんだそうです」と小六が眞面目な顔をして云つた。御米は、

「そう。でも厭ねえ。殺されちゃ」と云つた。

「おれみたような腰弁は、殺されちゃ厭だが、伊藤さんみたような人は、哈爾賓へ行つて殺される方がいいんだよ」と宗助が始めて調子づいた口を利いた。

「あら、なぜ」

「なぜって伊藤さんは殺されたから、歴史的に偉い人になれるの

さ。ただ死んで御覧、こうはいかないよ」

「なるほどそんなものかも知れないな」と小六は少し感服したようだつたが、やがて、

「とにかく満洲だの、哈爾賓だのって物騒な所ですね。僕は何だか危険なような心持がしてならない」と云つた。

「そりや、色んな人が落ち合つてるからね」

この時御米は妙な顔をして、こう答えた夫の顔を見た。宗助もそれに気がついたらしく、

「さあ、もう御膳おせんを下げたら好かろう」と細君うなを促うながして、先刻さつきの達磨だるまをまた畳の上から取つて、人指ひとさしゆびの先へ載のせながら、

「どうも妙だよ。よくこう調子さじよくできるものだと思つてね」と

云つていた。

台所から清が出て来て、食い散らした皿さら小鉢こばちを食卓きよごと引いて行つた後で、御米も茶を入れ替えるために、次の間へ立つたら、兄弟は差向きよいになつた。

「ああ奇麗きれいになつた。どうも食つた後は汚ないものでね」と宗助は全く食卓に未練のない顔をした。勝手の方で清がしきりに笑つてゐる。

「何がそんなにおかしいの、清」と御米が障子しようじ越しに話しかける声が聞えた。清はへえと云つてなお笑い出した。兄弟は何にも云わぬ、半ば下女の笑い声に耳を傾けていた。

しばらくして、御米が菓子皿と茶盆を両手に持つて、また出て

来た。藤蔓の着いた大きな急須から、胃にも頭にも応えない番茶を、湯呑ほどな大きな茶碗に注いで、両人の前へ置いた。「何だつて、あんなに笑うんだい」と夫が聞いた。けれども御米の顔は見ずにかえつて菓子皿の中を覗いていた。

「あなたがあんな玩具を買つて来て、面白そうに指の先へ乗せていらつしやるからよ。子供もない癖に」

宗助は意にも留めないように、軽く「そうか」と云つたが、後から緩くり、

「これでも元は子供があつたんだがね」と、さも自分で自分の言葉を味わつてゐる風につけ足して、生温い眼を挙げて細君を見た。御米はぴたりと黙つてしまつた。

「あなた御菓子食べなくつて」と、しばらくしてから小六の方へ向いて話し掛けたが、

「ええ食べます」と云う小六の返事を聞き流して、ついと茶の間へ立つて行つた。兄弟はまた差向いになつた。

電車の終点から歩くと二十分近くもかかる山の手の奥だけあつて、まだ宵の口よい くちだけれども、四隣あたりは存外静かである。時々表を通る薄歯さの下駄の響さが冴えて、夜寒よさむがしだいに増して来る。宗助は手ふところで懐いだをして、

「昼間は暖あつたかいが、夜になると急に寒くなるね。寄宿きゆくじやもう蒸汽スチームを通しているかい」と聞いた。

「いえ、まだです。学校がっこうじやよつほど寒くならなくつちや、蒸汽

なんか焚たきやしません」

「そうかい。それじや寒いだろう」

「ええ。しかし寒いくらいどうでも構わないつもりですが」と云つたまま、小六はすこし云よどい淀よどんでいたが、しまいにとうとう思おもい切つて、

「兄さん、佐伯さえきの方はいつたいどうなるんでしょう。先刻さつき姉さん

から聞いたら、今日手紙を出して下すつたそうですが」

「ああ出した。二三日中に何とか云つて来るだろう。その上でまたおれが行くともどうともしようよ」

小六は兄の平氣な態度を、心うちの中では飽足らず眺ながめた。しかし宗助の様子にどこと云つて、他ひとを激するさせるような銳とがいところも、

みづか かば  
自らを庇護うような卑しい点もないの、喰つてかかる勇気はさ  
らに出なかつた。ただ  
「じや今日まであのままにしてあつたんですか」と単に事実を確  
めた。

「うん、実は済まないがあのままだ。手紙も今日やつとの事で書  
いたくらいだ。どうも仕方がないよ。近頃神経衰弱でね」と眞面  
めに云う。小六は苦笑した。

「もし駄目なら、僕は学校をやめて、いつそ今のうち、満洲か朝  
鮮へでも行こうかと思つてるんです」

「満洲か朝鮮？ひどくまた思い切つたもんだね。だつて、御前  
先刻満洲は物騒で厭だつて云つたじやないか」

用談はこんなところに往つたり来たりして、ついに要領を得なかつた。しまいに宗助が、

「まあ、好いや、そう心配しないでも、どうかなるよ。何しろ返事の来しだい、おれがすぐ知らせてやる。その上でまた相談する」としよう」と云つたので、談話に区切がついた。

小六が帰りがけに茶の間のぞを覗いたら、御米は何にもしずに、長な  
火鉢がひばちに倚りかかっていた。

「姉さん、さようなら」と声を掛けたら、「おや御帰り」と云いながらようやく立つて來た。

小六こうろくの苦くにして いた佐伯さえきからは、予期の通り一二三日して返事が  
あつたが、それは極きわめて簡単なもので、端書はがきでも用の足りるところを、鄭重ていちょうに封筒へ入れて三銭の切手を貼はつた、叔母の自筆に過ぎなかつた。

役所から帰つて、筒袖つづそでの仕事着を、窮屈うごづそうに脱ぎ易ぬかえて、火鉢ひばちの前へ坐すわるや否や、抽出ひきだしから一寸ほどわざと余して差し込んであつた状袋に眼が着いたので、御米およねの汲んで出す番茶を一口呑のんだまま、宗助そうすけはすぐ封を切つた。

「へえ、安さんは神戸へ行つたんだつてね」と手紙を読みながら云つた。

「いつ？」と御米は湯呑を夫の前に出した時の姿勢のままで聞いた。

「いつも書いてないがね。何しろ遠からぬうちには帰京仕るべく候間と書いてあるから、もうじき帰つて来るんだろう」

「遠からぬうちなんて、やつぱり叔母さんね」

宗助は御米の批評に、同意も不同意も表しなかつた。読んだ手紙を巻き納めて、投げるようになごへ放り出して、四五日目になる、ざらざらした腮を、氣味わるなに撫で廻した。

御米はすぐその手紙を拾つたが、別に読もうともしなかつた。それを膝の上へ乗せたまま、夫の顔を見て、

「遠からぬうちに帰京仕るべく候間、どうだつて云うの」と聞

いた。

「いざれ帰つたら、安之助と相談して何とか御挨拶やすのすけを致しますと云うのさ」

「遠からぬうちじや曖昧あいまいね。いつ帰るとも書いてなくつて」

「いいや」

御米は念のため、膝の上の手紙を始めて開いて見た。そうしてそれを元のよう<sup>に</sup>畳んで、

「ちよつとその状袋を」と手を夫の方へ出した。宗助は自分と火鉢の間に挟まっている青い封筒を取つて細君に渡した。御米はそれをふつと吹いて、中を膨らまして手紙を收めた。そうして台所へ立つた。

宗助はそれぎり手紙の事には気を留めなかつた。今日役所で同僚が、この間英吉利<sup>イギリス</sup>から来遊したキチナー元帥に、新橋の傍<sup>そば</sup><sub>あ</sub>で逢つたと云う話を思い出して、ああ云う人間になると、世界中どこへ行つても、世間を騒<sup>さわ</sup>がせるようにしてきているようだが、実際そういう風に生れついて来たものかも知れない。自分の過去から引き摺<sup>ひきず</sup>つてきた運命や、またその続きとして、これから自分の眼前に展開されべき将来を取つて、キチナーと云う人のそれに比べて見ると、とうてい同じ人間とは思えないぐらい懸<sup>か</sup>け隔<sup>へだ</sup>たつてゐる。

こう考えて宗助はしきりに煙草<sup>たばこ</sup>を吹かした。表は夕方から風が吹き出して、わざと遠くの方から襲<sup>おそ</sup>つて来るような音がする。それが時々やむと、やんだ間は寂<sup>しん</sup>として、吹き荒れる時よりはなお

淋<sup>さび</sup>しい。宗助は腕組をしながら、もうそろそろ火事の半鐘<sup>はんしょう</sup>が鳴り出す時節だと思つた。

台所へ出て見ると、細君は七輪<sup>しちりん</sup>の火を赤くして、肴<sup>さかな</sup>の切身を焼いていた。清は流し元に曲んで漬物を洗つていた。二人とも口を利かずにせつせと自分のやる事をやつてゐる。宗助は障子<sup>しようじ</sup>を開けたなり、しばらく肴から垂る汁<sup>つゆ</sup>か膏<sup>あぶら</sup>の音を聞いていたが、無言のまままた障子<sup>た</sup>を閉てて元の座へ戻つた。細君は眼さえ肴から離さなかつた。

食事を済まして、夫婦が火鉢<sup>あい</sup>を間に向い合つた時、御米はまた「佐伯の方は困るのね」と云い出した。

「まあ仕方がない。安さんが神戸から帰るまで待つよりほかに道

はあるまい

「その前にちょっと叔母さんに逢つて話をしておいた方が好かな  
くつて」

「そうさ。まあそのうち何とか云つて来るだろう。それまで打うつち  
遣やつておこうよ」

「小六さんが怒つてよ。よくつて」と御米はわざと念を押してお  
いて微笑した。宗助は下眼を使つて、手に持つた小楊枝こようじを着物の  
襟えりへ差した。

中なか一日置いて、宗助はようやく佐伯からの返事を小六に知ら  
せてやつた。その時も手紙の尻しりに、まあそのうちどうかなるだろ  
うと云う意味を、例のごとく付け加えた。そうして当分はこの事

件について肩が抜けたように感じた。自然の経過<sup>なりゆき</sup>がまた窮屈に眼の前に押し寄せて来るまでは、忘れている方が面倒がなくつて好いぐらいな顔をして、毎日役所へ出てはまた役所から帰つて来た。帰りも遅いが、帰つてから出かけるなどという億劫<sup>おつくう</sup>な事は滅多<sup>めった</sup>になかつた。客はほとんど来ない。用のない時は清を十時前に寝かす事さえあつた。夫婦は毎夜同じ火鉢の両側に向き合つて、食後一時間ぐらい話をした。話の題目は彼らの生活状態に相応した程度のものであつた。けれども米屋の払を、この三十日にはどうしたものだろうという、苦しい世帯話は、いまだかつて一度も彼らの口には上らなかつた。と云つて、小説や文学の批評はもちらんの事、男と女の間を陽炎<sup>かげろう</sup>のように飛び廻る、花やかな言葉

のやりとりはほとんど聞かれなかつた。彼らはそれほどの年輩でもないのに、もうそこを通り抜けて、日ごとに地味になつて行く人のようにも見えた。または最初から、色彩の薄い極めて通俗の人間が、習慣的に夫婦の関係を結ぶために寄り合つたようにも見えた。

上部から見ると、夫婦ともそう物に屈託する氣色はなかつた。それは彼らが小六の事に關して取つた態度について見てもほぼ想像がつく。さすが女だけに御米は一二度、

「安さんは、まだ帰らないんでしょうかね。あなた今度の日曜ぐらいて番町まで行つて御覧なさらなくつて」と注意した事があるが、宗助は、

「うん、行つても好い」ぐらいな返事をするだけで、その行つても好い日曜が来ると、まるで忘れたように済ましている。御米もそれを見て、責める様子もない。天気が好いと、

「ちと散歩でもしていらつしやい」と云う。雨が降つたり、風が吹いたりすると、

「今日は日曜で仕合せね」と云う。

幸にして小六はその後一度もやつて来ない。この青年は、至つて凝り性の神経質で、こうと思うとどこまでも進んで来るところが、書生時代の宗助によく似ている代りに、ふと気が変ると、昨日の事はまるで忘れたように引つ繰り返つて、けろりとした顔をしている。そこも兄弟だけあつて、昔の宗助にそのままである。

それから、頭脳が比較的明瞭で、理路に感情を注ぎ込むのか、または感情に理窟の枠を張るのか、どつちか分らないが、とにかく物に筋道を付けないと承知しないし、また一返筋道が付くと、その筋道を生かさなくってはおかしいように熱中したがる。その上体質の割合に精力がつづくから、若い血氣に任せて大抵の事はする。

宗助は弟を見るたびに、昔の自分が再び蘇生して、自分の眼の前に活動しているような気がしてならなかつた。時には、はらはらする事もあつた。また苦々しく思う折もあつた。そう云う場合には、心のうちに、当時の自分が一団に振舞つた苦い記憶を、できるだけしばしば呼び起させるために、とくに天が小六を自分

の眼の前に据え付けるのではなかろうかと思つた。そうして非常に恐ろしくなつた。こいつもあるいはおれと同一の運命に陥るために生れて來たのではなかろうかと考えると、今度は大いに心がかりになつた。時によると心がかりよりは不愉快であつた。

けれども、今日こんにちまで宗助は、小六に対して意見がましい事を云つた事もなければ、将来について注意を与えた事もなかつた。

彼の弟に対する待遇方はただ普通凡庸ぼんようのものであつた。彼の今 の生活が、彼のような過去を有つている人とは思えないほどに、沈んでいるごとく、彼の弟を取り扱う様子にも、過去と名のつくほどの経験をも有つた年長者の素振そぶりは容易に出なかつた。

宗助と小六の間には、まだ二人ほど男の子が挿はさまつていたが、

いざれも早世そうせいしてしまつたので、兄弟とは云いながら、年は十とおばかり違つてゐる。その上宗助はある事情のために、一年の時京都へ転学したから、朝夕ちょうあせきいつしょに生活していたのは、小六の十二三の時までである。宗助は剛情ごうじょうな聰きかぬ氣の腕白小僧としての小六をいまだに記憶している。その時分は父も生きていたし、家の都合も悪くはなかつたので、抱車夫かかえしゃふを邸内の長屋に住まわして、楽に暮していた。この車夫に小六よりは三つほど年下の子供があつて、始終しじゆう小六の御相手をして遊んでいた。ある夏の日盛りに、二人して、長い竿さおのさきへ菓子袋くくを括り付けて、大きな柿の木の下で蝉せみの捕りくらをしているのを、宗助が見て、兼坊けんぼうそんなに頭を日に照らしつけると霍乱かくらんになるよ、さあこ

れを被かぶれと云つて、小六の古い夏帽を出してやつた。すると、小六は自分の所有物を兄が無断で他ひとにくれてやつたのが、癪しゃくに障さわつたので、突然いきなり兼坊の受取つた帽子を引つたくつて、それを地面の上へ抛なげつけるや否や、馳かけ上がるよう<sup>に</sup>その上へ乗つて、くしやりと麦藁帽むぎわらぼうを踏み潰つぶしてしまつた。宗助は縁から跣足はだしで飛んで下りて、小六の頭を擲なぐりつけた。その時から、宗助の眼には、小六が小悪こにくらしい小僧として映つた。

二年の時宗助は大学を去らなければならぬ事になつた。東京の家うちへも帰かえれない事になつた。京都からすぐ広島へ行つて、そこに半年ばかり暮らしているうちに父が死んだ。母は父よりも六年ほど前に死んでいた。だから後には二十五六になる妾めかけと、十六

になる小六が残つただけであつた。

佐伯から電報を受け取つて、久しぶりに出京した宗助は、葬式を済ました上、家の始末をつけようと思つてだんだん調べて見ると、あると思つた財産は案外に少なくつて、かえつて無いつもりの借金がだいぶあつたに驚ろかされた。叔父の佐伯に相談すると、仕方がないから邸を売るが好かろうと云う話であつた。妾は相当の金をやつてすぐ暇を出す事にきめた。小六は当分叔父の家に引き取つて世話をして貰う事にした。しかし肝心の家屋敷はすぐ右から左へと売れる訳には行かなかつた。仕方がないから、叔父に一時の工面を頼んで、当座の片をつけて貰つた。叔父は事業家でいろいろな事に手を出しては失敗する、云わば山気やまぎの多い男で

あつた。宗助が東京にいる時分も、よく宗助の父を説きつけては、  
旨い事を云つて金を引き出したものである。宗助の父にも慾があ  
つたかも知れないが、この伝で叔父の事業に注ぎ込んだ金高はけ  
つして少ないものではなかつた。

父の亡くなつたこの際にも、叔父の都合は元と余り変つていな  
い様子であつたが、生前の義理もあるし、またこう云う男の常と  
して、いざと云う場合には比較的融通のつくものと見えて、叔父  
は快よく整理を引き受けてくれた。その代り宗助は自分の家屋敷  
の売却方についていつさいの事を叔父に一任してしまつた。早く  
云うと、急場の金策に対する報酬として土地家屋を提供したよう  
なものである。叔父は、

「何しろ、こう云うものは買手を見て売らないと損だからね」と云つた。

道具類も積ばかり取つて、金目にならないものは、ことごとく売り払つたが、五六幅の掛け物と十二三点の骨董品だけは、やはり気長に欲しがる人を探さないと損だと云う叔父の意見に同意して、叔父に保管を頼む事にした。すべてを差し引いて手元に残つた有金は、約二千円ほどのものであつたが、宗助はそのうちの幾分を、小六の学資として、使わなければならぬと気がついた。しかし月々自分の方から送るとすると、今日の位置が堅固でない當時、はなはだ実行しにくい結果に陥りそうなので、苦しくはあつたが、思い切つて、半分だけを叔父に渡して、何分宜しくと

頼んだ。自分が中途で失敗しくじつたから、せめて弟だけは物にしてやりたい気もあるので、この千円が尽きたあとは、またどうにか心配もできようしまたしてくれるだろうぐらいの不<sub>ふたしか</sub>憚な希望を残して、また広島へ帰つて行つた。

それから半年ばかりして、叔父の自筆で、家はどうとう売れたから安心しろと云う手紙が来たが、いくらに売れたとも何とも書いてないので、折り返して聞き合せると、二週間ほど経つての返事に、優に例の立替つぐなを償うに足る金額だから心配しなくても好いとあつた。宗助はこの返事に対しても少なからず不満を感じたには感じたが、同じ書信の中に、委細はいずれ御面会の節云々とあつたので、すぐにも東京へ行きたいような気がして、実はこうこう

だがと、相談半分細君に話して見ると、御米は氣の毒そうな顔をして、

「でも、行けないんだから、仕方がないわね」と云つて、例のごとく微笑した。その時宗助は始めて細君から宣告を受けた人のよう、しばらく腕組をして考えたが、どう工夫したつて、抜ける事のできないような位地いぢと事情の下もとに束縛そくばくされていたので、ついそれなりになつてしまつた。

仕方がないから、なお三四回書面で往復を重ねて見たが、結果はいつも同じ事で、版はんこう行で押したようにいづれ御面会の節を繰り返して来るだけであつた。

「これじやしようがないよ」と宗助は腹が立つたような顔をして

御米を見た。三ヶ月ばかりして、ようやく都合がついたので、久し振りに御米を連れて、出京しようと思う矢先に、つい風邪を引いて寝たのが元で、腸窒扶斯<sup>ちようチフス</sup>に変化したため、六十日余りを床の上に暮らした上に、あの三十日ほどは充分仕事もできないくらい衰えてしまつた。

病気が本復してから間もなく、宗助はまた広島を去つて福岡の方へ移らなければならぬ身となつた。移る前に、好い機会だからちよつと東京まで出たいものだと考えてゐるうちに、今度もいろいろの事情に制せられて、ついそれも遂<sup>すい</sup>行<sup>こう</sup>せずに、やはり下り列車の走る方に自己の運命を托した。その頃は東京の家を畠むとき、懐にして出た金は、ほとんど使い果たしていた。彼の福岡

生活は前後二年を通じて、なかなかの苦闘であつた。彼は書生として京都にいる時分、種々の口実の下に、父から臨時随意に多額の学資を請求して、勝手しだいに消費した昔をよく思い出して、今の身分と比較しつつ、しきりに因果の束縛を恐れた。ある時はひそかに過ぎた春を回顧して、あれが己の栄華の頂点だつたんだと、始めて醒めた眼に遠い霞を眺める事もあつた。いよいよ苦しくなつた時、

「御米、久しく放つておいたが、また東京へ掛けあつてみようかな」と云い出した。御米は無論逆さからいはしなかつた。ただ下を向いて、「駄目よ。だつて、叔父さんに全く信用がないんですもの」と心細そうに答えた。

「向うじやこつちに信用がないかも知れないが、こつちじやまた向うに信用がないんだ」と宗助は威張つて云い出したが、御米の俯目ふしめになつてゐる様子を見ると、急に勇気が挫ける風に見えた。

こんな問答を最初は月に一二返ぐらい繰り返していたが、後には二月ふたつきに一返になり、三月みつきに一返になり、とうとう、

「好いや、小六さくろきえどうかしてくれれば。あとの事はいづれ東京へ出たら、逢つた上で話をつけらあ。ねえ御米、そうすると、しようじやないか」と云い出した。

「それで、好よござんすとも」と御米は答えた。

宗助は佐伯の事をそれなり放つてしまつた。單なる無心は、自分の過去に対しても、叔父に向つて云い出せるものないと、宗

助は考えていた。したがつてその方の談判は、始めからいまだかつて筆にした事がなかつた。小六からは時々手紙が来たが、極めて短かい形式的のものが多かつた。宗助は父の死んだ時、東京で逢つた小六を覚えているだけだから、いまだに小六を他愛ない小供ぐらいに想像するので、自分の代理に叔父と交渉させようなどと云う気は無論起らなかつた。

夫婦は世の中の日の目を見ないものが、寒さに堪たえかねて、抱き合つて暖だんを取るような具合に、御互同志を頼りとして暮らしてゐた。苦しい時には、御米がいつでも、宗助に、

「でも仕方がないわ」と云つた。宗助は御米に、「まあ我慢するさ」と云つた。

二人の間には諦めあきらとか、忍耐とか云うものが断えず動いていたが、未来とか希望と云うものの影はほとんど射さないよう見えた。彼らは余り多く過去を語らなかつた。時としては申し合わせたように、それを回避する風さえあつた。御米が時として、

「そのうちにはまたきつと好い事があつてよ。そういう悪い事ばかり続くものじやないから」と夫を慰さめるように云う事があつた。すると、宗助にはそれが、真心ある妻の口を藉りて、自分を翻弄ほんろうする運命の毒舌のごとくに感ぜられた。宗助はそう云う場合には何にも答えずにただ苦笑するだけであつた。御米がそれでも気がつかずに、なにか云い続けると、

「我々は、そんな好い事を予期する権利のない人間じやないか」

と思い切つて投げ出してしまった。細君はようやく気がついて口を噤んでしまう。そうして二人が黙つて向き合つていると、いつの間にか、自分達は自分達の拵えた、過去という暗い大きな窓の中落ちている。

彼らは自業自得で、彼らの未来を塗抹した。<sup>とまつ</sup>だから歩いている先の方には、花やかな色彩を認める事ができないものと諦<sup>あき</sup>らめて、ただ二人手を携えて行く気になつた。叔父の売り払つたと云う地面家作についても、固<sup>もと</sup>より多くの期待は持つていなかつた。時々考え出したように、

「だつて、近頃の相場なら、捨<sup>すて</sup>売りにしたつて、あの時叔父の拵らえてくれた金の倍にはなるんだもの。あんまり馬鹿馬鹿しいか

らね」と宗助が云い出すと、御米は淋<sup>さみ</sup>しそうに笑つて、「また地面? いつまでもあの事ばかり考えていらつしやるのね。だつて、あなたが万事宜<sup>よろ</sup>しく願いますと、叔父さんにおつしやつたんでしょう」と云う。

「そりや仕方がないさ。あの場合ああでもしなければ方<sup>ほう</sup>がつかないんだもの」と宗助が云う。

「だからさ。叔父さんの方では、御金の代りに家<sup>うち</sup>と地面を貰つたつもりでいらつしやるかも知れなくつてよ」と御米が云う。

そう云われると、宗助も叔父の処置に一理あるようにも思われて、口では、

「そのつもりが好くないじやないか」と答弁するようなものの、

この問題はその都度しだいしだいに背景の奥に遠ざかつて行くのであつた。

夫婦がこんな風に淋しく睦まじく暮らして來た二年目の末に、宗助はもとの同級生で、学生時代には大変懇意であつた杉原と云う男に偶然出逢つた。杉原は卒業後高等文官試験に合格して、その時すでに或省に奉職していたのだが、公務上福岡と佐賀へ出張することになつて、東京からわざわざやつて來たのである。宗助は所の新聞で、杉原のいつ着いて、どこに泊つているかをよく知つてはいたが、失敗者としての自分に顧みて、成効者<sup>かえりせいかうしゃ</sup>の前に頭を下げる対照を恥ずかしく思つた上に、自分は在学当時の旧友に逢うのを、特に避けたい理由を持つていたので、彼の旅館を訪ね

る気は毛頭なかつた。

ところが杉原の方では、妙な引掛りから、宗助のここに燻ぶつて  
いる事を聞き出して、強いて面会を希望するので、宗助もやむを得ず我がを折つた。宗助が福岡から東京へ移れるようになつたのは、全くこの杉原の御蔭おかげである。杉原から手紙が来て、いよいよ事がきまつたとき、宗助は箸はしを置いて、

「御米、とうとう東京へ行けるよ」と云つた。

「まあ結構ね」と御米が夫の顔を見た。

東京に着いてから二三週間は、眼の回るよう日に日が経たつた。新らしく世帯を有つて、新らしい仕事を始める人に、あり勝ちな急忙わしなさと、自分達を包む大都の空氣の、日夜劇はげしく震盪しんとうする

刺戟<sup>しげき</sup>とに駆<sup>か</sup>られて、何事をもじつと考える閑<sup>ひま</sup>もなく、また落ちついて手を下す分別<sup>くだ</sup>も出なかつた。

夜汽車で新橋へ着いた時は、久しぶりに叔父夫婦の顔を見たが、夫婦とも灯<sup>ひ</sup>のせいか晴れやかな色には宗助の眼に映らなかつた。途中に事故があつて、着<sup>ちやく</sup>の時間が珍らしく三十分ほど後れたのを、宗助の過失でもあるかのように、待草臥<sup>まちくたび</sup>れた氣色<sup>けしき</sup>であつた。

宗助がこの時叔母から聞いた言葉は、

「おや宗<sup>そう</sup>さん、しばらく御目に掛<sup>か</sup>からないうちに、大変御老<sup>おふ</sup>けなすつた事<sup>おり</sup>」といつ一句であつた。御米はその折始めて叔父夫婦に紹介された。

「これがあの……」と叔母は逡巡<sup>ためら</sup>つて宗助の方を見た。御米は何

と挨拶あいさつのしようもないでの、無言のままだ頭を下げた。

小六も無論叔父夫婦と共に二人を迎いに来ていた。宗助は一眼その姿を見たとき、いつの間にか自分を凌ぐよう大きくなつた、弟の発育に驚ろかされた。小六はその時中学を出て、これから高等学校へ這入はいろうという間際まぎわであつた。宗助を見て、「兄さん」とも「御帰りなさい」とも云わないで、ただ不器用に挨拶をした。宗助と御米は一週ばかり宿屋すまい住居をして、それから今の所に引き移つた。その時は叔父夫婦がいろいろ世話を焼いてくれた。細々しき台所道具のようなものは買うまであるまい、古いのでよければと云うので、小人数に必要なだけ一通り取り揃えて送つて來た。その上、

「御前も新世帯だから、さぞ物ものいり要が多かろう」と云つて金を六十円くれた。

家うちを持つてかれこれ取り紛まぎれているうちに、早半月余はやよも経つたが、地方にいる時分あんなに気にしていた家邸いえやしきの事は、ついまだ叔父に言い出さずにいた。ある時御米が、

「あなたあの事を叔父さんにおっしゃって」と聞いた。宗助はそれで急に思い出したように、

「うん、まだ云わないよ」と答えた。

「妙ね、あれほど気にしていらしたのに」と御米がうす笑をした。

「だつて、落ちついて、そんな事を云い出す暇ひまがないんだもの」

と宗助が弁解した。

また十日ほど経つた。すると今度は宗助の方から、

「御米、あの事はまだ云わないよ。どうも云うのが面倒で厭になつた」と云い出した。

「厭なのを無理におつしやらなくつてもいいわ」と御米が答えた。  
「好いかい」と宗助が聞き返した。

「好いかいって、もともとあなたの事じやなくつて。私は先から  
どうでも好いんだわ」と御米が答えた。

その時宗助は、

「じゃ、鹿爪しかづめらしく云い出すのも何だか妙だから、そのうち機せん  
会おりがあつたら、聞くとしよう。なにそのうち聞いて見る機会おりがき

つと出て来るよ」と云つて延ばしてしまつた。

小六は何不足なく叔父の家に寝起<sup>ねおき</sup>していた。試験を受けて高等学校へ這入<sup>はい</sup>入れれば、寄宿へ入舎しなければならないと云うので、その相談まですでに叔父と打合せがしてあるようであつた。新らしく出京した兄からは別段学資の世話を受けないせいか、自分の身の上については叔父ほどに親しい相談も持ち込んで来なかつた。従兄弟の安之助とは今までの関係上大変仲が好かつた。かえつてこの方が兄弟らしかつた。

宗助は自然叔父の家<sup>うち</sup>に足が遠くなるようになつた。たまに行つても、義理一遍の訪問に終る事が多いで、帰り路にはいつもつまらない気がしてならなかつた。しまいには時候の挨拶<sup>あいさつ</sup>を済ま

すと、すぐ帰りたくなる事もあつた。こう云う時には三十分と坐つて、世間話に時間を繋ぐのにさえ骨が折れた。向うでも何だか気が置けて窮屈だと云う風が見えた。

「まあいいじやありませんか」と叔母が留めてくれるのが例であるが、そうすると、なおさらくい心持がした。それでも、たまには行かないと、心のうちで気が咎めるような不安を感じるのを、また行くようになつた。折々は、

「どうも小六が御厄介になりまして」とこつちから頭を下げて礼を云う事もあつた。けれども、それ以上は、弟の将来の学資についても、また自分が叔父に頼んで、留守中に売り払つて貰つた地所家作についても、口を切るのがつい面倒になつた。しかし宗

助が興味をもたない叔父の所へ、不精無精にせよ、時たま出掛け行くのは、単に叔父甥の血属関係を、世間並に持ち堪えるための義務心からではなくつて、いつか機会があつたら、片をつけたい或物を胸の奥に控えていた結果に過ぎないのは明かであつた。

「宗さんはどうもすっかり変つちまいましたね」と叔母が叔父に話す事があつた。すると叔父は、

「そうよなあ。やつぱり、ああ云う事があると、永くまであとへ響くものだからな」と答えて、因果は恐ろしいと云う風をする。叔母は重ねて、

「本当に、怖いもんですね。元はあんな寝入った子じやなかつた

が——どうもはしやぎ過ぎるくらい活潑かつぱつでしたからね。それが二三年見ないうちに、まるで別の人みたように老けちまつて。今じゃあなたより御爺おじいさん御爺おじいさんしていますよ」と云う。

「真逆まさか」と叔父がまた答える。

「いえ、頭や顔は別として、様子がさ」と叔母がまた弁解する。

こんな会話が老夫婦の間に取り換わされたのは、宗助が出京して以来一度や二度ではなかつた。実際彼は叔父の所へ来ると、老人の眼に映る通りの人間に見えた。

御米はどう云うものか、新橋へ着いた時、老人夫婦に紹介されたり、かつて叔父の家の敷居を跨いだ事がない。むこうから見えれば叔父さん叔母さんと丁寧ていねいに接待するが、帰りがけに、

「どうです、ちと御出かけなすつちや」などと云われると、ただ、「ありがとう」と頭を下げるだけで、ついぞ出掛けた試はなかつた。さすがの宗助さえ一度は、

「叔父さんの所へ一度行つて見ちや、どうだい」と勧めた事があるが、

「でも」と変な顔をするので、宗助はそれぎりけつしてその事を云い出さなかつた。

両家族はこの状態で約一年ばかりを送つた。すると宗助よりも氣分は若いと許された叔父が突然死んだ。病症は脊髓脳膜炎せきずいのうまくえんとかいう劇症げきしようで、二三日風邪かぜの気味で寝ねていたが、便所へ行つた帰りに、手を洗おうとして、柄杓ひしゃくを持ったまま卒倒したな

り、一いちんちに日経つか経たないうちに冷たくなつてしまつたのである。

「御米、叔父はどうとう話をしずに死んでしまつたよ」と宗助が云つた。

「あなたまだ、あの事を聞くつもりだつたの、あなたも随分執念深いのね」と御米が云つた。

それからまた一年ばかり経つたら、叔父の子の安之助が大学を卒業して、小六が高等学校の二年生になつた。叔母は安之助といつしょに中六番町に引き移つた。

三年目の夏休みに小六は房州の海水浴へ行つた。そこに一月余りも滞在しているうちに九月になり掛けたので、保田から向うへ突切つて、上総のかずさの海岸を九十九里伝いに、銚子まで來たが、そ

こから思い出したように東京へ帰つた。宗助の所へ見えたのは、  
帰つてから、まだ二三日しか立たない、残暑の強い午後である。  
真黒に焦げた顔の中に、眼だけ光らして、見違えるように、  
色くを帶びた彼は、比較的日の遠い座敷へ這入つたなり横になつ  
て、兄の帰りを待ち受けていたが、宗助の顔を見るや否や、むつ  
くり起き上がつて、

「兄さん、少し御話があつて來たんですが」と開き直られたので、  
宗助は少し驚いた氣味で、暑苦しい洋服さえ脱ぎ更えずに、小  
六の話を聞いた。

小六の云うところによると、二三日前彼が上総から帰つた晩、  
彼の学資はこの暮限り、気の毒ながら出してやれないと叔母から

申し渡されたのだそうである。小六は父が死んで、すぐと叔父に引き取られて以来、学校へも行けるし、着物も自然にできるし、小遣も適宜に貰えるので、父の存生中ぞんじょうちゅうと同じように、何不足なく暮らせて来た惰性から、その日その晩までも、ついぞ学資と云う問題を頭に思い浮べた事がなかつたため、叔母の宣告を受けた時は、茫然ぼんやりしてとかくの挨拶あいさつさえできなかつたのだと云う。

叔母は氣の毒そうに、なぜ小六の世話ができなくなつたかを、女だけに、一時間も掛かつて委しく説明してくれたそうである。それには叔父の亡くなつた事やら、継いで起る経済上の変化やら、また安之助の卒業やら、卒業後に控えている結婚問題やらが這入

つていたのだと云う。

「できるならば、せめて高等学校を卒業するまでと思つて、今日までいろいろ骨を折つたんだけれども」

叔母はこう云つたと小六は繰り返した。小六はその時ふと兄が、先年父の葬式の時に出京して、万事を片づけた後、広島へ帰るとき、小六に、御前の学資は叔父さんに預けてあるからと云つた事があるのを思い出して、叔母に始めて聞いて見ると、叔母は案外な顔をして、

「そりや、あの時、宗さんそうが若干いくらか置いて行きなすつた事は、行きなすつたが、それはもうありやしないよ。叔父さんのまだ生きて御出おいでの時分から、御前の学資は融通して來たんだから」と答え

た。

小六は兄から自分の学資がどれほどあつて、何年分の勘定かんじょうで、叔父に預けられたかを、聞いておかなかつたから、叔母からこう云われて見ると、一言ひとことも返しようがなかつた。

「御前おまえも一人じやなし、兄さんもある事だからよく相談おもとあわせをして見たら好いだろう。その代り私も宗さんに逢つて、とつくり訳わけを話しましようから。どうも、宗さんも余まり近頃は御出おいででないし、

私も御無沙汰ごぶさたばかりしているのでね、つい御前の事は御話をする訳にも行かなかつたんだよ」と叔母は最後につけ加えたそうである。

小六から一部始終いちぶしじゆうを聞いた時、宗助はただ弟の顔を眺めて、

一口、

「困つたな」と云つた。昔のように赫<sup>かつ</sup>と激して、すぐ叔母の所へ談判に押し掛ける氣色<sup>けしき</sup>もなければ、今まで自分に対して、世話にならないでも済む人のように、よそよそしく仕向けて来た弟の態度が、急に方向を転じたのを、悪いと思う様子<sup>にく</sup>も見えなかつた。

自分の勝手に作り上げた美くしい未来が、半分壊<sup>くず</sup>れかかつたのを、さも傍<sup>はた</sup>の人のせいでもあるかのごとく心を乱している小六の帰る姿を見送つた宗助は、暗い玄関の敷居の上に立つて、格子<sup>こうし</sup>の外に射す夕日をしばらく眺<sup>なが</sup>めていた。

その晩宗助は裏から大きな芭蕉<sup>ばしょう</sup>の葉を一枚剪<sup>き</sup>つて来て、それを座敷の縁に敷いて、その上に御米と並んで涼<sup>すず</sup>みながら、小六の

事を話した。

「叔母さんは、こつちで、小六さんの世話をしろつて云う気なんじやなくつて」と御米が聞いた。

「まあ、逢つて聞いて見ないうちは、どう云う 料 簡 か分らな  
いがね」と宗助が云うと、御米は、

「きつとそうよ」と答えながら、暗がりで団扇うちわをはたはた動かした。宗助は何も云わずに、頸くびを延ばして、庇ひさしと崖がけの間に細く映る空の色を眺めた。二人はそのまましばらく黙つていたが、良あつて、

「だつてそれじや無理ね」と御米がまた云つた。

「人間一人大学を卒業させるなんて、おれの手際てぎわじや到底とても駄目だ」

と宗助は自分の能力だけを明らかにした。

会話はそこで別の題目に移つて、再び小六の上にも叔母の上にも帰つて来なかつた。それから二三日するとちょうど土曜が来たので、宗助は役所の帰りに、番町の叔母の所へ寄つて見た。叔母は、

「おやおや、まあ御珍らしい事」と云つて、いつもよりは愛想よく宗助を款待してくれた。その時宗助は厭いやなのを我慢して、この四五年来溜めて置いた質問を始めて叔母に掛けた。叔母は固もどりできるだけは弁解しない訳に行かなかつた。

叔母の云うところによると、宗助の邸宅を売払つた時、叔父の手に這い入つた金は、たしかには覚えていないが、何でも、宗助のはい

ために、急場の間に合せた借財を返した上、なお四千五百円とか四千三百円とか余つたそうである。ところが叔父の意見によると、あの屋敷は宗助が自分に提供して行つたのだから、たといいくら余ろうと、余つた分は自分の所得と見做して 差支 さしつかえ ない。しかし宗助の邸宅を売つて 儲けたと云われては心持が悪いから、これは小六の名義で保管して置いて、小六の財産にしてやる。宗助はあんな事をして 廃嫡 はいぢやく にまでされかかつた奴だから、一文だつて取る権利はない。

「宗さん怒つちやいけませんよ。ただ叔父さんの云つた通りを話すんだから」と叔母が断つた。宗助は黙つてあとを聞いていた。

小六の名義で保管されべき財産は、不幸にして、叔父の手腕で、

すぐ神田の賑<sup>にぎ</sup>やかな表通りの家屋に変形した。そうして、まだ保険をつけないうちに、火事で焼けてしまった。小六には始めから話してない事だから、そのままにして、わざと知らせずにおいた。

「そう云う訳でね、まことに宗さんにも、御氣の毒だけれども、何しろ取つて返しのつかない事だから仕方がない。運だと思つて諦<sup>あき</sup>らめて下さい。もつとも叔父さんさえ生きていれば、またどうともなるんでしょうさ。小六一人ぐらいそりや訳はありますまいよ。よしなば、叔父さんがいなさらない、今にしたつて、こつちの都合さえ好ければ、焼けた家<sup>うち</sup>と同じだけのものを、小六に返すか、それでなくつても、当人の卒業するまでぐらいは、どうにかして世話をできるんですけれども」と云つて叔母はまたほかの内

幕話ををして聞かせた。それは安之助の職業についてであつた。

安之助は叔父の一人息子で、この夏大学を出たばかりの青年である。家庭で暖かに育つた上に、同級の学生ぐらいよりほかに交際のない男だから、世の中の事にはむしろ迂闊うかつと云つてもいいが、その迂闊なところにどこか鷹揚おうような趣おもむきそなを具えて実社会へ顔を出したのである。専門は工科の器械学だから、企業熱の下火になつた今日こんにちといえども、日本中にたくさんある会社に、相応の口の一つや二つあるのは、もちろんであるが、親譲りの山氣やまぎがどこかに潜ひそんでいるものと見えて、自分で自分の仕事をして見たくてならない矢先へ、同じ科の出身で、小規模ながら専有の工場を月島辺へんに建てて、独立の経営をやつている先輩に出逢つたのが縁とな

つて、その先輩と相談の上、自分も幾分かの資本を注ぎ込んで、  
いっしょに仕事をしてみようという考になつた。叔母の内幕話と  
云つたのはそこである。

「でね、少しあつた株をみんなその方へ廻す事にしたもんだから、  
今じや本当に一文なし同然な仕儀いちもん しきでいるんですよ。それは世間  
から見ると、人数は少なし、家邸いえ やしきは持つているし、樂に見え  
るのも無理のないところでしようさ。この間も原の御母おつかさんが來  
て、まああなたほど氣楽な方はない、いつ来て見ても万年青の葉  
ばかり丹念に洗つているつてね。真逆まさか そうでも無いんですけど  
も」と叔母が云つた。

宗助が叔母の説明を聞いた時は、ぼんやりしてとかくの返事が

容易に出なかつた。心のなかで、これは神経衰弱の結果、昔のよう  
に機敏で明快な判断を、すぐ作り上げる頭が失くなつた証拠しょうこ  
だろうと自覚した。叔母は自分の云う通りが、宗助に本当と受け  
られないのを気にするように、安之助から持ち出した資本の高ま  
で話した。それは五千円ほどであつた。安之助は当分の間、わざ  
かな月給と、この五千円に対する利益配当とで暮らさなければな  
らないのだそうである。

「その配当だつて、まだどうなるか分りやしないんできあね。うま  
く行つたところで、一割か一割五分ぐらいなものでしようし、ま  
た一つ間違えばまるで煙けむにならないとも限らないんですから」と  
叔母がつけ加えた。

宗助は叔母の仕打に、これと云う目立つた阿漕なところも見えないので、心の中では少なからず困つたが、小六の将来について一口の掛け合もせずに帰るのはいかにも馬鹿馬鹿しい気がした。そこで今までの問題はそこに据えつきりにして置いて、自分が当時小六の学資として叔父に預けて行つた千円の所置を聞き紹して見ると、叔母は、

「宗さん、あれこそ本当に小六が使つちまつたんですよ。小六が高等学校へ這入つてからでも、もうかれこれ七百円は掛かっているんですもの」と答えた。

宗助はついでだから、それと同時に、叔父に保管を頼んだ書画や骨董品の成行を確かめて見た。すると、叔母は、

「ありあとんだ馬鹿な目に逢つて」と云いかけたが、宗助の様子を見て、

「宗さん、何ですか、あの事はまだ御話をしなかつたんでしたかね」と聞いた。宗助がいいえと答えると、

「おやおや、それじや叔父さんが忘れちまつたんですよ」と云いながら、その顛末てんまつを語つて聞かした。

宗助が広島へ帰ると間もなく、叔父はそのうりさばきかた 売捌方さなだ を真田とかいう懇意の男に依頼した。この男は書画骨董の道に明るいとかいうので、平生そんなものの売買の周旋をして諸方へ出入するそ<sup>だれそれがし</sup>うであつたが、すぐさま叔父の依頼を引き受けて、誰某だれそれがしが何を欲しいと云うから、ちよつと拝見とか、何々氏がこう云う物を

希望だから、見せましようとか号して、品物を持つて行つたぎり、返して来ない。催促すると、まだ先方から戻つて参りませんからとか何とか言訳をするだけでかつて埒の明いた試ためしがなかつたが、とうとう持ち切れなくなつたと見えて、どこかへ姿を隠してしまつた。

「でもね、まだ屏風びょうぶが一つ残つていますよ。この間引越の時に、気がついて、こりや宗さんだから、今度こんだついでがあつたら届けて上げたらいだろうつて、安がそう云つていましたつけ」

叔母は宗助の預けて行つた品物にはまるで重きを置いていないような、ものの云い方をした。宗助も今日まで放つておくくらいだから、あまりその方面には興味きょうみを有もち得なかつたので、少しも

良心に悩まされている氣色のない叔母の様子を見ても、別に腹は立たなかつた。それでも、叔母が、

「宗さん、どうせ家うちじや使つていないんだから、なんなら持つておいでなすつちやどうです。この頃はああいうものが、大変価ねが出たと云う話はじやありませんか」と云つたときは、實際それを持つて帰る気になつた。

納戸などから取り出して貰つて、明るい所で眺めると、たしかに見み覚おぼえのある二枚折であつた。下に萩はぎ、桔梗ききょう、芒すすき、葛くず、女郎花おみなえしを隙間なく描いた上に、真丸な月を銀で出して、その横の空あいた所へ、野路のじや空月の中なる女郎花、其一と題してある。宗助は膝ひざを突いて銀の色の黒く焦こげた辺あたりから、葛の葉の風に裏を返してい

る色の乾いた様から、大福ほどな大きな丸い朱の輪廓の中に、抱一と行書で書いた落款をつくづくと見て、父の生きている当時を憶い起さずにはいられなかつた。

父は正月になると、きつとこの屏風を薄暗い蔵の中から出して、玄関の仕切りに立てて、その前へ紫檀の角な名刺入を置いて、年賀を受けたものである。その時はめでたいからと云うので、客間の床には必ず虎の双幅を懸けた。これは岸駒じやない岸岱だと父が宗助に云つて聞かせた事があるのを、宗助はいまだに記憶していた。この虎の画には墨が着いていた。虎が舌を出して谷の水を呑んでいる鼻柱が少し汚されたのを、父は苛く気にして、宗助を見るたびに、御前ここへ墨を塗つた事を覚えているか、こ

れは御前の小さい時分の悪戯だぞと云つて、おかしいような恨めしいような一種の表情をした。

宗助は屏風の前に畏まつて、自分が東京にいた昔の事を考えながら、

「叔母さん、じやこの屏風はちようだいして行きましょう」と云つた。

「ああああ、御持ちなさいとも。何なら使に持たせて上げましょう」と叔母は好意から申し添えた。

宗助は然るべく叔母に頼んで、その日はそれで切り上げて帰つた。晩食の後御米といつしよにまた縁側へ出て、暗い所で白地の浴衣を並べて、涼みながら、画の話をした。

「安さんには、御逢いなさらなかつたの」と御米が聞いた。

「ああ、安さんは土曜でも何でも夕方まで、工場にいるんだそうだ」

「随分骨が折れるでしようね」

御米はそう云つたなり、叔父や叔母の処置については、一言の批評も加えなかつた。

「小六の事はどうしたものだろう」と宗助が聞くと、「そうね」と云うだけであつた。

「理窟りくつを云えば、こつちにも云い分はあるが、云い出せば、とどのつまりは裁判沙汰になるばかりだから、証拠しょうこも何もなければ勝てる訳のものじやなし」と宗助が極端を予想すると、

「裁判なんかに勝たなくたつてもいいわ」と御米がすぐ云つたので、宗助は苦笑してやめた。

「つまりおれがあの時東京へ出られなかつたからの事さ」「そうして東京へ出られた時は、もうそんな事はどうでもよかつたんですもの」

夫婦はこんな話をしながら、また細い空を庇の下から覗いて見て、明日の天気を語り合つて蚊帳に這入つた。

次の日曜に宗助は小六を呼んで、叔母の云つた通りを残らず話して聞かせて、

「叔母さんが御前に詳しい説明をしなかつたのは、短兵急な御前の性質を知つてるせいか、それともまだ小供だと思つてわざと略

してしまつたのか、そこはおれにも分らないが、何しろ事実は今云つた通りなんだよ」と教えた。

小六にはいかに詳しい説明も腹の足しにはならなかつた。ただ、「そうですか」と云つてむずかしい不満な顔をして宗助を見た。「仕方がないよ。叔母さんだつて、安さんだつて、そう悪い料簡はないんだから」

「そりや、分っています」と弟は峻しい物の云い方をした。

「じやおれが悪いって云うんだろう。おれは無論悪いよ。昔から今日まで悪いところだらけな男だもの」

宗助は横になつて煙草を吹かしながら、これより以上は何とも語らなかつた。小六も黙つて、座敷の隅に立ててあつた二枚折の

抱一の屏風を眺めていた。

「御前あの屏風を覚えているかい」とやがて兄が聞いた。

「ええ」と小六が答えた。

「一昨日佐伯から届けてくれた。御父さんの持つてたもので、おれの手に残つたのは、今じやこれだけだ。これが御前の学資になるなら、今すぐにでもやるが、剥げた屏風一枚で大学を卒業する訳にも行かずな」と宗助が云つた。そうして苦笑しながら、

「この暑いのに、こんなものを立てて置くのは、気狂じみていいが、入れておく所がないから、仕方がない」と云う述懐をした。

小六はこの氣楽なような、ぐずのような、自分とは余りに懸け

隔たつている兄を、いつも物足りなくは思うものの、いざという場合に、けつして喧嘩けんかはし得なかつた。この時も急に癇かんしゃく癇かんしゃくの角つのを折られた氣味で、

「屏風はどうでも好いが、これから先僕はどうしたもんでしょう」と聞き出した。

「それは問題だ。何しろことしこうぱいにきまれば好い事だから、まあよく考えるさ。おれも考えて置こう」と宗助が云つた。

弟は彼の性質として、そんな中ぶらりんの姿は嫌きらいである、学校へ出ても落ちついて稽古けいごもできず、下調も手につかないような境遇は、とうてい自分には堪たまえられないと云う訴うつたえを切にやり出したが、宗助の態度は依然として変らなかつた。小六があまり癇かんの高

い不平を並べると、

「そのくらいな事でそれほど不平が並べられれば、どこへ行つたつて大丈夫だ。学校をやめたつて、いつこう 差支さしつかえない。御前の方がおれよりよっぽどえらいよ」と兄が云つたので、話はそれぎり頓挫とんざして、小六はどうとう本郷へ帰つて行つた。

宗助はそれから湯を浴びて、晩食ばんめしを済まして、夜は近所の縁日へ御米といつしょに出掛けた。そうして手頃な花物を二鉢買つて、夫婦して一つずつ持つて帰つて來た。夜露にあてた方がよからうと云うので、崖下がけしたの雨戸を明けて、庭先にそれを二つ並べて置いた。

蚊帳かやの中へ這入はいつた時、御米は、

「小六さんの事はどうなつて」と夫に聞くと、「まだどうもならないさ」と宗助は答えたが、十分ばかりの後夫婦ともすやすや寝入つた。

翌日眼が覚めて役所の生活が始まると、宗助はもう小六の事を考える暇をもたなかつた。家へ帰つて、のつそりしている時ですら、この問題を確的<sup>はつきり</sup>眼の前に描いて明らかにそれを眺める事を憚かつた。髪の毛の中に包んである彼の脳は、その煩わしさに堪えなかつた。昔は数学が好きで、随分込み入つた幾何<sup>きか</sup>の問題を、頭の中で明瞭<sup>めいりょう</sup>な図にして見るだけの根氣があつた事を憶い出すと、時日の割には非常に烈しく来たこの変化が自分にも恐ろしく映つた。

それでも日に一度ぐらいは小六の姿がぼんやり頭の奥に浮いて来る事があつて、その時だけは、あいつの将来も何とか考えておかなくつちやならないと云う気も起つた。しかしすぐあとから、まあ急ぐにも及ぶまいぐらいに、自分と打ち消してしまうのが常であつた。そうして、胸の筋きんが一本鉤かぎに引っ掛けたような心を抱いだいて、日を暮らしていた。

そのうち九月も末になつて、毎晚天あまの河がわが濃く見えるある宵よいの事、空から降つたように安之助がやつて來た。宗助にも御米にも思い掛けないほど稀すくたまな客なので、二人とも何か用があつての訪問だろうと推すいしたが、はたして小六に関する件であつた。

この間月島の工場へひよつくり小六がやつて來て云うには、自

分の学資についての詳しい話は兄から聞いたが、自分も今まで学問をやって来て、とうとう大学へ這入れずじまいになるのはいかにも残念だから、借金でも何でもして、行けるところまで行きたが、何か好い工夫はあるまいかと相談をかけるので、安之助はよく宗さんにも話して見ようと答えると、小六はたちまちそれを遮ぎさえつて、兄はどうてい相談になつてくれる人じやない。自分が大学を卒業しないから、他ひとも中途でやめるのは当然だぐらいに考えている。元来今度の事も元を糺せば兄が責任者であるのに、あとの通りいつこう平氣なもので、他が何を云つても取り合ってくれない。だから、ただ頼りにするのは君だけだ。叔母さんに正式に断わられながら、また君に依頼するのはおかしいようだが、君の

方が叔母さんより話が分るだろうと思つて来たと云つて、なかなか動きそうもなかつたそうである。

安之助は、そんな事はない、宗さんも君の事ではだいぶ心配して、近いうちまた家へ相談に来るはすになつてゐるんだからと慰めて、小六を帰したんだと云う。帰るときに、小六は袂たもとから半紙を何枚も出して、欠席届が入用にゅうようだからこれに判を押してくれと請求して、僕は退学か在学か片がつくまでは勉強ができるないから、毎日学校へ出る必要はないんだと云つたそうである。

安之助は忙がしいとかで、一時間足らず話して帰つて行つたが、小六の所置については、両人の間に具体的の案は別に出なかつた。いずれ緩くりみんなで寄つてきめよう、都合がよければ小六も列

席するが好かろうというのが別れる時の言葉であつた。二人になつたとき、御米は宗助に、

「何を考えていらつしやるの」と聞いた。宗助は両手を兵児帯の間に挟んで、心持肩を高くしたなり、

「おれももう一返小六みたようになつて見たい」と云つた。「こつちじや、向むこうがおれのような運命に陥おちいるだろうと思つて心配しているのに、向じや兄貴なんざあ眼中にないから偉いや」

御米は茶器を引いて台所へ出た。夫婦はそれぎり話を切り上げて、また床とこを延べて寝ねた。夢の上に高い銀河あまのがわが涼しく懸かかつた。

次の週間には、小六も来ず、佐伯からの音信もなく、宗助の家庭はまた平日の無事に帰つた。夫婦は毎朝露に光る頃起きて、美

しい日をひさし廂の上に見た。夜は煤すすだけ竹の台を着けた洋ランプの両側に、長い影えが描いて坐つていた。話が途切れた時はひとりとして、柱時計の振子の音だけが聞える事も稀まれではなかつた。

それでも夫婦はこの間に小六の事を相談した。小六がもしどうしても学問を続ける氣なら無論の事、そうでなくとも、今の下宿を一時引き上げなければならなくなるのは知れているが、そうすればまた佐伯へ帰るか、あるいは宗助の所へ置くよりほかに途はない。佐伯ではいつたんああ云い出したようなものの、頼んで見たら、当分家うちへ置くぐらいの事は、好意上してくれまいものでもない。が、その上修業をさせるとなると、月謝小遣その他は宗助の方で担任たんにんしなければ義理が悪い。ところがそれは家計上宗助

の堪たえるところでなかつた。月々の収支を事細かに計算して見た  
ふたり  
兩人は、

「どうてい駄目だね」

「どうしたつて無理ですわ」と云つた。

夫婦の坐すわつている茶の間の次が台所で、台所の右に下女部屋、  
左に六畳が一間ひとまある。下女を入れて三人の小人数こにんずだから、この六  
畳には余り必要を感じない御米は、東向の窓側にいつも自分の鏡  
台を置いた。宗助も朝起きて顔を洗つて、飯を済ますと、ここへ  
来て着物を脱ぬぎ更かえた。

「それよりか、あの六畳を空あけて、あすこへ来ちやいけなくつて」と御米が云い出した。御米の考えでは、こうして自分の方で部屋

と食物だけを分担して、あとのところを月々いくらか佐伯から助すけて貰もらつたら、小六の望み通り大学卒業までやつて行かれようと云うのである。

「着物は安さんの古いのや、あなたのを直して上げたら、どうかなるでしよう」と御米が云い添えた。実は宗助にもこんな考が、多少頭に浮かんでいた。ただ御米に遠慮がある上に、それほど気が進まなかつたので、つい口へ出さなかつたまでだから、細君からこう反あべこべ対に相談を掛けられて見ると、固もとよりそれを拒むだけの勇氣はなかつた。

小六にその通りを通知して、御前さえそれで差さしつかえ支つかえなければ、おれがもう一遍佐伯へ行つて掛け合つて見ると、手紙で問い合わせ

ると、小六は郵便の着いた晩、すぐ雨の降る中を、傘に音を立てやつて来て、もう学資ができでもしたように嬉しがつた。

「何、叔母さんの方じや、こつちでいつまでもあなたの事を放り出したまんま、構わずにおくもんだから、それでああおつしやるのよ。なに兄さんだつて、もう少し都合が好ければ、疾うにもどうにかしたんですけども、御存じの通りだから実際やむを得なかつたんですね。しかしこつちからこう云つて行けば、叔母さんだつて、安さんだつて、それでも否だとは云われないわ。きっとできるから安心していらつしやい。わたし私受合うわ」

御米にこう受合つて貰つた小六は、また雨の音を頭の上に受けて本郷へ帰つて行つた。しかし中一日置いて、兄さんはまだ行か

ないんですかと聞きに来た。また三日ばかり過ぎてから、今度は叔母さんの所へ行つて聞いたら、兄さんはまだ来ないそうだから、なるべく早く行くように勧めすすてくれと催促して行つた。

宗助が行く行くと云つて、日を暮らしているうちに世の中はようやく秋になつた。その朗らかな或日曜の午後に、宗助はあまり佐伯へ行くのがおく後れるので、この要件を手紙に認したためて番町へ相談したのである。すると、叔母から安之助は神戸へ行つて留守だと云う返事が来たのである。

佐伯さえき

の叔母の尋ねて来たのは、土曜の午後の二時過であつた。

その日は例になく朝から雲が出て、突然と風が北に變つたようにな  
寒かつた。叔母は竹で編んだ丸い火桶ひおけの上へ手を翳かざして、

「何ですね、御米さん。この御部屋は夏は涼しそうで結構だが、

これからはちと寒うござんすね」と云つた。叔母は癖のある髪を、

奇麗に髪に結まげつて、古風な丸打の羽織の紐ひもを、胸の所で結んでい

た。酒の好きな質たちで、今でも少しづつは晩酌をやるせいが、色

沢やもよく、でっぷり肥つてゐるから、年よりはよほど若く見え

る。御米は叔母が来るたんびに、叔母さんは若いのねと、後でよ

く宗助そうすけに話した。すると宗助がいつでも、若いはずだ、あの年

になるまで、子供をたつた一人しか生まないんだからと説明した。

御米は實際そうかも知れないと思つた。そうしてこう云われた後では、折々そつと六畳へ這入つて、自分の顔を鏡に映して見た。その時は何だか自分の頬が見るたびに癢けて行くような気がした。御米には自分と子供とを連想して考えるほど辛い事はなかつたのである。裏の家主の宅に、小さい子供が大勢いて、それが崖の上の庭へ出て、ブランコへ乗つたり、鬼ごっこをやつたりして騒ぐ声が、よく聞えると、御米はいつでも、はかないような恨めしいような心持になつた。今自分の前に坐つてゐる叔母は、たつた一人の男の子を生んで、その男の子が順当に育つて、立派な学士になつたればこそ、叔父が死んだ今日でも、何不足のない顔をして、腮などは二重に見えるくらいに豊なのである。御母さんは肥

つて いるから 剣呑けんのんだ、 気をつけないと 卒中で やられるかも 知れ  
 ないと、 安之助やすのすけが 始終しじゅう 心配する そ うだけれども、 御米から 云  
 わせると、 心配する 安之助も、 心配される 叔母も、 共に 幸福を 享う  
 け合つて いるものとしか 思われなかつた。

「安さんは」と 御米が 聞いた。

「ええ ようやくね、 あなた。 一昨日の 晩帰おとといりましてね。 それで つ  
 いつい 御返事おくも 後おくれちまつて、 まことに 済みません ような 訳で」  
 と 云つたが、 返事の方は それなりにして、 話は また 安之助へ 戻つ  
 て 来た。

「あれもね、 御蔭おかげさまで ようやく 学校だけは 卒業しましたが、 こ  
 れからが 大事の ところで、 心配で ございます。 —— それでも この

九月から、月島の工場の方へ出る事になりまして、まあさいわいとこの分で勉強さえして行つてくれれば、この末ともに、そういう事も無からうかと思つてゐんですけども、まあ若いものの事ですから、これから先どう変化するか分りやしませんよ」

御米はただ結構でござりますとか、おめでとうござりますとか云う言葉を、間々 あいだあいだ に挟んでいた。

「神戸へ参つたのも、全くその方の用向なので。石油発動機とか何とか云うものを 鰐船 かづおぶね へ据え付けるんだとかつてねあなた」

御米にはまるで意味が分らなかつた。分らないながらただへええと受けていると、叔母はすぐ後あとを話した。

「私にも何のこつたか、ちつとも分らなかつたんですが、安之助

の講釈を聞いて始めて、おやそうかいと云うような訳でしてね。

——もつとも石油発動機は今もつて分らないんですけれども」と云いながら、大きな声を出して笑った。「何でも石油を焚いて、それで船を自由にする器械なんだそうですが、聞いて見るとほど重宝なものらしいんですよ。それさえ付ければ、舟を漕ぐ手間がまるで省けるとかでね。五里も十里も沖へ出るのに、大変楽なんですとさ。ところがあなた、この日本全国で鰐船の数つたら、それこそ大したものでしよう。その鰐船が一つずつこの器械を見え付けるようになつたら、莫大な利益だつて云うんで、この頃は夢中になつてその方ばかりに掛つているようですよ。莫大な利益はありがたいが、そう凝つて身体こからだでも悪くしちゃつまらない

じやないかつて、この間も笑つたくらいで」

叔母はしきりに鰹船と安之助の話をした。そうして大得意のように見えたが、小六の事はなかなか云い出さなかつた。もう疾に帰るはずの宗助もどうしたか帰つて来なかつた。

彼はその日役所の帰りがけに駿河台下まで来て、電車を下りて、酸いものを頬張つたような口を穿めて一二町歩いた後、ある歯医者の門を潜つたのである。三四日前彼は御米と差向いで、夕飯の膳に着いて、話しながら箸を取つてゐる際に、どうした拍子か、前歯を逆にぎりりと噛んでから、それが急に痛み出した。指で搖かすと、根がぐらぐらする。食事の時には湯茶が染みる。口を開けて息をすると風も染みた。宗助はこの朝歯を磨くために、

わざと痛い所を避けて楊枝を使いながら、口の中を鏡に照らして見たら、広島で銀を埋めた一枚の奥歯と、研いだように磨り減らした不揃の前歯とが、にわかに寒く光つた。洋服に着換える時、「御米、おれは歯の性しょうがよっぽど悪いと見えるね。こうやると大抵動くぜ」と下歯を指で動かして見せた。御米は笑いながら、

「もう御年のせいよ」と云つて白い襟えりを後へ廻つて襯衣シャツへ着けた。

宗助はその日の午後とうとう思い切つて、歯医者へ寄つたのである。応接間へ通ると、大きな洋卓テーブルの周囲まわりに天鵝絨びろうどで張つた腰掛なげが並んでいて、待ち合している三四人が、うずくまるようあこに腮あごを襟えりに埋うずめていた。それが皆女であつた。奇麗な茶色の瓦斯暖炉ガスストーブには火がまだ焚たいてなかつた。宗助は大きな姿見に映る白壁の色

を斜めに見て、番の来るのを待っていたが、あまり退屈になつたので、洋卓の上に重ねてあつた雑誌に眼を着けた。一二冊手に取つて見ると、いずれも婦人用のものであつた。宗助はその口絵に出ている女の写真を、何枚も繰り返して眺めた。<sup>なが</sup>それから「成功」と云う雑誌を取り上げた。その初めに、成功の秘訣<sup>ひけつ</sup>というようなものが箇条書にしてあつたうちに、何でも猛進しなくてはいけないと云う一力条と、ただ猛進してもいけない、立派な根底の上に立つて、猛進しなくてはならないと云う一力条を読んで、それなり雑誌を伏せた。「成功」と宗助は非常に縁の遠いものであつた。宗助はこういう名の雑誌があると云う事さえ、今日まで知らなかつた。それでまた珍らしくなつて、いつたん伏せたのを

また開けて見ると、ふと仮名の交らない四角な字が二行ほど並んでいた。それには風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団ぎよいちだんとあつた。宗助は詩とか歌とかいうものには、元から余り興味を持たない男であつたが、どう云う訳かこの二句を読んだ時に大変感心した。対句が旨くできたとか何とか云う意味ではなくつて、こんな景色けしきと同じような心持になれたら、人間もさぞ嬉しかろうと、ひよつと心が動いたのである。宗助は好奇心からこの句の前に付いている論文を読んで見た。しかしそれはまるで無関係のように思われた。ただこの二句が雑誌を置いた後あとでも、しきりに彼の頭の中を徘徊はいかいした。彼の生活は実際この四五年来こういう景色に出逢つた事がなかつたのである。

その時向うの戸が開いて、紙片を持った書生が野中さんと宗助を手術室へ呼び入れた。

中へ這入ると、そこは応接間よりは倍も広かつた。光線がなるべく余計取れるように明るく拵えた部屋の二側に、手術用の椅子を四台ほど据えて、白い胸掛をかけた受持の男が、一人ずつ別々に療治をしていた。宗助は一番奥の方にある一脚に案内され、これへと云われるので、階段のようなものの上へ乗つて、椅子へ腰をおろした。書生が厚い縞入りの前掛で丁寧に膝から下を包んでくれた。

こう穩やかに寝かされた時、宗助は例の歯がさほど苦になるほど痛んでいないと云う事を発見した。そればかりか、肩も背も、

腰の周りも、心安く落ちついて、いかにも楽に調子が取れている事に気がついた。彼はただ仰向いて天井から下っている瓦斯管を眺めた。そうしてこの構と設備では、帰りがけに思つたより高い療治代を取られるかも知れないと気遣つた。

ところへ顔の割に頭の薄くなり過ぎた肥つた男が出て来て、大変丁寧に挨拶をしたので、宗助は少し椅子の上で狼狽たように首を動かした。肥つた男は一応容体を聞いて、口中を検査して、宗助の痛いと云う歯をちょっと揺つて見たが、

「どうもこう弛みますと、とても元のように繋る訳には参りますまいと思いますが。何しろ中がエソになつておりますから」と云つた。

宗助はこの宣告を淋<sup>さび</sup>しい秋の光のように感じた。もうそんな年なんでしょうかと聞いて見たくなつたが、少しきまりが悪いので、ただ、

「じゃ癒<sup>なお</sup>らないんですか」と念を押した。

ふと  
肥<sup>ふと</sup>つた男は笑いながらこう云つた。――

「まあ癒らないと申し上げるよりほかに仕方がござんせんな。やむを得なければ、思い切つて抜いてしまうんですけど、今のところでは、まだそれほどでもございますまいから、ただ御痛みだけを留めておきましよう。何しろエソ――エソと申しても御分りにならないかも知れませんが、中がまるで腐つております」

宗助は、そうですかと云つて、ただ肥つた男のなすがままにし

ておいた。すると彼は器械をぐるぐる廻して、宗助の歯の根へ穴を開け始めた。そうしてその中へ細長い針のようなものを刺し通しては、その先を嗅いでいたが、しまいに糸ほどな筋を引き出して、神経がこれだけ取れましたと云いながら、それを宗助に見せてくれた。それから薬でその穴を埋めて、明日またいらつしやいと注意を与えた。

椅子いすを下りるとき、身体からだが真直まっすぐになつたので、視線の位置が天井からふと庭先に移つたら、そこにあつた高さ五尺もあろうと云う大きな鉢はちゅう栽はうえの松が宗助の眼に這入はいつた。その根方の所を、草鞋わらじがけの植木屋しちやが丁寧ていねいにこもこもくるに薦くるで包んでいた。だんだん露が凝こつて霜になる時節なので、余裕よゆうのあるものは、もう今時分から手廻

しをするのだと気がついた。

帰りがけに玄関脇の薬局で、粉薬のまま含嗽剤こぐすりを受取つて、それを百倍の微温湯びおんとうに溶解して、一日十数回使用すべき注意を受けた時、宗助は会計の請求した治療代の案外廉がんそうざいなのを喜んだ。これならば向うで云う通り四五回通かよつたところが、さして困難でもないと思つて、靴はを穿こうとすると、今度は靴の底がいつの間にか破れている事に気がついた。

「うち 宅うちへ着いた時は 一足違ひとあしちがいで叔母おばさんがもう帰つたあとであつた。

宗助は、

「おお、そうだつたか」と云いながら、はなはだ面倒めんどうそうに洋服えいふくを脱ぎ更かえて、いつもの通り火鉢ひばちの前に坐つた。御米は襯衣シャツや洋ズ

袴や靴足袋を一抱にして六畳へ這入つた。宗助はぼんやりして、煙草を吹かし始めたが、向うの部屋で、刷毛を掛ける音がし出した時、

「御米、佐伯の叔母さんは何とか云つて來たのかい」と聞いた。歯痛が自から治まつたので、秋に襲われるような寒い気分は、少し軽くなつたけれども、やがて御米が隠袋から取り出して来た粉薬を、温ま湯に溶いて貰つて、しきりに含嗽を始めた。その時彼は縁側へ立つたまま、

「どうも日が短かくなつたなあ」と云つた。

やがて日が暮れた。昼間からあまり車の音を聞かない町内は、宵の口から寂としていた。夫婦は例の通り洋灯の下に寄つた。広

い世の中で、自分達の坐つてゐる所だけが明るく思われた。そうしてこの明るい灯影に、宗助は御米だけを、御米は宗助だけを意識して、洋灯の力の届かない暗い社会は忘れていた。彼らは毎晩こう暮らして行く裡に、自分達の生命を見出していたのである。

この静かな夫婦は、安之助の神戸から土産に買つて来たと云う養老昆布の缶をがらがら振つて、中から山椒入りの小さく結んだ奴を撰り出しながら、緩くり佐伯からの返事を語り合つた。

「しかし月謝と小遣ぐらいは都合してやつてくれても好さそくなもんじやないか」

「それができないんだつて。どう見積つても両方寄せると、十円にはなる。十円と云う纏まとまつた御金を、今のところ月々出すのは骨

が折れるつて云うのよ」

「それじやことしの暮まで二十何円ずつか出してやるのも無理じゃないか」

「だから、無理をしても、もう一二ヶ月のところだけは間に合せるから、そのうちにどうかして下さいと、安さんがそう云うんだつて」

「実際できないのかな」

「そりや私には分らないわ。何しろ叔母さんが、そう云うのよ」

「鰯かつおぶね舟もうで儲けたら、そのくらい訳なさそうなもんじやないか」「本当ね」

御米は低い声で笑つた。宗助もちよつと口の端はたを動かしたが、

話はそれで途切れとぎてしまつた。しばらくしてから、

「何しろ小六は家うちへ来るときめるよりほかに道はあるまいよ。後あとはその上の事だ。今じや学校へは出でているんだね」と宗助が云つた。

「そうでしょうう」と御米が答えるのを聞き流して、彼は珍らしく書斎に這入はいつた。一時間ほどして、御米がそつと襖ふすまを開あけて覗のぞいて見ると、机に向つて、何か読んでいた。

「勉強? もう御休みなさらなくつて」と誘われた時、彼は振り返つて、

「うん、もう寝よう」と答えながら立ち上あがつた。

寝る時、着物を脱いで、寝巻の上に、絞しぼりの兵児帶へこおびをぐるぐる

巻きつけながら、

「今夜は久し振に論語を読んだ」と云つた。

「論語に何かあつて」と御米が聞き返したら、宗助は、「いや何にもない」と答えた。それから、「おい、おれの歯はやつぱり年せいだとさ。ぐらぐらするのはとても癒<sup>なお</sup>らないそうだ」と云いつつ、黒い頭を枕の上に着けた。

## 六

小六こうくはともかくも都合しだい下宿を引き払つて兄の家へ移る事に相談ととのが調ととのつた。御米およねは六畳に置きつけた桑くわの鏡台ながを眺めて、ち

よつと残り惜しい顔をしたが、

「こうなると少し遣場に困るのね」と訴えるように宗助に告げた。実際ここを取り上げられては、御米の御化粧をする場所が無くなってしまうのである。宗助は何の工夫もつかずに、立ちながら、向うの窓側に据えてある鏡の裏を斜に眺めた。すると角度の具合で、そこに御米の襟元から片頬が映っていた。それがいかにも血色のわるい横顔なのに驚かされて、

「御前、どうかしたのかい。大変色が悪いよ」と云いながら、鏡から眼を放して、実際の御米の姿を見た。髪が乱れて、襟の後の辺が垢で少し汚れていた。御米はただ、

「寒いせいなんでしょう」と答えて、すぐ西側に付いている。

一い

間の戸棚を明けた。下には古い創だらけの筆笥があつて、上には支那鞄と柳行李が二つ三つ載つていた。

「こんなもの、どうしたつて片づけようがないわね」  
「だからそのままにしておくさ」

小六のここへ引移つて来るのは、こう云う点から見て、夫婦のいずれにも、多少迷惑であつた。だから来ると云つて約束しておきながら、今だに来ない小六に対しては、別段の催促もしなかつた。一日延びれば延びただけ窮屈が逃げたような気がどこかでした。小六にもちよどそれと同じ憚がありあつたので、いられる限は下宿にいる方が便利だと胸をきめたものか、つい一日一日と引越しを前へ送つていた。その癖彼の性質として、兄夫婦のごとく、荏じ

んぜん  
再の境に落ちついてはいられなかつたのである。

そのうち薄い霜が降りて、裏の芭蕉を見事に摧いた。朝は崖上がけうえの家主やぬしの庭の方で、鶴ひよどりが銳どい声を立てた。夕方には表を急ぐ豆腐屋の喇叭らっぱに交つて、円明寺の木魚の音が聞えた。日はますます短かくなつた。そうして御米の顔色は、宗助が鏡の中に認めた時よりも、爽かにはならなかつた。夫が役所から帰つて来て見ると、六畳で寝ている事が一二度あつた。どうかしたかと尋ねると、ただ少し心持が悪いと答えるだけであつた。医者に見て貰えと勧めると、それには及ばないと云つて取り合わなかつた。

宗助は心配した。役所へ出ていてもよく御米の事が気にかかるて、用の邪魔になるのを意識する時もあつた。ところがある日帰

りがけに突然電車の中で膝ひざを拍うつた。その日は例になく元気よく格子を明けて、すぐと勢いきおいよく今日はどうだいと御米に聞いた。御米がいつもの通り服や靴足袋くつたびを一纏ひとまとめにして、六畳へ這入はいる後あとから追ついて来て、

「御米、御前子供おまいができるんじやないか」と笑いながら云つた。  
 御米は返事もせずに俯向うつむいてしきりに夫の背広せびろの埃ほこりを払つた。刷毛ラッシの音がやんでもなかなか六畳から出て来ないので、また行つて見ると、薄暗い部屋の中で、御米はたつた一人寒そうに、鏡台の前に坐すわつっていた。はいと云つて立つたが、その声が泣いた後の声のようであつた。

その晩夫婦は火鉢ひばちに掛けた鉄瓶てっぴんを、双方から手で掩おおうように

して差し向つた。

「どうですな世の中は」と宗助が例にない浮いた調子を出した。  
御米の頭の中には、夫婦にならない前の、宗助と自分の姿が奇麗きれいに浮んだ。

「ちつと、面白くしようじやないか。この頃ごろはいかにも不景気だよ」と宗助がまた云つた。二人はそれから今度の日曜にはいつしょにどこへ行こうか、ここへ行こうかと、しばらくそればかり話し合つていた。それから二人の春着の事が題目になつた。宗助の同僚の高木とか云う男が、細君に小袖こそで<sub>かせ</sub>とかを強請ねだられた時、おれは細君の虚榮心を満足させるために稼いでるんじやないと云つて跳ねつけたら、細君がそりや非道ひどい、実際寒くなつても着て出る

ものがないんだと弁解するので、寒ければやむを得ない、夜具を着るとか、毛布を被るとかして、当分我慢しろと云つた話を、宗助はおかしく繰り返して御米を笑わした。御米は夫のこの様子を見て、昔がまた眼の前に戻つたような気がした。

「高木の細君は夜具でも構わないが、おれは一つ新らしい外套マントを揃えたいな。この間歯医者へ行つたら、植木屋こもが薦で盆栽ぼんさいの松の根を包んでいたので、つくづくそう思つた」

「外套が欲しいって」

「ああ」

御米は夫の顔を見て、さも氣の毒だと云う風に、「御揃おそらえなさいな。月賦で」と云つた。宗助は、

「まあ止そうよ」と急に侘しく答えた。そうして「時に小六はいつから来る気なんだろう」と聞いた。

「来るのは厭なんでしょう」と御米が答えた。御米には、自分が始めから小六に嫌われていると云う自覚があつた。それでも夫の弟だと思うので、なるべくは反を合せて、少しでも近づけるように近づけるようになると、今日まで仕向けて来た。そのためか、今では以前と違つて、まあ普通の小舅ぐらいの親しみはあると信じて いるようなものの、こんな場合になると、つい実際以上にも気を回して、自分が小六の来ない唯一の原因のように考えられるのであつた。

「そりや下宿からこんな所へ移るのは好かないだろうよ。ちょ

うどこつちが迷惑を感じる通り、向うでも窮屈を感じる訳だから。  
 われだつて、小六が来ないとすれば、今のうち思い切つて外套を  
 作るだけの勇氣があるんだけれども」

宗助は男だけに思い切つてこう云つてしまつた。けれどもこれ  
 だけでは御米の心を尽していなかつた。御米は返事もせずに、し  
 ばらく黙つていたが、細い腮あご<sub>えり</sub>の中へ埋うめ、上眼うわめを使つ  
 て、

「小六さんは、まだ私の事を悪んでいらつしやるでしようか」と  
 聞き出した。宗助が東京へ来た当座は、時々これに類似の質問を  
 御米から受けて、その都度慰めるのにだいぶ骨の折れた事もあつ  
 たが、近來は全く忘れたように何も云わなくなつたので、宗助も

つい気に留めなかつたのである。

「またヒステリーが始まつたね。好いじやないか小六なんぞが、どう思つたつて。おれさえついてれば」

「論語にそう書いてあつて」

御米はこんな時に、こういう冗談じょうだんを云う女であつた。宗助は

「うん、書いてある」と答えた。それで二人の会話がしまいになつた。

翌日宗助が眼を覚ますと、亞鉛張トタンぱりの底ひさしの上で寒い音がした。

御米が襷たすき掛けのまま枕元へ来て、

「さあ、もう時間よ」と注意したとき、彼はこの点滴てんてきの音を聞

きながら、もう少し暖かい蒲団の中に温もつていたかつた。けれども血色のよくない御米の、かいがいしい姿を見るや否や、「おい」と云つて直起き上つた。

外は濃い雨に鎖とざされていた。崖がけの上の孟宗竹もうそうちくが時々鬢たてがみを振ふるうように、雨を吹いて動いた。この侘わびしい空の下へ濡れに出る宗助に取つて、力になるものは、暖かい味噌汁みそしると暖かい飯よりほかになかつた。

「また靴の中が濡れる。どうしても二足持つていないと困る」と云つて、底に小さい穴のあるのを仕方なしに穿はいて、洋袴ズボンの裾すそを一寸ばかりまくり上げた。

午過ひるすぎに帰つて来て見ると、御米は金鹽かなだらいの中に雜巾ぞうきんを浸つつた。

けて、六畳の鏡台の傍そばに置いていた。その上の所だけ 天井てんじょうの色が変つて、時々雲しづくが落ちて来た。

「靴ばかりじゃない。家うちの中まで濡ぬれるんだね」と云つて宗助は苦笑した。御米はその晩夫のために置炬燵おきびこたつへ火を入れて、スコツチの靴下と縞羅紗しまらしゃ<sub>ズボン</sub>の洋袴を乾かした。

明あくる日もまた同じように雨が降つた。夫婦もまた同じように同じ事を繰り返した。その明る日もまだ晴れなかつた。三日目の朝になつて、宗助は眉まゆを縮めて舌打をした。

「いつまで降る気なんだ。靴がじめじめして我慢にも穿けやしない」

「六畳だつて困るわ、ああ漏もつちや」

夫婦は相談して、雨が晴れしだい、家根つくろを繕つて貰うように家やへ主ぬしへ掛け合う事にした。けれども靴の方は何ともしようがなかつた。宗助はきしんで這入はいらないのを無理に穿いて出て行つた。  
 幸さいわいにその日は十一時頃からからりと晴れて、垣すゞめに雀の鳴く小春こはる日和びよりになつた。宗助が帰つた時、御米は例いつもより冴え冴えしい顔色をして、

「あなた、あの屏風びょうぶを売つちゃいけなくつて」と突然聞いた。  
 抱ほういつ一の屏風はせんだつて佐伯さえきから受取つたまま、元の通り書斎の隅に立ててあつたのである。二枚折だけども、座敷の位置と広さから云つても、実はむしろ邪魔な裝飾であつた。南へ廻すと、玄関からの入口を半分塞ふさいでしまうし、東へ出すと暗くなる、と

云つて、残る一方へ立てれば床の間を隠すので、宗助は、

「せつかく親爺の記念だと思つて、取つて来たようなものの、しようがないねこれじや、場塞<sup>ばふさ</sup>げで」と零<sup>こぼ</sup>した事も一二度あつた。

その都度御米は真丸な縁<sup>ふち</sup>の焼けた銀の月と、絹地からほとんど区別できぬような穗<sup>ほすき</sup>芒<sup>なが</sup>の色を眺<sup>なが</sup>めて、こんなものを珍重する人の気が知れないと云うような見えをした。けれども、夫を憚<sup>はばか</sup>つて、あからさまには何とも云い出さなかつた。ただ一<sup>いつ</sup>返<sup>ぺん</sup>

「これでもいい絵なんでしょうかね」と聞いた事があつた。その時宗助は始めて抱一の名を御米に説明して聞かした。しかしそれは自分が昔<sup>むか</sup>し父から聞いた覚<sup>おぼえ</sup>のある、朧<sup>おぼろげ</sup>気な記憶を好<sup>いい</sup>加減に繰り返すに過ぎなかつた。実際の画の価値や、また抱一について

の詳しい歴史などに至ると宗助にもその実はなはだ覚束なかつたのである。

ところがそれが偶然御米のために妙な行為の動機を構成する原因となつた。過去一週間夫と自分の間に起つた会話に、ふとの知識を結びつけて考え得た彼女はちよつと微笑んだ。この日雨が上つて、日脚<sup>ひあし</sup>がさつと茶の間の障子<sup>しようじ</sup>に射した時、御米は不斷着の上へ、妙な色の肩掛とも、襟卷<sup>えりまき</sup>ともつかない織物を纏つて外へ出た。通りを二丁目ほど来て、それを電車の方角へ曲つて真直<sup>つすぐ</sup>に来ると、乾物屋<sup>かんぶつ</sup>と麺麪屋<sup>パン</sup>の間に、古道具を売つてゐる食卓なり大きな店があつた。御米はかつてそこで足の畳み込める食卓を買つた記憶がある。今火鉢<sup>ひばち</sup>に掛けてある鉄瓶<sup>てつびん</sup>も、宗助がここ

から提<sup>さ</sup>げて帰つたものである。

御米は手を袖<sup>そで</sup>にして道具屋の前に立ち留まつた。見ると相変らず新らしい鉄瓶がたくさん並べてあつた。そのほかには時節柄とでも云うのか火鉢<sup>ひばち</sup>が一番多く眼に着いた。しかし骨董<sup>こつとう</sup>と名のつくほどのものは、一つもないようであつた。ひとり何とも知れぬ大きな亀の甲<sup>こう</sup>が、真向<sup>まむこう</sup>に釣るしてあつて、その下から長い黄ばんだ払子<sup>ほっす</sup>が尻尾<sup>しっぽ</sup>のように出ていた。それから紫檀<sup>しちなん</sup>の茶棚<sup>ちゃだな</sup>が一つ二つ飾つてあつたが、いずれも狂<sup>くるい</sup>の出そうな生なまものばかりであつた。しかし御米にはそんな区別はいつこう映らなかつた。ただ掛け物も屏風<sup>びょうぶ</sup>も一つも見当らない事だけ確かめて、中へ這入つた。御米は無論夫が佐伯から受取つた屏風<sup>びょうぶ</sup>を、いくらかに売り払

うつもりでわざわざここまで足を運んだのであるが、広島以来こう云う事にだいぶ経験を積んだ御蔭で、普通の細君のような努力も苦痛も感ぜずに、思い切つて亭主と口を利く事ができた。亭主は五十恰好の色の黒い頬の瘠けた男で、鼈甲の縁を取つた馬鹿に大きな眼鏡を掛けて、新聞を読みながら、疣だらけの唐金の火鉢に手を翳していた。

「そうですな、拝見に出てもようがす」と軽く受合つたが、別に氣の乗つた様子もないでの、御米は腹の中で少し失望した。しかし自分からがすでに大した望を抱いて出て来た訳でもないので、こう簡易に受けられると、こつちから頼むようにしても、見て貰わなければならなかつた。

「ようがす。じやのちほど伺いましょう。今小僧がちよつと出でおりませんからな」

御米はこの存在<sup>ぞんざい</sup>な言葉を聞いてそのまま宅<sup>うち</sup>へ帰つたが、心中では、はたして道具屋が来るか来ないかはなはだ疑わしく思つた。一人でいつものように簡単な食事を済まして、清<sup>きよ</sup>に膳を下げさせていると、いきなり御免下さいと云つて、大きな声を出して道具屋が玄関からやつて來た。座敷へ上げて、例の屏風を見せて、なるほどと云つて裏だの縁だのを撫<sup>な</sup>でていたが、

「御<sup>おはらい</sup>扱<sup>いやいや</sup>になるなら」と少し考えて、「六円に頂いておきましょう」と否<sup>いやいや</sup>々そうに価<sup>ね</sup>を付けた。御米には道具屋の付けた相場が至当のように思われた。けれども一応宗助に話してからでなくつ

ては、余り専断過ぎると心づいた上、品物の歴史が歴史だけに、なおさら遠慮して、いずれ帰つたらよく相談して見た上でと答えたまま、道具屋を帰そうとした。道具屋は出掛けに、

「じゃ、奥さんせつかくだから、もう一円奮発しましよう。それで御払い下さい」と云つた。御米はその時思い切つて、

「でも、道具屋さん、ありや抱一ほういつですよ」と答えて、腹の中ではひやりとした。道具屋は、平氣で、

「抱一は近来流行りませんからな」と受け流したが、じろじろ御米の姿を眺めた上、

「じゃなおよく御相談なすつて」と云い捨てて帰つて行つた。  
御米はその時の模様を詳しく話した後で、

「売つちやいけなくつて」とまた無邪気に聞いた。

宗助の頭の中には、この間から物質上の欲求が、絶えず動いていた。ただ地味な生活をしなれた結果として、足らぬ家計を足ると諦らめる癖あきがついているので、毎月きまつて這入るもののはかには、臨時に不意の工面くめんをしてまで、少しでも常以上に寬くつろいでみようと云う働くは出なかつた。話を聞いたとき彼はむしろ御米の機敏な才覚に驚ろかされた。同時にはたしてそれだけの必要があるかを疑つた。御米の思わくを聞いて見ると、ここで十円足らずの金はいが入れば、宗助の穿く新らしい靴を誂あつらえた上、銘めいせん仙の一反ぐらいは買えると云うのである。宗助はそれもそうだと思つた。けれども親から伝わつた抱一の屏風びょうぶを一方に置いて、片方に新

らしい靴及び新らしい銘仙を並べて考えて見ると、この二つを交換する事がいかにも突飛とっぴでかつ滑稽こつけいであつた。

「売るなら売つていいがね。どうせ家うちに在つたつて邪魔になるばかりだから。けれどもおれはまだ靴は買わないでも済むよ。この間中みたように、降り続けに降られると困るが、もう天氣もよくなつたから」

「だつてまた降ると困るわ」

宗助は御米に対して永久に天氣を保証する訳にも行かなかつた。御米も降らない前に是非屏風を売れとも云いかねた。二人は顔を見合して笑つていた。やがて、

「安過ぎるでしようか」と御米が聞いた。

「そうさな」と宗助が答えた。

彼は安いと云われれば、安いような気がした。もし買手があれば、買手の出すだけの金はいくらでも取りたかつた。彼は新聞で、近来古書画の入札が非常に高価になつた事を見たような心持がした。せめてそんなものが一幅でもあつたらと思つた。けれどもそれは自分の呼吸する空気の届くうちに、落ちていかないものと諦めていた。

「買手にも因るだろ<sup>よ</sup>うが、売手にも因るんだよ。いくら名画だつて、おれが持つていた分にはどうていそ<sup>う</sup>う高く売れっこはないさ。しかし七円や八円<sup>あんま</sup>でえな、余り安いようだね」

宗助は抱一の屏風を弁護すると共に、道具屋をも弁護するよう

な語氣を洩らした。そうしてただ自分が弁護に価しないもののように感じた。御米も少し氣を腐らした氣味で、屏風の話はそれなりにした。

あくるひ

翌日宗助は役所へ出て、同僚の誰彼にこの話をした。すると皆申し合せたように、それは価値ねじゃないと云つた。けれども誰も自分が周旋して、相当の価に売払つてやろうと云うものはなかつた。またどう云う筋を通れば、馬鹿な目に逢わないで済むという手続を教えてくれるものもなかつた。宗助はやつぱり横町の道具屋に屏風を売るよりほかに仕方がなかつた。それでなければ元の通り、邪魔でも何でも座敷へ立てておくよりほかに仕方がなかつた。彼は元の通りそれを座敷へ立てておいた。すると道具屋が来

て、あの屏風を十五円に売つてくれと云い出した。夫婦は顔を見合して微笑んだ。もう少し売らずに置いてみようじゃないかと云つて、売らずにおいた。すると道具屋がまた来た。また売らなかつた。御米は断るのが面白くなつて來た。よたびめ四度目には知らない男を一人連れて來たが、その男とこそ相談して、とうとう三十五円に価を付けた。その時夫婦も立ちながら相談した。そうしてついに思い切つて屏風を売り払つた。

## 七

円明寺の杉が焦こげたように赭あかぐろ黒くなつた。天氣の好い日には、

風に洗われた空の端<sup>は</sup>ずれに、白い筋の嶮<sup>けわ</sup>しく見える山が出た。年は宗<sup>そう</sup>助<sup>すけ</sup>夫婦を駆<sup>か</sup>つて日ごとに寒い方へ吹き寄せた。朝になると欠かさず通る納豆<sup>なつとう</sup>売<sup>うり</sup>の声が、瓦<sup>かわら</sup>を鎖<sup>とざ</sup>す霜<sup>しも</sup>の色を連想せしめた。

宗助は床の中でその声を聞きながら、また冬が来たと思い出した。  
御米<sup>およね</sup>は台所で、今年も去年のように水道の栓<sup>せん</sup>が氷つてくれなければ助かるがと、暮から春へ掛けての取越苦勞をした。夜になると夫婦とも炬<sup>こたつ</sup>檻<sup>はん</sup>にばかり親しんだ。そうして広島や福岡の暖かい冬を羨<sup>うら</sup>やんだ。

「まるで前の本多さんみたよね」と御米が笑つた。前の本多さんと云うのは、やはり同じ構<sup>かまえ</sup>内<sup>うち</sup>に住んで、同じ坂井の貸家を借りている隠居夫婦であつた。小女<sup>こおんな</sup>を一人使つて、朝から晩ま

でことりと音もしないように静かな生計くらしを立てていた。御米が茶の間で、たつた一人裁縫しひごをしていると、時々御爺おじいさんと云う声がした。それはこの本多の御婆さんが夫を呼ぶ声であつた。門口かどぐちなどで行き逢うと、丁寧ていねいに時候の挨拶あいさつをして、ちと御話にいらつしやいと云うが、ついぞ行つた事もなければ、向うからも來た試ためしがない。したがつて夫婦の本多さんにに関する知識は極めて乏しかつた。ただ息子が一人あつて、それが朝鮮の統監府とうかんふとかで、立派な役人になつてゐるから、月々その方の仕送しおくりで、氣楽に暮らして行かれるのだと云う事だけを、出入の商人のあるものから耳にした。

「御爺さんはやつぱり植木を弄いじつてゐるかい」

「だんだん寒くなつたから、もうやめたんでしょう。縁の下に植木鉢がたくさん並んでるわ」

話はそれから前の家うちを離れて、家主やぬしの方へ移つた。これは、本多とはまるで反対で、夫婦から見ると、この上もない賑にぎやかそうな家庭に思われた。この頃は庭が荒れているので、大勢の小供が崖がけの上へ出て騒ぐ事はなくなつたが、ピヤノの音は毎晩のようにする。折々は下女か何ぞの、台所の方で高笑をする声さえ、宗助の茶の間まで響いて来た。

「ありやいつたい何をする男なんだい」と宗助が聞いた。この間は今までも幾度か御米に向つて繰り返されたものであつた。  
「何にもしないで遊あすんでるんでしょう。地面や家作を持つて」と

御米が答えた。この答も今までにもう何遍か宗助に向つて繰り返されたものであつた。

宗助はこれより以上立ち入つて、坂井の事を聞いた事がなかつた。学校をやめた当座は、順境にいて得意な振舞をするものに逢うと、今に見ると云う氣も起つた。それがしばらくすると、單なる憎惡ぞうおの念に変化した。ところが一二年このかたは全く自他の差違に無頓着むとんじやくになつて、自分は自分のように生れついたもの、先は先のような運を持つて世の中へ出て来たもの、両方共始から別種類の人間だから、ただ人間として生息する以外に、何の交渉も利害もないのだと考えるようになつてきた。たまに世間話のついでとして、ありやいつたい何をしている人だぐらいは聞きもする

が、それより先は、教えて貰う努力さえ出すのが面倒だつた。御米にもこれと同じ傾きがあつた。けれどもその夜は珍らしく、坂井の主人は四十恰好かっこうの鬚ひげのない人であると云う事やら、ピヤノを弾くのは惣そう領りょうの娘で十二三になると云う事やら、またほかの家の小供が遊びに来ても、ブランコへ乗せてやらないと云う事やらを話した。

「なぜほかの家の子供はブランコへ乗せないんだい」

「つまり吝けちなんでしょう。早く悪くなるから」

宗助は笑い出した。彼はそのくらい吝嗇けちな家主が、屋根が漏もると云え、すぐ瓦かわらし師しを寄こしてくれる、垣垣が腐くつたと訴えればすぐ植木屋に手を入れさしてくれるのは矛盾だと思つたのである。

その晩宗助の夢には本多の植木鉢も坂井のブランコもなかつた。彼は十時半頃床に入つて、万象に疲れた人のように鼾いびきをかいだ。

この間から頭の具合がよくないため、寝付ねつきの悪いのを苦にしていた御米は、時々眼を開けて薄暗い部屋ながを眺めた。細い灯ひが床の間の上に乗せてあつた。夫婦は夜中よじゆう灯火あかりを点けておく習慣がついているので、寝る時はいつも心を細目にして洋灯ランプをここへ上げた。

御米は気にするように枕の位置を動かした。そうしてそのたびに、下にしている方の肩の骨を、蒲団ふとんの上で滑らした。しまいには腹はら這ばいになつたまま、両肱りょうひじを突いて、しばらく夫の方を眺めていた。それから起き上つて、夜具の裾すそに掛けてあつた不斷着

を、寝巻の上へ羽織つたなり、床の間の洋灯を取り上げた。

「あなたあなた」と宗助の枕元へ来て曲みながら呼んだ。その時夫はもう鼾をかいていなかつた。けれども、元の通り深い眠から来る呼吸を続けていた。御米はまた立ち上つて、洋灯を手にしたまま、間の襖を開けて茶の間へ出た。暗い部屋が茫漠手元の灯に照らされた時、御米は鈍く光る簾筈の環を認めた。それを通り過ぎると黒く燻ぶつた台所に、腰障子の紙だけが白く見えた。御米は火の氣のない真中に、しばらく佇んでいたが、やがて右手に当る下女部屋の戸を、音のしないようそつと引いて、中へ洋灯の灯を翳した。下女は縞も色も判然映らない夜具の中に、土竜のごとく塊まつて寝ていた。今度は左側の六畳を覗いた。が

らんとして淋しい中に、例の鏡台が置いてあつて、鏡の表が夜中だけに凄く眼に応えた。

御米は家中を一回回つた後、すべてに異状のない事を確かめた上、また床の中へ戻つた。そうしてようやく眼を眠つた。今度は好い具合に、眼蓋のあたりに気を遣わないので済むように覚えて、しばらくするうちに、うとうととした。

するとまたふと眼が開いた。何だかずしんと枕元で響いたような心持がする。耳を枕から離して考えると、それはある大きな重いものが、裏の崖から自分達の寝ている座敷の縁の外へ転がり落ちたとしか思われなかつた。しかし今眼が覚めるすぐ前に起つた出来事で、けつして夢の続じやないと考えた時、御米は急に氣味

を悪くした。そうして傍に寝て いる夫の夜具の袖そでを引いて、今度は眞面目まじめに宗助を起し始めた。

宗助はそれまで全くよく寝ていたが、急に眼が覚めると、御米が、

「あなたちよつと起きて下さい」と揺ゆすつていたので、半分は夢中に、

「おい、好し」とすぐ蒲團ふとんの上へ起き直つた。御米は小声で先刻さつきからの様子を話した。

「音は一遍した限ぎりなのかい」

「だつて今したばかりなのよ」

二人はそれで黙つた。ただじつと外の様子を伺つていた。けれ

ども世間は森と静であつた。いつまで耳を峙ていても、再び物の落ちて来る氣色はなかつた。宗助は寒いと云いながら、单衣の寝巻の上へ羽織を被つて、縁側へ出て、雨戸を一枚繰つた。外を覗くと何にも見えない。ただ暗い中から寒い空気がにわかに肌に逼つて来た。宗助はすぐ戸を閉めた。

かきがねをおろして座敷へ戻るや否や、また蒲団の中へ潜り込んだが、「何にも変つた事はありやしない。多分御前の夢だろう」と云つて、宗助は横になつた。御米はけつして夢でないと主張した。たしかに頭の上で大きな音がしたのだと固執した。宗助は夜具から半分出した顔を、御米の方へ振り向けて、

「御米、お前は神経が過敏になつて、近頃どうかしているよ。も

う少し頭を休めてよく寝る工夫でもしなくつちゃいけない」と云つた。

その時次の間の柱時計が二時を打つた。その音で二人ともちよつと言葉を途切らして、黙つて見ると、夜はさらに静まり返つたようと思われた。二人は眼が冴<sup>さ</sup>えて、すぐ寝つかれそうにもなかつた。御米が、

「でもあなたは氣楽ね。横になると十分経<sup>た</sup>たないうちに、もう寝ていらつしやるんだから」と云つた。

「寝る事は寝るが、氣が楽で寝られるんじやない。つまり疲れるからよく寝るんだろう」と宗助が答えた。

こんな話をしているうちに、宗助はまた寝入つてしまつた。御

米は依然として、のつそつ床の中で動いていた。すると表をがらがらと烈しい音を立てて車が一台通つた。近頃御米は時々夜明前の車の音を聞いて驚ろかされる事があつた。そうしてそれを思い合わせると、いつも似寄つた刻限なので、必竟<sup>ひつきょう</sup>は毎朝同じ車が同じ所を通るのだろうと推測した。多分牛乳を配達するためかなどで、ああ急ぐに違ないときめていたから、この音を聞くと等しく、もう夜が明けて、隣人の活動が始つたごとくに、心丈夫になつた。そういうしていると、どこかで鶏<sup>とり</sup>の声が聞えた。またしばらくすると、下駄<sup>げた</sup>の音を高く立てて往来を通るものがあつた。

そのうち清<sup>きよ</sup>が下女部屋の戸を開けて廁<sup>かわや</sup>へ起きた模様だつたが、やがて茶の間へ来て時計を見ているらしかつた。この時床の間に置

いた洋灯<sup>(ランプ)</sup>の油が減つて、短かい心<sup>しん</sup>に届かなくなつたので、御米の寝<sup>ふすま</sup>ている所は真暗になつていた。そこへ清の手にした灯火<sup>あかり</sup>の影が、襖<sup>ふすま</sup>の間から射し込んだ。

「清かい」と御米が声を掛けた。

清はそれからすぐ起きた。三十分ほど経<sup>た</sup>つて御米も起きた。また三十分ほど経つて宗助もついに起きた。平常<sup>いつも</sup>は好い時分に御米がやつて来て、

「もう起きてもよくつてよ」と云うのが例であつた。日曜とたまの旗日<sup>(はたび)</sup>には、それが、

「さあもう起きてちようだい」に変るだけであつた。しかし今日は昨夕<sup>(ゆうべ)</sup>の事が何となく気にかかるので、御米の迎<sup>(むかえ)</sup>に来ないうち宗

助は床を離れた。そうして直崖下の雨戸を繰つた。

下から覗くと、寒い竹が朝の空気に鎖されてじつとしている後から、霜を破る日の色が射して、幾分か頂いただきを染めていた。その二尺ほど下の勾配の一番急な所に生えている枯草が、妙に摺り剥すくけて、赤土の肌を生々しく露出した様子に、宗助はちよつと驚ろかされた。それから一直線に降りて、ちょうど自分の立つている縁鼻えんばなの土が、霜柱を摧くだいたように荒れていた。宗助は大きな犬でも上から転がり落ちたのじやなかろうかと思つた。しかし犬にしてはいくら大きいにしても、余り勢が烈し過ぎると思つた。

宗助は玄関から下駄を提げて来て、すぐ庭へ下りた。縁の先へ便所が折れ曲つて突き出しているので、いとど狭い崖下が、裏へ

抜ける半間ほどの所はなおさら狭苦しくなつていた。御米は掃除そう  
屋じやが来るたびに、この曲り角を気にしては、

「あすこがもう少し広いといいけれども」と危険あぶながるので、よく宗助から笑われた事があつた。

そこを通り抜けると、真直まっすぐに台所まで細い路が付いている。元は枯枝の交つた杉垣すぎ垣があつて、隣の庭の仕切りになつていたが、この間家主が手を入れた時、穴だらけの杉葉すぎの葉を奇麗きれいに取り払つて、今では節ふしの多い板垣いたべいが片側を勝手口まで塞ふさいでしまつた。日当りの悪い上に、樋といから雨あまだれ滴ばかり落ちるので、夏になると秋海棠かいどうがいっぱい生える。その盛りな頃は青い葉が重なり合つて、ほとんど通り路がなくなるくらい茂つて来る。始めて越した

年は、宗助も御米もこの景色を見て驚ろかされたくらいである。

この秋海棠は杉垣のまだ引き抜かれない前から、何年となく地下に蔓つていたもので、古家の取り毀たれた今でも、時節が来ると昔の通り芽を吹くものと解った時、御米は、「でも可愛いわね」と喜んだ。

宗助が霜を踏んで、この記念の多い横手へ出た時、彼の眼は細長い路次の一点に落ちた。そうして彼は日の通わない寒さの中にはたと留まつた。

彼の足元には黒塗の蒔絵まきえの手文庫が放り出してあつた。中味はわざわざそこへ持つて来て置いて行つたように、霜の上にちゃんと据つているが、蓋は二三尺離れて、塀の根に打ちつけられたご

とくに引っ繰り返つて、中を張つた千代紙の模様が判然見えた。文庫の中から洩れた、手紙や書付類が、そこいらに遠慮なく散らばっている中に、比較的長い一通がわざわざ二尺ばかり広げられて、その先が紙屑のごとく丸めてあつた。宗助は近づいて、この揉苦茶もみくちゃになつた紙の下を覗いて見えず苦笑した。下には大便が垂れてあつた。

土の上に散らばつてある書類ひとまとめを一纏にして、文庫の中へ入れて、霜と泥に汚れたまま宗助は勝手口まで持つて來た。腰障子こししょうじを開けて、清に

「おいこれをちよつとそこへ置いてくれ」と渡すと、清は妙な顔をして、不思議そうにそれを受取つた。御米は奥で座敷へ拵塵はたきを

掛けていた。宗助はそれから懷ふところ手てをして、玄関だの門の辺あたりをよく見廻つたが、どこにも平常と異なる点は認められなかつた。

宗助はようやく家うちへ入つた。茶の間へ来て例の通り火鉢ひばちの前へ坐すわつたが、すぐ大きな声を出して御米を呼んだ。御米は、

「起き抜けにどこへ行つていらしめたの」と云いながら奥から出て來た。

「おい昨夜枕元で大きな音がしたのは、やつぱり夢じやなかつたんだ。泥棒だよ。泥棒が坂井さんの崖がけの上から宅うちの庭へ飛び下りた音だ。今裏へ回つて見たら、この文庫が落ちていて、中にはいつていた手紙なんぞが、むちやくちやに放り出してあつた。おまけに御馳ごちそ走まで置いて行つた」

宗助は文庫の中から、二三通の手紙を出して御米に見せた。それには皆坂井のみんなの名宛なあてが書いてあつた。御米は吃びっくり驚して立膝のまゝ、

「坂井さんじやほかに何か取られたでしようか」と聞いた。宗助は腕組をして、

「ことに因ると、まだ何かやられたね」と答えた。

夫婦はともかくもと云うので、文庫をそこへ置いたなり朝飯の膳ぜんに着いた。しかし箸はしを動かす間まも泥棒の話は忘れなかつた。御米は自分の耳と頭のたしかな事を夫に誇つた。宗助は耳と頭のたしかでない事を幸福とした。

「そうおつしやるけれど、これが坂井さんでなくつて、宅で御覽

なさい。あなたみたように、ぐうぐう寝ていらしつたら困るじゃないの」と御米が宗助をやり込めた。

「なに、宅なんぞへ這入る氣遣はないから大丈夫だ」と宗助も口の減らない返事をした。

そこへ清が突然台所から顔を出して、

「この間拵えた旦那様の外套マントでも取られようものなら、それこそ騒ぎでございましたね。御宅おうちでなくつて坂井さんだつたから、本当に結構でございます」と眞面目まじめに悦よろこびの言葉を述べたので、宗助も御米も少し挨拶あいさつに窮きゆうした。

食事を済まして、出勤の時刻にはまだいいぶ間があつた。坂井では定めて騒いでるだろうと云うので、文庫は宗助が自分で持

つて行つてやる事にした。蒔絵まきえではあるが、ただ黒地に亀甲形きつこうがたを金で置いただけの事で、別に大して金目の物とも思えなかつた。御米は唐桟とうざんの風呂敷ふろしきを出してそれを包んだ。風呂敷が少し小さいので、四隅よすみを対むこう同志繫つないで、真中にこま結びを二つ拵こしらえた。宗助がそれを提さげたところは、まるで進物の菓子折のようであつた。

座敷で見ればすぐ崖の上だが、表から廻ると、通りを半町ばかり来て、坂を上のぼつて、また半町ほど逆に戻らなければ、坂井の門前へは出られなかつた。宗助は石の上へ芝を盛つて扇骨木かなめを奇麗きれいに植えつけた垣に沿うて門内に入つた。

家の内はむしろ静か過ぎるくらいしんとしていた。摺硝子すりガラスの

戸が閉ててある玄関へ来て、ベルを二三度押して見たが、ベルが利かないと見えて誰も出て来なかつた。宗助は仕方なしに勝手口へ廻つた。そこにも摺硝子の嵌まつた腰障子が二枚閉ててあつた。中では器物を取り扱う音がした。宗助は戸を開けて、瓦斯七輪を置いた板の間に蹲踞しゃがんでいる下女に挨拶あいさつをした。

「これはこちらのでしよう。今朝私わたしの家の裏に落ちていましたから持つて來ました」と云いながら、文庫を出した。

下女は「そうでございましたか、どうも」と簡単に礼を述べて、文庫を持ったまま、板の間の仕切まで行つて、仲勵なかばたらきらしい女を呼び出した。そこで小声に説明をして、品物を渡すと、仲勵はそれを受取つたなり、ちよつと宗助の方を見たがすぐ奥へ入つた。

入れ違に、十二三になる丸顔の眼の大きな女の子と、その妹らしき揃のリボンを懸けた子がいつしょに馳けて来て、小さい首を二つ並べて台所へ出した。そして宗助の顔を眺めながら、泥棒よと耳語やつた。宗助は文庫を渡してしまえば、もう用が済んだのだから、奥の挨拶はどうでもいいとして、すぐ帰ろうかと考えた。

「文庫は御宅のでしようね。いいんでしようね」と念を押して、何にも知らない下女を氣の毒がらしているところへ、最前の仲働が出て来て、

「どうぞ御通り下さい」と丁寧に頭を下げたので、今度は宗助の方が少し痛み入るようになつた。下女はいよいよしとやかに同

じ請求を繰り返した。宗助は痛み入る境を通り越して、ついに迷惑を感じ出した。ところへ主人が自分で出て來た。

主人は予想通り血色の好い下<sub>しも</sub>膨<sub>ぶくれ</sub>の福<sub>ふくそう</sub>相<sub>そな</sub>を具えていたが、御米の云つたように髭<sub>ひげ</sub>のない男ではなかつた。鼻の下に短かく刈り込んだのを生やして、ただ頬<sub>ほお</sub>から腮<sub>あご</sub>を奇麗<sub>きれい</sub>に蒼<sub>あお</sub>くしていた。

「いやどうもとんだ御手数<sub>ごてかず</sub>で」と主人は眼尻<sub>めじり</sub>に皺<sub>しわ</sub>を寄せながら礼を述べた。米沢の絆<sub>よねざわ</sub>を着た膝<sub>ひざ</sub>を板の間に突いて、宗助からいろいろ様子を聞いている態度が、いかにも緩<sub>ゆ</sub>くりしていた。宗助は昨夕<sub>ゆうべ</sub>から今朝へかけての出来事を一通り搔<sub>か</sub>い撮<sub>つま</sub>んで話した上、文庫のほかに何か取られたものがあるかないかを尋ねて見た。主人は机の上に置いた金時計を一つ取られた由<sub>よし</sub>を答えた。けれどもま

るで他のものでも失くなした時のように、いつこう困つたと云う  
氣色はなかつた。時計よりはむしろ宗助の叙述の方に多くの興味  
を有つて、泥棒が果して崖を伝つて裏から逃げるつもりだつたら  
うか、または逃げる拍子に、崖から落ちたものだろうかと云う  
ような質問を掛けた。宗助は固より返答ができなかつた。

そこへ最前の仲働が、奥から茶や菴を運んで来たので、宗助は  
また帰りはぐれた。主人はわざわざ座蒲団まで取り寄せて、とう  
とうその上へ宗助の尻を据えさした。そうして今朝早く來た刑事  
の話をし始めた。刑事の判定によると、賊は宵から邸内に忍び込  
んで、何でも物置かなぞに隠れていたに違ない。這入口はやは  
り勝手である。燐寸を擦つて蠟燭を点して、それを台所にあつ

た小桶こおけの中へ立てて、茶の間へ出たが、次の部屋には細君と子供が寝ているので、廊下伝いに主人の書斎へ来て、そこで仕事をしていると、この間生れた末の男の子が、乳を呑む時刻が来たものか、眼を覚さまして泣き出したため、賊は書斎の戸を開けて庭へ逃げたらしい。

「平常いつものように犬がいると好かつたんですがね。あいにく病気なので、四五日前病院へ入れてしまつたもんですから」と主人は残念がつた。宗助も、

「それは惜しい事でした」と答えた。すると主人はその犬の種ブリードやら血統やら、時々猶かりに連れて行く事や、いろいろな事を話し始めた。

「猫は好<sup>りよう</sup>ですか。もつとも近来は神経痛で少し休んでいますが。何しろ秋口から冬へ掛けて鳴<sup>しげ</sup>なぞを打ちに行くと、どうしても腰から下は田の中へ浸<sup>つか</sup>つて、二時間も三時間も暮らさなければならんですから、全く身体<sup>からだ</sup>には好くないようです」

主人は時間に制限のない人と見えて、宗助が、なるほどとか、そうですか、とか云つていると、いつまでも話しているので、宗助はやむを得ず中途で立ち上がった。

「これからまた例の通り出かけなければなりませんから」と切り上げると、主人は始めて気がついたように、忙がしいところを引き留めた失礼を謝した。そうしていざれまた刑事が現状を見に行くかも知れないから、その時はよろしく願うと云うような事を述

べた。最後に、

「どうかちと御話に。私も近頃はむしろ閑<sup>ひま</sup>な方ですから、また御邪魔に出ますから」と丁寧<sup>ていねい</sup>に挨拶をした。門を出て急ぎ足に宅へ帰ると、毎朝出る時刻よりも、もう三十分ほど後れていた。

「あなたどうなすつたの」と御米が気を揉<sup>も</sup>んで玄関へ出た。宗助はすぐ着物を脱いで洋服に着換えながら、

「あの坂井と云う人はよっぽど気楽な人だね。金があるとああ緩<sup>ゆつ</sup>くりできるもんかな」と云つた。

「小六さん、茶の間から始めて。それとも座敷の方を先にして」と御米およねが聞いた。

小六は四五日前とうとう兄の所へ引き移つた結果として、今日の障子しようじの張替はりかえを手伝わなければならぬ事となつた。彼は昔むかし叔父の家にいた時、安之助やすのすけといつしょになつて、自分の部屋の唐紙からかみを張り替えた経験がある。その時は糊のりを盆に溶いたり、籠へらを使つて見たり、だいぶ本式にやり出したが、首尾好く乾かして、いざ元の所へ建てるという段になると、二枚とも反つ繰そくり返つて敷居の溝みぞへ嵌はまらなかつた。それからこれも安之助と共同して失敗した仕事であるが、叔母の云いつけて、障子を張らせられたときには、水道でざぶざぶわく杵わくを洗つたため、やつぱり乾いた後

で、惣體そうたいに歪ゆがみができる非常に困難した。

「姉さん、障子を張るときは、よほど慎重にしないと失策しつせきです。洗つちや駄目だめですぜ」と云いながら、小六は茶の間の縁側えんがわからびりびり破き始めた。

縁先は右の方に小六のいる六畳が折れ曲つて、左には玄関が突き出している。その向うを屏へいが縁と平行に塞ふさいでいるから、まあ四角な囲かこ内うちと云つていい。夏になるとコスモスを一面に茂らして、夫婦とも毎朝露の深い景色けしきを喜んだ事もあるし、また屏の下へ細い竹立てて、それへ朝顔からを絡ませた事もある。その時は起き抜けに、今朝咲いた花の数を勘定かんじょうし合つて二人が樂たのしみにした。けれども秋から冬へかけては、花も草もまるで枯れてしまう

ので、小さな砂漠さばくみたように、眺めるのも氣の毒なくらい淋さびしくなる。小六はこの霜しもばかり降りた四角な地面を背にして、しきりに障子の紙はを剥はがしていた。

時々寒い風が来て、後うしろから小六の坊主頭と襟えりの辺あたりを襲おそつた。そのたびに彼は吹ふき曝さらしの縁から六畳の中へ引っ込みたくなつた。彼は赤い手を無言のまま働らかしながら、馬尻バケツの中で雑巾ぞうきんを絞しほつて障子の桟さんを拭き出した。

「寒いでしよう、御氣の毒さまね。あいにく御天氣が時雨しぐれたもんだから」と御米が愛想あいそを云つて、鉄瓶てつびんの湯を注ぎ注ぎ、昨日きのう煮のりた糊のりを溶いた。

小六は實際こんな用をするのを、内心では大いに輕蔑けいべつしてい

た。ことに昨今自分がやむなく置かれた境遇からして、この際多少自己を侮辱しているかの觀を抱いて雑巾を手にしていた。昔し叔父の家で、これと同じ事をやらせられた時は、暇潰しの慰みとして、不愉快どころかかえつて面白かった記憶さえあるのに、今じやこのくらいな仕事よりほかにする能力のないものと、強いて周囲から諦めさせられたような気がして、縁側の寒いのがなおのこと癪に触った。

それで嫂には快よい返事さえ碌にしなかつた。そうして頭の中で、自分の下宿にいた法科大学生が、ちょっと散歩に出るついでに、資生堂へ寄つて、三つ入りの石鹼と歯磨を買うのにさえ、五円近くの金を払う華奢を思い浮べた。するとどうしても自分一

人が、こんな窮境おちいに陥るべき理由がないように感ぜられた。それから、こんな生活状態に甘んじて一生を送る兄夫婦がいかにも憫然びんに見えた。彼らは障子を張る美濃紙みのがみを買うのにさえ気兼きがねをしまいかと思われるほど、小六から見ると、消極的な暮らし方をしていた。

「こんな紙じや、またすぐ破けますね」と云いながら、小六は卷いた小口くちを一尺ほど日に透かして、二三度力任せに鳴らした。

「そう？ でも宅うちじや小供こどがないから、それほどでもなくつてよ」と答えた御米は糊を含ました刷毛はけを取つてとんとんとんと桟の上を渡した。

二人は長く継ついだ紙を双方から引き合つて、なるべく垂たるのみ

できないように力めたが、小六が時々面倒臭<sup>つと</sup>そうな顔をすると、御米はつい遠慮<sup>とんりょ</sup>が出て、好加減<sup>いいかげん</sup>に髪<sup>かみそり</sup>剃<sup>そり</sup>で小口<sup>こく</sup>を切り落してしまった事もあった。したがつてでき上つたものには、所々のぶくぶくがだいぶ目についた。御米は情なき<sup>なき</sup>さそうに、戸袋<sup>なべ</sup>に立て懸けた張り立ての障子<sup>なが</sup>を眺め<sup>なが</sup>た。そうして心の中<sup>うち</sup>で、相手が小六でなくつて、夫であつたならと思つた。

「皺<sup>しわ</sup>が少しできたのね」

「どうせ僕の御手際<sup>おてぎわ</sup>じや旨<sup>うま</sup>く行かない」

「なに兄さんだつて、そう御上手じやなくつてよ。それに兄さんはあなたよりよっぽど無精<sup>ぶじょう</sup>ね」

小六は何にも答えなかつた。台所から清<sup>きよ</sup>が持つて來た含嗽<sup>うがいぢやわ</sup>茶

碗<sup>わん</sup>を受け取つて、戸袋の前へ立つて、紙が一面に濡れるほど霧<sup>ぬ</sup>を吹いた。二枚目を張つたときは、先に霧を吹いた分がほぼ乾いて皺<sup>しわ</sup>がおおかた平らになつていた。三枚目を張つたとき、小六は腰が痛くなつたと云い出した。実を云うと御米の方は今朝から頭<sup>けさ</sup>が痛かつたのである。

「もう一枚張つて、茶の間だけ済ましてから休みましょう」と云つた。

茶の間を済ましているうちに午<sup>ひる</sup>になつたので、二人は食事を始めた。小六が引き移つてからこの四五日<sup>しごんち</sup>、御米は宗助<sup>そうすけ</sup>のいない午飯<sup>ひるはん</sup>を、いつも小六と差向<sup>さしむか</sup>で食べる事になつた。宗助といつしょになつて以来、御米の毎日膳<sup>ぜん</sup>を共にしたものは、夫よりほ

かになかった。夫の留守の時は、ただひとり箸を執るのが多年の習慣であった。だから突然この小舅と自分の間に御櫃を置いて、互に顔を見合せながら、口を動かすのが、御米に取つては一種異な経験であった。それも下女が台所で働らいているときは、まだしもだが、清の影も音もしないとなると、なおのこと変に窮屈な感じが起つた。無論小六よりも御米の方が年上であるし、また從来の関係から云つても、両性を絡みつける艶っぽい空気は、箱束的な初期においてすら、二人の間に起り得べきはずのものではなかつた。御米は小六と差向に膳に着くときのこの氣ぶつせいな心持が、いつになつたら消えるだろうと、心の中では私に疑ぐつた。小六が引き移るまでは、こんな結果が出ようとは、ま

るで気がつかなかつたのだからなおさら当惑した。仕方がないからなるべく食事中に話をして、せめて手持無沙汰な隙間だけでも補おうと力めた。不幸にして今の小六は、この嫂の態度に対してもほどの好い調子を出すだけの余裕と分別を頭の中に発見し得なかつたのである。

「小六さん、下宿は御馳走があつて」

こんな質問に逢うと、小六は下宿から遊びに來た時分のように、  
淡泊な遠慮のない答をする訳に行かなくなつた。やむを得ず、  
「なにそうでもありません」ぐらいにしておくと、その語気がからりと澄んでいないので、御米の方では、自分の待遇が悪いせい  
かと解釈する事もあつた。それがまた無言の間に、小六の頭に映

る事もあつた。

ことに今日は頭の具合が好くないので、膳に向つても、御米はいつものように力めるのが退儀たいぎであつた。力めて失敗するのはな  
お厭いやであつた。それで二人とも障子しょうじを張るときよりも言葉少なに食事を済ました。

午後は手が慣れたせいか、朝に比べると仕事が少し果取はかどつた。

しかし二人の気分は飯前よりもかえつて縁遠くなつた。ことに寒い天気が二人の頭に応えた。起きた時は、日を載せた空がしだいに遠退とおのいて行くかと思われるほどに、よく晴れていたが、それが真蒼まつさおに色づく頃から急に雲が出て、暗い中で粉雪こゆきでも釀かもしてい  
るように、日の目を密封した。二人は交る交る火鉢に手を翳かざした。

「兄さんは来年になると月給が上がるんでしょう」

ふと小六がこんな問を御米にかけた。御米はその時畳の上の紙か  
みぎれ片を取つて、糊に汚れた手を拭いていたが、全く思も寄らない  
という顔をした。

「どうして」

「でも新聞で見ると、来年から一般に官吏の増俸があると云う話  
じやありませんか」

御米はそんな消息を全く知らなかつた。小六から詳しい説明を  
聞いて、始めてなるほどと首肯いた。

「全くね。これじや誰だつて、やつて行けないわ。御看の切身  
なんか、わたくし私が東京へ来てからでも、もう倍になつてるんですもの」

と云つた。着の切身の値段になると小六の方が全く無識であつた。  
御米に注意されて始めてそれほどむやみに高くなるものかと思つ  
た。

小六にちよつとした好奇心の出たため、二人の会話は存外素直  
に流れて行つた。御米は裏の家主の十八九時代に物価の大変安か  
つた話を、この間宗助から聞いた通り繰り返した。その時分は蕎  
麦を食うにしても、盛<sup>もり</sup>かけが八厘、種<sup>たね</sup>ものが二銭五厘であつた。

牛肉は普通<sup>なま</sup>が一人前<sup>いちにんまえ</sup>四銭で、ロースは六銭であつた。寄席<sup>よせ</sup>は三  
銭か四銭であつた。学生は月に七円ぐらい国から貰<sup>もら</sup>えば中の部で  
あつた。十円も取るとすでに贅<sup>ぜい</sup>沢<sup>いたく</sup>と思われた。

「小六さんも、その時分だと訳なく大学が卒業できたのにね」と

御米が云つた。

「兄さんもその時分だと大変暮しやすい訳ですね」と小六が答えた。

座敷の張易はりかえが済んだときにはもう三時過になつた。そういううちに、宗助も帰つて来るし、晩の支度したくも始めなくつてはならないので、二人はこれを一段落として、糊や髪剃かみそりを片づけた。小六は大きな伸びを一つして、握り拳にぎこぶしで自分の頭をこんこんと叩たたいた。

「どうも御苦労さま。疲れたでしよう」と御米は小六を勞わつた。小六はそれよりも口淋くちさむしい思がした。この間文庫を届けてやつた礼に、坂井からくれたと云う菓子を、戸棚とだなから出して貰つて食

べた。御米は御茶を入れた。

「坂井と云う人は大学出なんですか」

「ええ、やつぱりそうなんですか」

小六は茶を飲んで煙草たばこを吹いた。やがて、

「兄さんは増俸の事をまだあなたに話さないんですか」と聞いた。

「いいえ、ちつとも」と御米が答えた。

「兄さんみたようになれたら好いだろうな。不平も何もなくつて

御米は特別の挨拶あいさつもしなかつた。小六はそのまま起つて六畳

へ這入つたが、やがて火が消えたと云つて、火鉢を抱えてまた出て來た。彼は兄の家に厄介やつかいになりながら、もう少し立てば都合がつくだろうと慰めた安之助の言葉を信じて、学校は表向休

学の体<sup>てい</sup>にして一時の始末をつけたのである。

## 九

裏の坂井と宗助<sup>そうすけ</sup>とは文庫が縁になつて思わぬ関係がついた。それまでは月に一度こちらから清に家賃を持たしてやると、向<sup>むこう</sup>からその受取を寄こすだけの交渉に過ぎなかつたのだから、崖<sup>がけ</sup>の上に西洋人が住んでいると同様で、隣人としての親みは、まるで存在していなかつたのである。

宗助が文庫を届けた日の午後に、坂井の云つた通り、刑事が宗助の家の裏手から崖下を検<sup>しらべ</sup>に來たが、その時坂井もいつしよだ

つたので、御米は始めて噂に聞いた家主の顔を見た。髭のないと思つたのに、髭を生やしているのと、自分なぞに対しても、存外丁寧な言葉を使うのが、御米には少し案外であつた。

「あなた、坂井さんはやつぱり髭を生やしていてよ」と宗助が帰つたとき、御米はわざわざ注意した。

それから二日ばかりして、坂井の名刺を添えた立派な菓子折を持つて、下女が礼に來たが、せんだつてはいろいろ御世話になりまして、ありがとう存じます、いずれ主人が自身に伺うはずでございますがと云いおいて、帰つて行つた。

その晩宗助は到来の菓子折の蓋を開けて、唐饅頭を頬張りながら、

「こんなものをくれるところをもつて見ると、それほど吝けちでもないようだね。他の家の子をブランコへ乗せてやらないって云うのは嘘うそだろう」と云つた。御米も、

「きっと嘘うそよ」と坂井を弁護した。

夫婦と坂井とは泥棒の這入はいらぬ前より、これだけ親しみの度が増したようなものの、それ以上に接近しようと云う念は、宗助の頭にも、御米の胸にも宿らなかつた。利害の打算から云えば無論の事、単に隣人の交際とか情じょうぎ誼ゆきとか云う点から見ても、夫婦はこれよりも前進する勇氣もを有たなかつたのである。もし自然がこのままに無為むいの月日を駆かつたなら、久しうからぬうちに、坂井は昔の坂井になり、宗助は元の宗助になつて、崖の上と崖の下に互

の家が懸け隔ることく、互の心も離れ離れになつたに違なかつた。  
 ところがそれからまた二日置いて、三日目の暮れ方に、獺の襟  
 の着いた暖かそうな外套マントを着て、突然坂井が宗助の所へやつて來  
 た。夜間客に襲われつけない夫婦は、軽微の狼狽ろうばいを感じたくらい  
 驚ろかされたが、座敷へ上げて話して見ると、坂井は丁寧に先日  
 の礼を述べた後のち、

「御蔭で取られた品物がまた戻りましたよ」と云いながら、白  
 縮緬りめんの兵児帶へこおびに巻き付けた金鎖はすを外して、兩蓋りょうぶの金時計を  
 出して見せた。

規則だから警察へ届ける事は届けたが、実はだいぶ古い時計な  
 ので、取られてもそれほど惜しくもないぐらいに諦あきらめていたら、

昨日になつて、突然差出人の不明な小包が着いて、その中にちゃんと自分の失くしたのが包んであつたんだと云う。

「泥棒も持ち扱かつたんでしょう。それとも余り金にならないんで、やむを得ず返してくれる気になつたんですかね。何しろ珍らしい事で」と坂井は笑つていた。それから、

「何私から云うと、実はあの文庫の方がむしろ大切な品でしてね。祖母が昔し御殿へ勤めていた時分、戴いたんだとか云つて、まあ記念のようなものですから」と云うような事も説明して聞かした。

その晩坂井はそんな話を約二時間もして帰つて行つたが、相手になつた宗助も、茶の間で聞いていた御米も、大変談話の材料に富んだ人だと思わぬ訳に行かなかつた。後で、

「世間の広い方ね」かたと御米が評した。

「閑だからさ」と宗助が解釈した。

次の日宗助が役所の帰りがけに、電車を降りて横町の道具屋の前まで来ると、例の獺の襟かわうそえりを着けた坂井の外套マントがちよつと眼に着いた。横顔を往来の方へ向けて、主人を相手に何か云っている。

主人は大きな眼鏡を掛けたまま、下から坂井の顔を見上げている。宗助は挨拶あいさつをすべき折でもないと思つたから、そのまま行き過ぎようとして、店の正面まで来ると、坂井の眼が往来へ向いた。

「やあ昨夜は。今御帰りですか」と気軽に声をかけられたので、宗助も愛想なく通り過ぎる訳にも行かなくなつて、ちよつと歩調を緩めながら、帽子を取つた。すると坂井は、用はもう済んだと

云う風をして、店から出て來た。

「何か御求めですか」と宗助が聞くと、

「いえ、何」と答えたまま、宗助と並んで家の方へ歩き出した。

六七間来たとき、

「あの爺い、なかなか猾い奴ですよ。華山の偽物にせものを持つて来て  
押付おつけようとしやがるから、今叱りつけてやつたんです」と云い  
出した。宗助は始めて、この坂井も余裕よゆうある人に共通な好事こうずを道  
樂にしているのだと心づいた。そうしてこの間売り払つた抱一ほういつ  
の屏風びょうぶも、最初からこう云う人に見せたら、好かつたろうにと、  
腹の中で考えた。

「あれは書画には明るい男なんですか」

「なに書画どころか、まるで何も分らない奴です。あの店の様子を見ても分るじやありませんか。骨董らしいものは一つも並んでいやしない。もとが紙屑屋かみくずやから出世してあれだけになつたんですからね」

坂井は道具屋の**素性**すじょうをよく知っていた。**出入**でいりの八百屋の阿爺おやじの話によると、坂井の家は旧幕の頃何とかの守かみと名乗つたもので、この界隈かいわいでは一番古い門閥家もんぱつかなのだそうである。瓦解がかいの際、駿府すんぷへ引き上げなかつたんだとか、あるいは引き上げてまた出て来たんだとか云う事も耳にしたようであるが、それは判然宗助の頭に残つていなかつた。

「小さい内から悪戯いたずらものでね。あいつが餓鬼がき大将だいしょになつてよ

く喧嘩けんかをしに行つた事がありますよ」と坂井は御互の子供の時の事まで一口洩もらした。それがまたどうして華山の賡物にせものを売り込もうと巧たくんだのかと聞くと、坂井は笑つて、こう説明した。

「なに親父おやじの代から龜ひいき蜃ひいきにしてやつてるものですから、時々何だ蚊かだつて持つて来るんです。ところが眼も利かない癖に、ただ慾ばかりたがつてね、まことに取扱い悪い代にぐく物しろものです。それについこの間抱一の屏風ささえを買って貰つて、味を占めたんでね」

宗助は驚いた。けれども話の途中を遮ぎる訳に行かなかつたので、黙つていた。坂井は道具屋がそれ以来乗気になつて、自身に分りもしない書画類をしきりに持ち込んで来る事やら、大坂出来の高麗焼こうらいやきを本物だと思つて、大事に飾つておいた事やら話し

た末、

「まあ台所だいどこで使う食卓ちやぶだいか、たかだか新の鉄瓶あらてつびんぐらいしか、あんな所じや買えたもんじやありません」と云つた。

そのうち二人は坂の上へ出た。坂井はそこを右へ曲る、宗助はそこを下へ下りなければならなかつた。宗助はもう少しいつしよに歩いて、屏風びょうぶの事を聞いたかつたが、わざわざ回り路まわみちをするのも変だと心づいて、それなり分れた。分れる時、

「近い中御邪魔うちうぢまに出てもようございますか」と聞くと、坂井は、「どうぞ」と快よく答えた。

その日は風もなくひとしきり日も照つたが、家にいると底冷そこひえのする寒さに襲おそわれるとか云つて、御米はわざわざ置炬燵おきごたつに宗

助の着物を掛け、それを座敷の真中に据えて、夫の帰りを待ち受けていた。

この冬になつて、昼のうち炬燵こたつを拵らえたのは、その日が始めてであつた。夜は疾とうから用いていたが、いつも六畳に置くだけであつた。

「座敷の真中にそんなものを据えて、今日はどうしたんだい」

「でも、御客も何もないからいいでしよう。だつて六畳の方は小六ろくさんがいて、塞ふさがつているんですもの」

宗助は始めて自分の家に小六のいる事に気がついた。襯衣シャツの上から暖かい紡績織ぼうせきおりをかけて貰つて、帯をぐるぐる巻きつけたが、「ここは寒帶だから炬燵でも置かなくつちや凌げない」と云つた。

小六の部屋になつた六畳は、畳こそ奇麗でないが、南と東が開いていて、家の中うちじゅうで一番暖かい部屋なのである。

宗助は御米の汲くんで来た熱い茶を湯呑ゆのみから二口ほど飲んで、

「小六はいるのかい」と聞いた。小六は固もとよりいたはずである。けれども六畳はひとつそりして人のいるようにも思われなかつた。

御米が呼びに立とうとするのを、用はないからいいと留めたまま、宗助は炬燵蒲団ぶとんの中へ潜り込んで、すぐ横になつた。一方口に

崖を控えている座敷には、もう暮方の色が萌きざしていた。宗助は手枕をして、何を考えるともなく、ただこの暗く狭い景色けしきを眺めていた。すると御米と清が台所で働く音が、自分に関係のない隣の人の活動のごとくに聞えた。そのうち、障子だけがただ薄白く宗

助の眼に映るように、部屋の中が暮れて來た。彼はそれでもじつとして動かずにいた。声を出して洋灯の催促もしなかつた。

彼が暗い所から出て、晩食の膳に着いた時は、小六も六畳から出て来て、兄の向うに坐つた。<sup>すわ</sup>御米は忙しいので、つい忘れたと云つて、座敷の戸を締めに立つた。宗助は弟に夕方になつたら、ちと洋灯を点けるとか、戸を開てるとかして、忙しい姉の手伝でもしたら好かろうと注意したかつたが、昨今引き移つたばかりのものに、気まずい事を云うのも悪かろうと思つてやめた。

御米が座敷から帰つて来るのを待つて、兄弟は始めて茶碗に手を着けた。その時宗助はようやく今日役所の帰りがけに、道具屋の前で坂井に逢つた事と、坂井があの大きな眼鏡を掛けている道

具屋から、抱ほう一いつの屏風びょうぶを買つたと云う話をした。御米は、

「まあ」と云つたなり、しばらく宗助の顔を見ていた。

「じゃきつとあれよ。きつとあれに違ないわね」

小六は始めのうち何にも口を出さなかつたが、だんだん兄夫婦の話を聞いているうちに、ほぼ関係が明瞭めいりょうになつたので、

「全体いくらで売つたのです」と聞いた。御米は返事をする前にちよつと夫の顔を見た。

食事が終ると、小六はじきに六畳へ這入はいつた。宗助はまた炬燵こたつへ帰つた。しばらくして御米も足を温めに来た。そうして次の土曜か日曜には坂井へ行つて、一つ屏風を見て來たらいいだろうと云うような事を話し合つた。

次の日曜になると、宗助は例の通り一週に一返の楽寝を貪ぼつたため、午前半日をとうとう空に潰してしまつた。御米はまた頭が重いとか云つて、火鉢の縁に倚りかかつて、何をするのも懶そうに見えた。こんな時に六畳が空いていれば、朝からでも引込む場所があるのでと思うと、宗助は小六に六畳をあてがつた事が、間接に御米の避難場を取り上げたと同じ結果に陥るので、こどに済まないような気がした。

心持が悪ければ、座敷へ床を敷いて寝たら好かろうと注意しても、御米は遠慮して容易に応じなかつた。それではまた炬燵でも拵えたらどうだ、自分も当るからと云つて、とうとう櫛と掛けふと団を清きよに云いつけて、座敷へ運ばした。

小六は宗助が起きる少し前に、どこかへ出て行つて、今朝は顔さえ見せなかつた。宗助は御米に向つて別段その行先を聞き糺しもしなかつた。この頃では小六に關係した事を云い出して、御米にその返事をさせるのが、氣の毒になつて來た。御米の方から、進んで弟の讒訴ざんそでもするようだと、叱るにしろ、慰さめるにしろ、かえつて始末が好いと考える時もあつた。

午ひるになつても御米は炬燵から出なかつた。宗助はいつそ静かに寝かしておく方が身体からだのためによからうと思つたので、そつと台所へ出て、清にちよつと上の坂井まで行つてくるからと告げて、不斷着の上へ、袂たもとの出る短いインヴァネスを纏まどつて表へ出た。

今まで陰気な室へやにいた所せい為か、通とおりへ来ると急にからりと気が晴

れた。肌の筋肉が寒い風に抵抗して、一時に緊縮するような冬の心持の鋭どく出るうちに、ある快感を覚えたので、宗助は御米もああ家にばかり置いては善くない、気候が好くなつたら、ちと戸外の空氣を呼吸させるようにしてやらなくては毒だと思いながら歩いた。

坂井の家の門を入つたら、玄関と勝手口の仕切になつてゐる生垣の目に、冬に似合わないぱつとした赤いものが見えた。傍へ寄つてわざわざ検べると、それは人形に掛ける小さい夜具であつた。細い竹を袖そでに通して、落ちないように、扇骨木かなめの枝に寄せ掛けた手際てぎわが、いかにも女の子の所作らしく殊しゆ勝しように思われた。こう云う悪戯いたずらをする年頃の娘は固もとよりの事、子供と云う子供を

育て上げた経験のない宗助は、この小さい赤い夜具の尋常に日に干してある有様をしばらく立つて眺めていた。<sup>なが</sup>そうして二十年も昔に父母が、死んだ妹<sup>いもと</sup>のために飾つた、赤い雛<sup>ひなだん</sup>段と五人囃<sup>ごにんばやし</sup>と、模様の美くしい干菓子と、それから甘いようで辛い白酒を思い出した。

坂井の主人は在宅ではあつたけれども、食事中だと云うので、しばらく待たせられた。宗助は座に着くや否や、隣の室<sup>へや</sup>で小さい夜具を干した人達の騒ぐ声を耳にした。下女が茶を運ぶために襖<sup>ふすま</sup>を開けると、襖の影から大きな眼が四つほどすでに宗助を覗いていた。火鉢を持つて出ると、その後からまた違つた顔が見えた。始めてのせいか、襖の開閉<sup>あけたり</sup>のたびに出る顔がことごとく違つて

いて、子供の数が何人あるか分らないように思われた。ようやく下女さが退さがりきりに退さがると、今度は誰だか唐紙からかみを一寸ほど細目に開けて、黒い光る眼だけをその間から出した。宗助も面白くなつて、黙つて手招ぎをして見た。すると唐紙をぴたりと閉たてて、向う側で三四人が声を合して笑い出した。

やがて一人の女の子が、

「よう、御姉様ごせいかずまたいつものように叔母さんおばさんごつこしましようよ」と云い出した。すると姉らしいのが、

「ええ、今日は西洋の叔母さんおばさんごつこよ。東作さんは御父おとうさんさまだからパパで、雪子さんは御母おはなさまだからママつて云うのよ。よくつて」と説明した。その時また別の声で、

「おかしいわね。ママだつて」と云つて嬉しそうに笑つたものが  
あつた。

「わたしそれでもいつも御祖母さまなのよ。御祖母さまの西洋の名が  
なくつちやいけないわねえ。御祖母さまは何て云うの」と聞いた  
ものもあつた。

「御祖母さまはやつぱりババでいいでしよう」と姉がまた説明し  
た。

それから当分の間は、御免下さいましたの、どちらからいらつ  
しゃいましたのと盛に挨拶さかん　あいさつの言葉が交換されていた。その間に  
はちりんちりんと云う電話の仮色こわいろも交つた。すべてが宗助には  
陽気で珍らしく聞えた。

そこへ奥の方から足音がして、主人がこつちへ出て来たらしかつたが、次の間へ入るや否や、

「さあ、御前達はここで騒ぐんじやない。あつちへ行つておいで。御客さまだから」と制した。その時、誰だかすぐに、

「厭だよ。<sup>いや</sup>御父<sup>おと</sup>つちやんべい。大きい御馬買つてくれなくつちや、あつちへ行かないよ」と答えた。声は小さい男の子の声であつた。年が行かないためか、舌がよく回らないので、抗弁のしようがないにも億<sup>おつくう</sup>劫で手間がかかつた。宗助はそこを特に面白く思つた。

主人が席に着いて、長い間待たした失礼を詫びている間に、子供は遠くへ行つてしまつた。

「大変<sup>おにぎ</sup>御賑やかで結構です」と宗助が今自分の感じた通を述べる

と、主人はそれを 愛嬌 あいきょう と受取つたものと見えて、

「いや御覧のごとく乱雑な有様で」と言訳らしい返事をしたが、それを緒に、子供の世話の焼けて、夥 おびた だしく手のかかる事などをいろいろ宗助に話して聞かした。その中で綺麗な支那製の花籃 はなかご のなかへ炭団 たどん を一杯盛 も つて床の間に飾つたと云う滑稽 こつけい と、主人の編上の靴のなかへ水を汲み込んで、金魚を放したと云う悪戯 いたずら が、宗助には大変耳新しかつた。しかし、女の子が多いので服装に物が要るとか、二週間も旅行して帰つてくると、急にみんなの背が一寸ずつも伸びてゐるので、何だか後から追いつかれるような心持がするとか、もう少しすると、嫁入の支度で忙殺されのみならず、きっと貧殺 ひんさつ されるだろうとか云う話になると、

子供のない宗助の耳にはそれほどの同情も起し得なかつた。かえつて主人が口で子供を煩冗<sup>うるさ</sup>がる割に、少しもそれを苦にする様子の、顔にも態度にも見えないのを羨ましく思つた。

好い加減な頃を見計<sup>みはから</sup>つて宗助は、せんだつて話のあつた屏風<sup>びよう</sup>をちよつと見せて貰えまいかと、主人に申し出た。主人はさつそく引き受けて、ぱちぱちと手を鳴らして、召使を呼んだが、蔵<sup>くら</sup>の中にしまつてあるのを取り出して来るよう命じた。そうして宗助の方を向いて、

「つい二三日前までそこへ立てておいたのですが、例の子供が面白半分にわざと屏風の影へ集まつて、いろいろな悪戯をするものですから、傷でもつけられちゃ大変だと思つてしまい込んでしま

いました」と云つた。

宗助は主人のこの言葉を聞いた時、今更手数てかずをかけて、屏風を見せて貰うのが、氣の毒にもなり、また面倒にもなつた。実を云うと彼の好奇心は、それほど強くなかったのである。なるほどいつたん他の所有に帰したものは、たとい元が自分のであつたにしろ、無かつたにしろ、そこを突き留めたところで、實際上には何の効果もない話に違なかつた。

けれども、屏風は宗助の申し出た通り、間もなく奥から縁伝いに運び出されて、彼の眼の前に現れた。そうしてそれが予想通りついこの間まで自分の座敷に立ててあつた物であつた。この事實を発見した時、宗助の頭には、これと云つて大した感動も起らな

かつた。ただ自分が今坐つてゐる畳の色や、天井の柾目<sup>まさめ</sup>や、床の置物や、襖<sup>ふすま</sup>の模様などの中に、この屏風を立てて見て、それに、召使が二人がかりで、蔵の中から大事そうに取り出して来たと云う所作<sup>しょさ</sup>を付け加えて考えると、自分が持つていた時よりは、たしかに十倍以上貴<sup>たつ</sup><sub>なが</sub>とい品のように眺められただけであつた。彼は即座に云うべき言葉を見出し得なかつたので、いたずらに、見慣れたものの上に、さらに新らしくもない眼を据<sup>す</sup>えていた。

主人は宗助をもつてある程度の鑑賞家と誤解した。立ちながら屏風の縁<sup>ふち</sup>へ手を掛けて、宗助の面<sup>おもて</sup>と屏風の面とを比較していたが、宗助が容易に批評を下さないので、

「これは素性<sup>すじよう</sup>のたしかなものです。出が出ですかね」と云つ

た。宗助は、ただ

「なるほど」と云つた。

主人はやがて宗助の後へ回つて来て、指でそこここを指しながら、品評やら説明やらした。その中には、さすが御大名だけあって、好い絵の具を惜氣もなく使うのがこの画家の特色だから、色がいかにもみごとであると云うような、宗助には耳新らしいけれども、普通一般に知れ渡つた事もだいぶ交つていた。

宗助は好い加減な頃を見計らつて、丁寧<sup>ていねい</sup>に礼を述べて元の席に復した。主人も蒲団<sup>ふとん</sup>の上に直つた。そうして、今度は野路<sup>のじ</sup>や空云々という題句やら書体やらについて語り出した。宗助から見ると、主人は書にも俳句にも多くの興味を有つていた。いつの間に

これほどの知識を頭の中へ貯え得らるるかと思うくらい、すべてに心得のある男らしく思われた。宗助は己れを恥じて、なるべく物數もののかずを云わないようにして、ただ向うの話だけに耳を借す事を力めた。

主人は客がこの方面の興味に乏しい様子を見て、再び話を画の方へ戻した。ろく碌なものはないけれども、望ならば所蔵の画帖がじょうや幅物を見せてもいいと親切に申し出した。宗助はせつかくの好意を辞退しない訳に行かなかった。その代りに、失礼ですがと前置をして、主人がこの屏風を手に入れるについて、どれほどの金額を払つたかを尋ねた。

「まあ掘出し物ですね。八十円で買いました」と主人はすぐ答え

た。

宗助は主人の前に坐つて、この屏風に関するいつさいの事を自白しようか、しまいかと思案したが、ふと打ち明けるのも一興だろうと心づいて、とうとう実はこれこれだと、今までの顛末を詳しく述べ出した。主人は時々へえ、へえと驚いたような言葉を挟んで聞いていたが、しまいに、

「じゃあなたは別に書画が好きで、見にいらしつた訳でもないんですね」と自分の誤解を、さも面白い経験でもしたように笑い出した。同時に、そう云う訳なら、自分が直に宗助から相当の値で譲つて貰えばよかつたに、惜しい事をしたと云つた。最後に横町の道具屋をひどく罵（のの）しつて、怪（け）しからん奴（やつ）だと云つた。

宗助と坂井とはこれからだいぶ親しくなつた。

## 十

佐伯の叔母も安之助もその後とんと宗助の宅へは見えなかつた。宗助は固より麹町へ行く余暇を有たなかつた。またそれだけの興味もなかつた。親類とは云いながら、別々の日が二人の家を照らしていた。

ただ小六だけが時々話しに出かける様子であつたが、これとも、そう繁々足を運ぶ訳でもないらしかつた。それに彼は帰つて来て、叔母の家の消息をほとんど御米に語らないのを常として

おつた。御米はこれを故意から出る小六の仕打かとも疑つた。しかし自分が佐伯に対して特別の利害を感じない以上、御米は叔母の動静を耳にしない方を、かえつて喜こんだ。

それでも時々は、先方の様子を、小六と兄の対話から聞き込む事もあつた。一週間ほど前に、小六は兄に、安之助がまた新発明の応用に苦心している話をした。それは印氣<sup>インキ</sup>の助けを借らないで、鮮明な印刷物を拵<sup>こし</sup>らえるとか云う、ちよつと聞くとすこぶる重宝な器械についてであつた。話題の性質から云つても、自分とは全く利害の交渉のないむずかしい事なので、御米は例の通り黙つて口を出さずにいたが、宗助は男だけに幾分か好奇心が動いたと見えて、どうして印氣を使わずに印刷ができるなどと問い合わせ<sup>ただ</sup>して

いた。

専門上の知識のない小六が、精密な返答をし得るはずは無論なかつた。彼はただ安之助から聞いたままを、覚えている限り念を入れて説明した。この印刷術は近來英國で発明になつたもので、根本的にいうとやはり電氣の利用に過ぎなかつた。電氣の一極を活字と結びつけておいて、他の一極を紙に通じて、その紙を活字の上へ圧しつけさえすれば、すぐできるのだと小六が云つた。色は普通黒であるが、手加減しだいで赤にも青にもなるから色刷などの場合には、絵の具を乾かす時間が省けるだけでも大変重宝で、これを新聞に應用すれば、印インキ氣や印氣ロールの費ついを節約する上に、全体から云つて、少くとも従来の四分の一の手数がなくなる点か

ら見ても、前途は非常に有望な事業であると、小六はまた安之助の話した通りを繰り返した。そうしてその有望な前途を、安之助がすでに手の中<sup>うち</sup>に握つたかのごとき口氣<sup>こうき</sup>であつた。かつその多望な安之助の未来のなかには、同じく多望な自分の影が、含まれてゐるようだ。眼を輝やかした。その時宗助はいつもの調子で、むしろ穏やかに、弟の云う事を聞いていたが、聞いてしまつた後でも、別にこれという眼立つた批評は加えなかつた。実際こんな発明は、宗助から見ると、本当のようでもあり、また嘘のようでもあり、いよいよそれが世間に行われるまでは、賛成も反対もできかねたのである。

「じゃ 鰹<sup>かつお</sup>船<sup>ぶね</sup>の方はもう止したの」と、今まで黙つていた御米

が、この時始めて口を出した。

「止したんじゃないんですが、あの方は費用が随分かかるので、いくら便利でも、そう誰も彼も捨てる訳に行かないんだそうです」  
と小六が答えた。小六は幾分か安之助の利害を代表しているような口振であつた。それから三人の間に、しばらく談話が交換されたが、しまいに、

「やつぱり何をしたつて、そう<sup>うま</sup>行くもんじゃあるまいよ」と  
云つた宗助の言葉と、

「坂井さんみたように、御金があつて遊んでいるのが一番いいわね」と云つた御米の言葉を聞いて、小六はまた自分の部屋へ帰つて行つた。

こう云う機会に、佐伯の消息は折々夫婦の耳へ洩れる事はあるが、そのほかには、全く何をして暮らしているか、互に知らないで過す月日が多かつた。

ある時御米は宗助にこんな問を掛けた。

「小六さんは、安さんの所へ行くたんびに、こづかい遣もらでも貰つて来るんでしょうか」

今まで小六について、それほどの注意を払つていなかつた宗助は、突然この間に逢つて、すぐ、「なぜ」と聞き返した。御米はしばらく逡巡ためらつた末、

「だつて、この頃よく御酒を呑んで帰つて来る事があるのよ」と注意した。

「安さんが例の発明や、金儲けの話をするとき、その聞き賃に奢るのかも知れない」と云つて宗助は笑つていた。会話はそれなりでつい発展せずにしまつた。

越えて三日目の夕方に、小六はまた飯時を外して帰つて来なかつた。しばらく待ち合せていたが、宗助はついに空腹だと云い出して、ちよつと湯にでも行つて時間を延ばしたらという御米の小六に対する氣兼に頓着なく、食事を始めた。その時御米は夫に、

「小六さんに御酒を止めるように、あなたから云つちやいけなくつて」と切り出した。

「そんなに意見しなければならないほど飲むのか」と宗助は少し

案外な顔をした。

御米はそれほどでもないと、弁護しなければならなかつた。けれども実際は誰もいない昼間のうちなどに、あまり顔を赤くして帰つて来られるのが、不安だつたのである。宗助はそれなり放つておいた。しかし腹の中では、はたして御米の云うごとく、どこかで金を借りるか、貰うかして、それほど好きもしないものを、わざと飲むのではなかろうかと疑ぐつた。

そのうち年がだんだん片寄つて、夜が世界の三分の二を領する(りょう)ように押しつまつて來た。風が毎日吹いた。その音を聞いているだけでも生活に陰気な響を与えた。小六はどうしても、六畳に籠つて、一日を送るに堪えなかつた。落ちついて考えれば考えるほ

ど、頭が淋<sup>さむ</sup>しくつて、いたたまれなくなるばかりであつた。茶の間へ出て嫂<sup>あによめ</sup>と話すのはなお厭<sup>いや</sup>であつた。やむを得ず外へ出た。そうして友達の宅<sup>うち</sup>をぐるぐる回つて歩いた。友達も始のうちに、平<sup>つも</sup>生の小六に対するように、若い学生のしたがる面白い話をいくらでもした。けれども小六はそう云う話が尽きても、まだやつて來た。それでしまいには、友達が、小六は、退屈の余りに訪問をして、談話の復習に耽<sup>ふけ</sup>るものだと評した。たまには学校の下<sup>したよみ</sup>読みやら研究やらに追われている多忙の身だと云う風もして見せた。小六は友達からそう呑氣<sup>のんき</sup>な怠けもののように取り扱われるのを、大変不愉快に感じた。けれども宅に落ちついでは、読書も思索も、まるでできなかつた。要するに彼ぐらいの年輩の青年が、一人前

の人間になる階梯かいていとして、修むべき事おさ、力むべき事には、内部の動搖やら、外部の束縛やらで、いつさい手が着かなかつたのである。

それでも冷たい雨が横に降つたり、雪融ゆきどけの道がはげしく泥ぬつたりする時は、着物を濡ぬらさなければならず、足袋たびの泥を乾かさなければならぬ面倒があるので、いかな小六も時によると、外出を見合せる事があつた。そう云う日には、實際困却すると見えて、時々六畳から出て来て、のそりと火鉢の傍そばへ坐つて、茶などを注いで飲んだ。そうしてそこに御米でもいると、世間話の一つや二つはしないとも限らなかつた。

「小六さん御酒好き」と御米が聞いた事があつた。

「もう直<sup>じき</sup>正月ね。あなた御<sup>おぞうに</sup>雜煮<sup>いくつ</sup>上がつて」と聞いた事もあつた。

そう云う場合が度<sup>たび</sup>重<sup>かさ</sup>なるに連れて、二人の間は少しずつ近寄る事ができた。しまいには、姉さんちよつとここを縫つて下さいと、小六の方から進んで、御米に物を頼むようになつた。そうして御米<sup>かすり</sup>が紺<sup>かすり</sup>の羽織を受取つて、袖<sup>そで</sup>口<sup>くち</sup>の綻<sup>ほころび</sup>を繕つてゐる間、小六は何にもせずにそこへ坐<sup>すわ</sup>つて、御米の手先を見つめていた。これが夫だと、いつまでも黙つて針を動かすのが、御米の例であつたが、相手が小六の時には、そう投<sup>なげやり</sup>遣にできないのが、また御米の性質であつた。だからそんな時には力めても話をした。話の題目で、ややともすると小六の口に宿りたがるものは、彼の未来を

どうしたら好かろうと云う心配であつた。

「だつて小六さんなんか、まだ若いじやありませんか。何をしたつてこれからだわ。そりや兄さんの事よ。そう悲観してもいいのは」

御米は二度ばかりこういう慰め方をした。三度目には、

「来年になれば、安さんの方でどうか都合して上げるつて受合つて下すつたんじやなくつて」と聞いた。小六はその時不<sub>ふたしか</sub>情な表情をして、

「そりや安さんの計画が、口でいう通り<sub>うま</sub>旨く行けば訳はないんでしようが、だんだん考えると、何だか少し当にならないような気がし出してね。<sub>かつおぶね</sub>鰹船もあんまり儲<sub>もう</sub>からないようだから」と云

つた。御米は小六の慄然としている姿を見て、それを時々酒気を  
帶びて帰つて来る、どこかに殺氣を含んだ、しかも何が癪に障る  
んだか訳が分らないでいてはなはだ不平らしい小六と比較すると、  
心の中うちで氣の毒にもあり、またおかしくもあつた。その時は、

「本当にね。兄さんにさえ御金があると、どうでもして上げる事  
ができるんだけれども」と、御世辞でも何でもない、同情の意を  
表した。

その夕暮であつたか、小六はまた寒い身体からだを外套マントに包んで出て  
行つたが、八時過に帰つて来て、兄夫婦の前で、袂たもとから白い細長  
い袋を出して、寒いから蕎麦搔そばがきをこしらえて食おうと思つて、佐伯  
へ行つた帰りに買つて來たと云つた。そうして御米が湯を沸かし

てゐるうちに、煮出しを拵えるとか云つて、しきりに鰯節を搔いた。

その時宗助夫婦は、最近の消息として、安之助の結婚がとうとう春まで延びた事を聞いた。この縁談は安之助が学校を卒業すると間もなく起つたもので、小六が房州から帰つて、叔母に学資の供給を断わられる時分には、もうだいぶ話が進んでいたのである。正式の通知が来ないので、いつ纏まとまつたか、宗助はまるで知らなかつたが、ただ折々佐伯へ行つては、何か聞いて来る小六を通じてのみ、彼は年内に式を挙げるはずの新夫婦を予想した。その他には、嫁の里がある会社員で、有福な生計くらしをしている事と、その学校が女学館であるという事と、兄弟がたくさんあると云う事だけ

を、同じく小六を通じて耳にした。写真にせよ顔を知つてるのは  
小六ばかりであった。

「好い器量？」と御米が聞いた事がある。

「まあ好い方でしよう」と小六が答えた事がある。

その晩はなぜ暮のうちに式を済まさないかと云うのが、蕎麦搔  
のでき上る間、三人の話題になつた。御米は方位でも悪いのだろ  
うと臆測した。宗助は押しつまつて日がないからだろうと考え  
た。ひとり小六だけが、

「やつぱり物質的の必要かららしいです。先が何でもよほど派出はで  
な家うちなんで、叔母さんの方でもそう單簡たんかんに済まされないんでし  
ょう」といつにない世帯染みた事を云つた。

## 十一

御米のぶらぶらし出したのは、秋も半ば過ぎて、紅葉の赤黒く  
 縮れる頃であつた。京都にいた時分は別として、広島でも福岡で  
 も、あまり健康な月日を送つた経験のない御米は、この点に掛け  
 ると、東京へ帰つてからも、やはり仕合せとは云えなかつた。こ  
 の女には生れ故郷の水が、性に合わないのだろうと、疑ぐれば疑  
 ぐられるくらい、御米は一時悩んだ事もあつた。

近頃はそれがだんだん落ちついて来て、宗助の気を揉む機会  
 も、年に幾度と勘定ができるくらい少くなつたから、宗助

は役所の出入りに、御米はまた夫の留守の立居に、等しく安心して時間を過す事ができたのである。だからことしの秋が暮れて、薄い霜しもを渡る風が、つらく肌を吹く時分になつて、また少し心持が悪くなり出しても、御米はそれほど苦にもならなかつた。始のうちは宗助にさえ知らせなかつた。宗助が見つけて、医者に掛かれと勧めても、容易に掛からなかつた。

そこへ小六こうろくが引越して來た。宗助はその頃の御米を觀察して、体質の状態やら、精神の模様やら、夫だけによく知つていたから、なるべくは、人ひと数かずを殖ふやして宅うちの中を混雜ごたつさせたくないとは思つたが、事情やむを得ないので、成るがままにしておくよりほかに、手段の講じようもなかつた。ただ口の先で、なるべく安静に

していなくてはいけないと云う矛盾した助言は与えた。御米は微笑して、

「大丈夫よ」と云つた。この答を得た時、宗助はなおの事安心ができなくなつた。ところが不思議にも、御米の気分は、小六が引越して来てから、ずっと引立つた。自分に責任の少しでも加わつたため、心が緊張したものと見えて、かえつて平生よりは、かいがいしく夫や小六の世話をした。小六にはそれがまるで通じなかつたが、宗助から見ると、御米が在来よりどれほど力めているかがよく解つた。宗助は心のうちで、このまめやかな細君に新らしい感謝の念を抱くと同時に、こう気を張り過ぎる結果が、一度に身体に障るような騒ぎでも引き起してくれなければいいがと心配

した。

不幸にも、この心配が暮の二十日過<sup>はつかすぎ</sup>になつて、突然事実になりかけたので、宗助は予期の恐怖に火が点いたように、いたく狼狽<sup>はつきり</sup>した。その日は判然土に映らない空が、朝から重なり合つて、重い寒さが終日人の頭を抑えつけていた。御米は前の晩にまた寝られないで、休ませ損なつた頭を抱えながら、辛抱して働く起出したが、起つたり動いたりするたびに、多少脳に応<sup>こた</sup>える苦痛はあつても、比較的明るい外界の刺戟<sup>しげき</sup>に紛れたためか、じつと寝ていながら、頭だけが冴えて痛むよりは、かえつて凌ぎやすかつた。とかくして夫を送り出すまでは、しばらくしたらまたいつものように折り合つて来る事と思つて我慢していた。ところが宗助

がいなくなつて、自分の義務に一段落が着いたという氣の弛みが  
出ると等しく、濁つた天気がそろそろ御米の頭を攻め始めた。空  
を見ると凍つてゐるようであるし、家中にいると、陰気な障  
子の紙を透して、寒さが浸み込んで来るかと思われるくらいだ  
のに、御米の頭はしきりに熱つて來た。仕方がないから、今朝あ  
げた蒲団をまた出して来て、座敷へ延べたまま横になつた。それ  
でも堪えられないので、清に濡手拭を絞らして頭へ乗せた。そ  
れが直生温くなるので、枕元に金盥を取り寄せて時々絞り  
易えた。

午までこんな姑息手段で断えず額を冷やして見たが、いつこ  
うはかばかしい験もないで、御米は小六のために、わざわざ起  
ひる  
こそくしゅだん  
げん

きて、いつしょに食事をする根気もなかつた。<sup>きよ</sup>清にいいつけて膳<sup>ぜ</sup>を立<sup>んだて</sup>させて、それを小六に薦めさしたまま、自分はやはり床を離れずにいた。そうして、平生夫のする柔かい括<sup>くくりまくら</sup>枕<sup>こわ</sup>を持つて来て貰つて、堅いのと取り替えた。御米は髪の損れるのを、女らしく苦にする勇氣にさえ乏しかつたのである。

小六は六畳から出て来て、ちよつと襖<sup>ふすま</sup>を開けて、御米の姿を覗<sup>のぞ</sup>き込んだが、御米が半ば床の間の方を向いて、眼を塞<sup>ふさ</sup>いでいたので、寝ついたとでも思つたものか、一言の口も利かずに、またそつと襖を閉めた。そうして、たつた一人大きな食卓を専領して、始めからさらさらと茶漬を搔<sup>か</sup>き込む音をさせた。

二時頃になつて、御米はやつとの事、とろとろと眠つたが、眼

が覚めたら額を捲いた濡れ手拭がほとんど乾くくらい暖かになつていて。その代り頭の方は少し楽になつた。ただ肩から背筋へ掛けて、全体に重苦しいような感じが新らしく加わつた。御米は何でも精をつけなくては毒だという考から、一人で起きて遅い午飯を軽く食べた。

「御気分はいかがでござります」と清が御給仕をしながら、しきりに聞いた。御米はだいぶいいようだつたので、床を上げて貰つて、火鉢に倚つたなり、宗助の帰りを待ち受けた。

宗助は例刻に帰つて来た。神田の通りで、門並旗を立てて、もう暮の売出しを始めた事だの、勧工場で紅白の幕を張つて樂隊に景氣をつけさして いる事だのを話した末、

「賑<sup>にぎ</sup>やかだよ。ちよつと行つて御覧。なに電車に乗つて行けば訳はない」と勧めた。そうして自分は寒さに腐<sup>ふしょく</sup>蝕<sup>よく</sup>されたように赤い顔をしていた。

御米はこう宗助から勞<sup>いた</sup>わられた時、何だか自分の身体の悪い事を訴たえるに忍びない心持がした。実際またそれほど苦しくもなかつた。それでいつもの通り何気ない顔をして、夫に着物を着換えさしたり、洋服を畳んだりして夜に入つた。

ところが九時近くになつて、突然宗助に向つて、少し加減が悪いから先へ寝たいと云い出した。今まで平生の通り機嫌よく話していくだけに、宗助はこの言葉を聞いてちよつと驚ろいたが、大した事でもないと云う御米の保証に、ようやく安心してすぐ休む

支度をさせた。

御米が床へ這入つてから、約二十分ばかりの間、宗助は耳の傍に鉄瓶の音を聞きながら、静な夜を丸心の洋灯に照らしていった。彼は来年度に一般官吏に増俸の沙汰があるという評判を思い浮べた。またその前に改革か淘汰が行われるに違ないと噂に思い及んだ。そうして自分はどつちの方へ編入されるのだろうと疑つた。彼は自分を東京へ呼んでくれた杉原が、今もなお課長として本省にいないのを遺憾とした。彼は東京へ移つてから不思議とまだ病氣をした事がなかつた。したがつてまだ欠勤届を出した事がなかつた。学校を中途でやめたなり、本はほとんど読まないのだから、学問は人並にできないが、役所でやる仕事に差支える

ほどの頭脳ではなかつた。

彼はいろいろな事情を総合そうごうして考えた上、まあ大丈夫だろうと腹の中できめた。そうして爪の先で軽く鉄瓶の縁ふちを敲たたいた。その時座敷で、

「あなたちよつと」と云う御米の苦しそうな声が聞えたので、我知らず立ち上がった。

座敷へ来て見ると、御米は眉まゆを寄せて、右の手で自分の肩おきを抑おさえながら、胸まで蒲団ふとんの外へ乗り出していた。宗助はほとんど器械的に、同じ所へ手を出した。そうして御米の抑えている上から、固く骨の角かどを攫つかんだ。

「もう少し後うしろの方」と御米が訴えるように云つた。宗助の手が御

米の思う所へ落ちつくまでには、二度も三度もそこここと位置を易えなければならなかつた。指で圧してみると、頸と肩の継目の少し背中へ寄つた局部が、石のように凝つていた。御米は男の力いっぱいにそれを抑えてくれと頼んだ。宗助の額からは汗が煮染み出した。それでも御米の満足するほどは力が出なかつた。

宗助は昔の言葉で早打肩はやうちかたというのを覚えていた。小さい時祖父から聞いた話に、ある侍が馬に乗つてどこかへ行く途中で、急にこの早打肩はやうちかたに冒おかされたので、すぐ馬から飛んで下りて、たちまち小柄を抜くや否や、肩先を切つて血を出したため、危うい命を取り留めたというのがあつたが、その話が今明らかに記憶の焼しふし点ようてんに浮んで出た。その時宗助はこれはならんと思つた。けれ

どもはたして刃物を用いて、肩の肉を突いていいものやら、悪いものやら、決しかねた。

御米はいつになく逆上<sup>(のぼ)</sup>せて、耳まで赤くしていた。頭が熱いかと聞くと苦しそうに熱いと答えた。宗助は大きな声を出して清につたので、清は朝の通り氷嚢<sup>こおりぶくろ</sup>へ冷たい水を入れて来いと命じた。氷嚢があいにく無かつたので、金<sup>かなだらい</sup>盥<sup>盥</sup><sup>(てぬぐい)</sup>に手拭<sup>(てぬぐい)</sup>を浸けて持つて来た。

清が頭を冷やしているうち、宗助はやはり精いっぱい肩を抑えていた。時々少しばかいと聞いても、御米は微かに苦しいと答えるだけであつた。宗助は全く心細くなつた。思い切つて、自分で馳<sup>か</sup>け出して医者を迎<sup>むかい</sup>に行こうとしたが、後が心配で一足も表へ出る気にはなれなかつた。

「清、御前急いで通りへ行つて、氷嚢を買つて医者を呼んで来い。まだ早いから起きてるだろう」

清はすぐ立つて茶の間の時計を見て、

「九時十五分でござります」と云いながら、それなり勝手口へ回つて、ごそごそ下駄を探してゐるところへ、旨い具合に外から小六はいが帰つて來た。例の通り兄には挨拶あいさつもしないで、自分の部屋へ這入ろうとするのを、宗助はおい小六はげと烈しく呼び止めた。小六は茶の間で少し躊躇ちゆううちよしていたが、兄からまた二声ほど続けざまに大きな声を掛けられたので、やむを得ず低い返事をして、襖から顔を出した。その顔は酒氣のまだ醒めない赤い色を眼の縁ふちに帯びていた。部屋の中を覗き込んで、始めて吃驚びっくりした様子で、

「どうかなすつたんですか」と酔よいが一時に去つたような表情をした。

宗助は清に命じた通りを、小六に繰り返して、早くしてくれと急き立てた。小六は外套マントも脱ぬがずに、すぐ玄関へ取つて返した。

「兄さん、医者まで行くのは急いでも時間が掛かりますから、坂井さんの電話を借りて、すぐ来るよう頼みましょう」

「ああ。そうしてくれ」と宗助は答えた。そうして小六の帰る間、清に何なんべん返となく金盥かの水を易えさしては、一生懸命に御米の肩おを压しつけたり、揉もんだりしてみた。御米の苦しむのを、何もせずにただ見ているに堪たえなかつたから、こうして自分の気まぎを紛らしていたのである。

この時の宗助に取つて、医者の来るのを今か今かと待ち受ける心ほど苛いものはなかつた。彼は御米の肩を揉みながらも、絶えず表の物音に気を配つた。

ようやく医者が来たときは、始めて夜が明けたような心持がした。医者は商売柄だけあつて、少しも狼狽えた様子を見せなかつた。小さい折鞆おりかばんを脇に引き付けて、落ちつき払つた態度で、慢性病の患者でも取り扱うように緩ぐりした診察をした。その逼せまらない顔色を傍はたで見ていたせいか、わくわくした宗助の胸もようやく治おさまつた。

医者は芥子からしを局部へ貼はる事と、足を湿布しつぶで温める事と、それから頭を冰で冷す事を、応急手段として宗助に注意した。そうし

て自分で芥子を搔いて、御米の肩から頸の根へ貼りつけてくれた。湿布は清と小六とで受持つた。宗助は手拭の上から氷嚢を額の上に当てがつた。

とかくするうち約一時間も経つた。医者はしばらく経過を見て行こうと云つて、それまで御米の枕元に坐つていた。世間話も折々は交えたが、おおかたは無言のまま二人共に御米の容体を見守る事が多かつた。夜は例のごとく静に更けた。

「だいぶ冷えますな」と医者が云つた。宗助は氣の毒になつたので、あの注意をよく聞いた上、遠慮なく引き取ってくれるようになど頼んだ。その時御米は先刻よりはだいぶ軽快になつていたからである。

「もう大丈夫でしょう。頓服とんぷくを一回上げますから今夜飲んで御覧なさい。多分寝られるだろうと思います」と云つて医者は帰つた。小六はすぐその後あとを追つて出て行つた。

小六が薬取に行つた間に、御米は

「もう何時」と云いながら、枕元の宗助を見上げた。宵<sup>よい</sup>とは違つて頬から血ひが退いて、洋灯ランプに照らされた所が、ことに蒼あおじろ白しろく映つた。宗助は黒い毛の乱れたせいだろうと思つて、わざわざ鬢びんの毛を搔き上げてやつた。そして、

「少しへいいだろう」と聞いた。

「ええよつほど楽になつたわ」と御米はいつもの通り微笑を洩らした。御米は大抵苦しい場合でも、宗助に微笑を見せる事を忘れ

なかつた。茶の間では、清が突伏したまま軒をかいていた。

「清を寝かしてやつて下さい」と御米が宗助に頼んだ。

小六が薬取りから帰つて来て、医者の云いつけ通り服薬を済ましたのは、もうかれこれ十二時近くであつた。それから二十分と経たないうちに、病人はすやすや寝入つた。

「好い塩梅だ」と宗助が御米の顔を見ながら云つた。小六もしばらく嫂の様子を見守つていたが、

「もう大丈夫でしよう」と答えた。二人は氷嚢を額からおろした。やがて小六は自分の部屋へ這入る。宗助は御米の傍へ床を延べていつものごとく寝た。五六時間の後冬の夜は錐のような霜を挟さんで、からりと明け渡つた。それから一時間すると、大地を染

める太陽が、さえ遮ぎるものがないあおぞら蒼空はばかに憚りなく上のぼつた。御米はまだすやすや寝ていた。

そのうち朝餉あさげも済んで、出勤の時刻がようやく近づいた。けれども御米は眠りから覚める氣色けしきもなかつた。宗助は枕まくらべ辺に曲んこごで、深い寝息を聞きながら、役所へ行こうか休もうかと考えた。

## 十二

朝の内は役所で常のごとく事務を執つていたが、折々昨夕ゆうべの光景が眼に浮ぶに連れて、自然御米の病氣およねが気に罹るかかるので、仕事は思うように運ばなかつた。時には変な間違をさえした。宗助はそうすけ

午<sup>ひる</sup>になるのを待つて、思い切つて宅<sup>うち</sup>へ帰つて來た。

電車の中では、御米の眼<sup>が</sup>がいつ頃覚めたろう、覚めた後は心持<sup>が</sup>がだいぶ好くなつたろう、発作<sup>ほっさ</sup>ももう起る気遣<sup>きづかい</sup>なかろうと、すべて悪くない想像ばかり思い浮べた。いつもと違つて、乗客の非常に少ない時間に乗り合わせたので、宗助は周囲の刺戟<sup>しげき</sup>に気を使う必要がほとんどなかつた。それで自由に頭の中へ現われる画を何枚となく眺<sup>なが</sup>めた。そのうちに、電車は終点に來た。

宅の門<sup>かど</sup>口まで來ると、家の中はひつそりして、誰もいないようであつた。格子<sup>こうし</sup>を開けて、靴を脱いで、玄関<sup>えんがわ</sup>に上がつても、出て来るものはなかつた。宗助はいつものように縁側<sup>えんがわ</sup>から茶の間へ行かずに、すぐ取付<sup>とつき</sup>の襖<sup>ふすま</sup>を開けて、御米の寝ている座敷へ這<sup>は</sup>

入つた。見ると、御米は依然として寝ていた。枕元の朱塗の盆に散薬の袋と洋杯が載つていて、その洋杯の水が半分残っているところも朝と同じであつた。頭を床の間の方へ向けて、左の頬と芥子を貼つた襟元が少し見えるところも朝と同じであつた。呼息よりほかに現実世界と交通のないようと思われる深い眠も朝見た通りであつた。すべてが今朝出掛けに頭の中へ収めて行つた光景と少しも変わっていなかつた。宗助は外套も脱がずに、上から曲んで、すうすういう御米の寝息をしばらく聞いていた。御米は容易に覚めそうにも見えなかつた。宗助は昨夕御米が散薬を飲んでから以後の時間を指を折つて勘定した。そうしてようやく不安の色を面上に表わした。昨夕までは寝られないのが心配になつたが、こ

う前後不覚に長く寝るところを眼まのあたりに見ると、寝る方が何かの異状ではないかと考え出した。

宗助は蒲団ふとんへ手を掛けて二三度軽く御米ゆめを揺振ゆすぶつた。御米の髪が括枕くくりまくらの上で、波を打つように動いたが、御米は依然としてすうすう寝ていた。宗助は御米を置いて、茶の間から台所へ出た。流し元の小桶こおけの中に茶碗と塗椀が洗わないまま浸つけてあつた。下女部屋のぞを覗きよくと、清が自分の前に小さな膳ぜんを控えたなり、御櫃おはちに倚りかかって突伏していた。宗助はまた六畳の戸を引いて首を差し込んだ。そこには小六ころくが掛蒲団を一枚頭から引被つて寝ていた。宗助は一人で着物を着換えたが、脱ぎ捨てた洋服も、人手を借りずに自分で畳んで、押入にしまった。それから火鉢へ火を継い

で、湯を沸かす用意をした。二三分は火鉢に持たれて考えていたが、やがて立ち上がつて、まず小六から起しにかかつた。次に清を起した。二人とも驚ろいて飛び起きた。小六に御米の今朝から今までの様子を聞くと、実は余り眠いので、十一時半頃飯を食つて寝たのだが、それまでは御米もよく熟睡していたのだと云う。

「医者へ行つてね。昨夜の薬を戴いてから寝出して、今になつても眼が覚めませんが、差支ないでしようかつて聞いて来てく

れ

「はあ」

小六は簡単な返事をして出て行つた。宗助はまた座敷へ来て御米の顔を熟視した。起してやらなくつては悪いような、また起し

ては身体からだへ障さわるような、分別ふんべつのつかない惑まどいを抱いだいて腕組をした。間もなく小六が帰つて来て、医者はちようど往診に出かけるところであつた、訳を話したら、では今から一二軒寄つてすぐ行こうと答えた、と告げた。宗助は医者が見えるまで、こうして放つておいて構わないのかと小六に問い合わせたが、小六は医者が以上よりほかに何にも語らなかつたと云うだけなので、やむを得ず元のごとく枕まくら辺にじつと坐つていた。そうして心うちの中で、医者も小六も不親切過ぎるようを感じた。彼はその上昨日ゆうべ御米を介抱している時に帰つて来た小六の顔を思い出して、なお不愉快になつた。小六が酒を呑のむ事は、御米の注意で始めて知つたのであるが、その後気をつけて弟の様子をよく見てみると、なるほど何だか真ま

面目でないところもあるようなので、いつかみつちり異見でもしなければなるまいくらいに考えてはいたが、面白くもない二人の顔を御米に見せるのが、氣の毒なので、今日までわざと遠慮していたのである。

「云い出すなら御米の寝ている今である。今ならどんな気不<sup>きまづ</sup>味いことを双方で言い募<sup>つの</sup>つたつて、御米の神經に障る氣遣<sup>きづかい</sup>はない」

ここまで考えついたけれども、知覚のない御米の顔を見ると、またその方が気がかりになつて、すぐにも起したい心持がするので、つい決し兼てぐずぐずしてゐた。そこへようやく医者が来てくれた。

昨日の折鞄<sup>おりかばん</sup>をまた丁寧<sup>ていねい</sup>に傍<sup>わき</sup>へ引きつけて、緩<sup>ゆつ</sup>くり巻煙<sup>まきたば</sup>

草<sup>こ</sup>を吹かしながら、宗助の云うことを、はあはあと聞いていたが、どれ拝見致しましようと御米の方へ向き直つた。彼は普通の場合のように病人の脈を取つて、長い間自分の時計を見つめていた。それから黒い聴診器を心臓の上に当てた。それを丁寧にあちらこちらと動かした。最後に丸い穴の開いた反射鏡を出して、宗助に蠅<sup>ろうそく</sup>燭<sup>ランプ</sup>を点けてくれと云つた。宗助は蠅燭を持たないので、清に洋灯<sup>しきい</sup>を点けさした。医者は眠っている御米の眼を押し開けて、仔細に反射鏡の光を睫<sup>まつげ</sup>の奥に集めた。診察はそれで終つた。

「少し薬が利き過ぎましたね」と云つて宗助の方へ向き直つたが、宗助の眼の色を見るや否<sup>いな</sup>や、すぐ、「しかし御心配になる事はありません。こう云う場合に、もし悪

い結果が起るとすると、きっと心臓か脳を冒すのですが、今拝見したところでは双方共異状は認められませんから」と説明してくれた。宗助はそれでようやく安心した。医者はまた自分の用了眠り薬が比較的新らしいもので、学理上、他の睡眠剤のように有害でない事や、またその効目ききめが患者の体质に因つて、程度に大変な相違のある事などを語つて帰つた。帰るとき宗助は、

「では寝られるだけ寝かしておいても 差支さしつかえありませんか」と聞いたら、医者は用さえなければ別に起す必要もあるまいと答えた。

医者が帰つたあとで、宗助は急に空腹になつた。茶の間へ出ると、先刻掛けておいた鉄瓶てつびんがちんちん沸たぎつていた。清を呼んで、

膳を出せと命ずると、清は困つた顔つきをして、まだ何の用意もできていないと答えた。なるほど晩食には少し間があつた。宗助は樂々と火鉢の傍に胡坐そばを搔いて、大根の香の物を噛みながら湯漬ゆづけを四杯ほどつづけざまに搔き込んだ。それから約三十分ほどしたら御米の眼がひとりでに覚めた。

### 十三

新年の頭を揃そろらえようという気になつて、宗助は久し振に髪か結みゆい床いどの敷居またを跨またいだ。暮のせいか客がだいぶ立て込んでいるので、鍊はさみの音が二三カ所で、同時にちよきちよき鳴つた。この寒さ

を無理に乗り越して、一日も早く春に入ろうと焦慮するような表通の活動を、宗助は今見て来たばかりなので、その鍔の音が、いかにも忙しない響となつて彼の鼓膜を打つた。

しばらく焜<sup>ストーブ</sup>の傍<sup>はた</sup>で煙草<sup>たばこ</sup>を吹かして待つてゐる間に、宗助は自分と関係のない大きな世間の活動に否応なしに捲<sup>ま</sup>き込まれて、やむを得ず年を越さなければならぬ人のごとくに感じた。正月を眼の前へ控えた彼は、實際これという新らしい希望もないのに、いたずらに周囲から誘われて、何だかざわざわした心持を抱いていたのである。

御米<sup>およね</sup>の発作<sup>ほつき</sup>はようやく落ちついた。今では平日<sup>いつ</sup>のごとく外へ出ても、家の事がそれほど気にかかるないぐらいになつた。余所<sup>よそ</sup>に

比べると閑静な春の支度も、御米から云えば、年に一度の忙がしさには違なかつたので、あるいはいつも通りの準備さえ抜いて、常よりも簡単に年を越す覚悟をした宗助は、蘇生よみがえつたようにはつきりした妻さいの姿を見て、恐ろしい悲劇が一步遠退とおのいた時のことくに、胸を撫なででおろした。しかしその悲劇がまたいついかなる形で、自分の家族を捕えに来るか分らないと云う、ぼんやりした掛念けねんが、折々彼の頭のなかに霧きりとなつてかかつた。

年の暮に、事を好むとしか思われない世間の人が、故意わざと短い日を前へ押し出したがつて醒あくせく齷あくせくする様子を見ると、宗助はなおの事この茫漠ぼうばくたる恐怖の念に襲おそわれた。成らうことなら、自分だけは陰気な暗い師走しわすのうちに一人残つていたい思さえ起つた。よう

やく自分の番が来て、彼は冷たい鏡のうちに、自分の影を見出した時、ふとこの影は本来何者だろうと眺めた。<sup>なが</sup>首から下は眞白な布に包まれて、自分の着ている着物の色も縞も全く見えなかつた。その時彼はまた床屋の亭主が飼つている小鳥の籠が、鏡の奥に映つてゐる事に気がついた。鳥が止り木の上をちらりちらりと動いた。

頭へ香<sup>におい</sup>のする油を塗られて、景氣のいい声を後から掛けられて、表へ出たときは、それでも清々<sup>せいせい</sup>した心持であつた。御米の勧め通り髪を刈つた方が、結局<sup>つまり</sup>氣を新たにする効果があつたのを、冷たい空氣の中で、宗助は自覺した。

水道税の事でちよつと聞き合せる必要が生じたので、宗助は帰

り路に坂井へ寄つた。下女が出て来て、こちらへと云うから、いつもの座敷へ案内するかと思うと、そこを通り越して、茶の間へ導びいていつた。すると茶の間の襖が二尺ばかり開いていて、中から三四人の笑い声が聞えた。坂井の家庭は相変らず陽気であつた。

主人は光沢の好い長火鉢の向側に坐つていた。細君は火鉢を離れて、少し縁側の障子の方へ寄つて、やはりこちらを向いていた。主人の後に細長い黒い梓に嵌めた柱時計がかかっていた。時計の右が壁で、左が袋戸棚になつていた。その張交に石摺だの、俳画だの、扇の骨を抜いたものなどが見えた。

主人と細君のほかに、筒袖の揃いの模様の被布を着た女の子

が二人肩を擦りつけ合つて坐つていた。片方は十二三で、片方は十  
ぐらいたおに見えた。大きな眼を揃えて、襖の陰から入つて来た宗  
助の方を向いたが、二人の眼元にも口元にも、今笑つたばかりの  
影が、まだゆたかに残つていた。宗助は一応室へやの内を見回して、  
この親子のほかに、まだ一人妙な男が、一番入口に近い所に畏ま  
つているのを見出した。

宗助は坐つて五分と立たないうちに、先刻の笑声は、この変な  
男と坂井の家族との間に取り換わされた問答から出る事を知つた。  
男は砂埃でざらつきそうな赤い毛と、日に焼けて生涯褪さ  
めつこない強い色をもつていた。瀬戸物の鉗の着いた白木綿の  
襯衣を着て、手織の硬い布子の襟から財布の紐みたような長い丸ま

打うちをかけた様子は、滅多めうたに東京などへ出る機会のない遠い山の國のものとしか受け取れなかつた。その上男はこの寒いのに膝ひざこ小僧ぞうそうを少し出して、紺こんの落ちた小倉こくらの帶の尻に差した手拭てぬぐいを抜いては鼻の下を擦こすつた。

「これは甲斐かいの国から反たん物ものを背負つてわざわざ東京まで出て来る男なんです」と坂井の主人が紹介すると、男は宗助の方を向いて、

「どうか旦那、一つ買つておくれ」と挨拶あいさつをした。

なるほど銘仙めいせんだの御召おめしだの、白紺しろつむぎだのがそこら一面に取り散らしてあつた。宗助はこの男の形裝なりや言葉遣ことばづかいのおかしい割に、立派な品物を背中へ乗せて歩行あるくのをむしろ不思議に思つた。

主人の細君の説明によると、この織屋の住んでる村は焼石ばかりで、米も粟も取れないから、やむを得ず桑を植えて蚕を飼うんだそうであるが、よほど貧しい所と見えて、柱時計を持つてゐる家が一軒だけで、高等小学へ通う小供が三人しかないと云う話であつた。

「字の書けるものは、この人ぎりなんだそうですよ」と云つて細君は笑つた。すると織屋も、

「本当のこんだよ、奥さん。読み書き算筆さんびつのできるものは、おれよりほかにねえんだからね。全く非道ひどい所にや違ない」と眞面目に細君の云う事を首肯うけがつた。

織屋はいろいろの反物を主人や細君の前へ突きつけては、「買

つておくれ」という言葉をしきりに繰り返した。そりや高いよいくらいぐらに御負けなどと云われると、「值じやねえね」とか、「挙むからそれで買つておくれ」とか、「まあ目方を見ておくれ」とかすべて異様な田舎いなかびた答をした。そのたびに皆みんなが笑つた。主人夫婦はまた閑ひまだと見えて、面白半分にいつまでも織屋を相手にした。

「織屋、御前そうして荷を背負しょつて、外へ出て、時分どきになつたら、やつぱり御膳ごぜんを食べるんだろうね」と細君が聞いた。

「飯を食わねえでいられるもんじやないよ。腹の減る事ちゅうたら

「どんな所で食べるの」

ら」

「どんな所で食べるちゅうて、やつぱり茶屋で食うだね」

主人は笑いながら茶屋とは何だと聞いた。織屋は、飯を食わす所が茶屋だと答えた。それから東京へ出立<sup>でたて</sup>には飯が非常に旨いので、腹を据<sup>す</sup>えて食い出すと、大抵の宿屋は叶<sup>かな</sup>わない、三度三度食つちや氣の毒だと云うような事を話して、また皆<sup>みんな</sup>を笑わした。

織屋はしまいに撚糸の紬<sup>よりいとつむぎ</sup>と、白紬<sup>しろろ</sup>を一匹<sup>いつぴき</sup>細君に売りつけた。

宗助はこの押しつまつた暮に、夏の紬を買う人を見て余裕のあるものはまた格別だと感じた。すると、主人が宗助に向つて、

「どうですあなたも、ついでに何か一つ。奥さんの不斷着でも」と勧めた。細君もこう云う機会に買って置くと、幾割か値安に買<sup>べんぎ</sup>る便宜<sup>べんぎ</sup>を説いた。そうして、

「なに、御<sup>おはらい</sup>扱<sup>は</sup>はいつでもいいんです」と受合つてくれた。宗助はどうとう御米のために銘仙を一反買う事にした。主人はそれをさんざん値切つて三円に負けさした。

織屋は負けた<sup>あと</sup>でまた、

「全く值じやねえね。泣きたくなるね」と云つたので、大勢がまた一度に笑つた。

織屋はどこへ行つてもこういう鄙<sup>ひな</sup>びた言葉を使つて通しているらしかつた。毎日馴染<sup>なじ</sup>みの家をぐるぐる回<sup>まわ</sup>つて歩いているうちに、は、背中の荷がだんだん軽<sup>かる</sup>くなつて、しまいに紺<sup>こん</sup>の風呂敷<sup>ふろしき</sup>と真田紐<sup>さなだひも</sup>だけが残る。その時分にはちょうど旧の正月が來るので、ひとまず国元へ帰つて、古い春を山の中で越して、それからまた

新らしい反物を背負えるだけ背負つて出て来るのだと云つた。そ  
うして養蚕の忙しい四月の末か五月の初までに、それを悉皆  
金に換えて、また富士の北影の焼石ばかりころがつてゐる小村へ  
帰つて行くのだそうである。

「宅へ来出してから、もう四五年になりますが、いつ見ても同じ  
事で、少しも変らないんですよ」と細君が注意した。

「實際珍らしい男です」と主人も評語を添えた。三日も外へ出ない  
と、町幅がいつの間にか取り広げられていたり、一日新聞を読  
まないと、電車の開通を知らずに過したりする今の世に、年に二  
度も東京へ出ながら、こう山男の特色をどこまでも維持して行く  
のは、實際珍らしいに違なかつた。宗助はつくづくこの織屋の容よ

貌 <sup>うぼう</sup> やら態度やら服装やら言葉使やらを観察して、一種氣の毒な思をなした。

彼は坂井を辞して、家 <sup>うち</sup> へ帰る途中にも、折々インヴァネスの羽根の下に抱えて来た銘仙の包 <sup>つつみ</sup>を持ち易えながら、それを三円という安い価 <sup>ね</sup>で売つた男の、粗末な布子の縞 <sup>ぬのこしま</sup>と、赤くてばさばさした髪の毛と、その油 <sup>あぶらけ</sup>気のない硬 <sup>こわ</sup>い髪の毛が、どういう訳か、頭の真中で立派に左右に分けられている様を、絶えず眼の前に浮べた。宅では御米が、宗助に着せる春の羽織をようやく縫い上げて、圧 <sup>おし</sup>の代りに坐蒲団 <sup>ざぶとん</sup>の下へ入れて、自分でその上へ坐つてゐるところであつた。

「あなた今夜敷いて寝て下さい」と云つて、御米は宗助を顧 <sup>かえり</sup>みた。

夫から、坂井へ来ていた甲斐の男の話を聞いた時は、御米もさすがに大きな声を出して笑つた。そうして宗助の持つて帰つた銘仙の縞柄しまがらと地合じあいを飽かず眺めでは、安い安いと云つた。銘仙は全く品のいいものであつた。

「どうして、そう安く売つて割に合うんでしょう」としまいに聞き出した。

「なに中へ立つ呉服屋もうが儲け過ぎてるのさ」と宗助はその道に明るいような事を、この一反の銘仙から推断して答えた。

夫婦の話はそれから、坂井の生活に余裕のある事と、その余裕のために、横町の道具屋などに意外な儲け方もうかたをされる代りに、時とするところ云う織屋などから、差し向き不用のものを廉価れんかに買

つておく便宜<sup>べんぎ</sup>を有して いる事などに移つて、しまいにその家庭の  
いかにも陽氣で、賑<sup>にぎ</sup>やかな模様に落ちて行つた。宗助はその時突  
然語調を更<sup>か</sup>えて、

「なに金があるばかりじやない。一つは子供が多いからさ。子供  
さえあれば、大抵貧乏な家<sup>うち</sup>でも陽氣になるものだ」と御米を覺し  
た。

その云い方が、自分達の淋<sup>さみ</sup>しい生<sup>しようがい</sup>涯<sup>涯</sup>を、多少自ら窘<sup>みずかたしな</sup>めるよ  
うな苦<sup>にが</sup>い調子を、御米の耳に伝えたので、御米は覚えず膝<sup>ひざ</sup>の上の  
反物から手を放して夫の顔を見た。宗助は坂井から取つて來た品  
が、御米の嗜好<sup>しこう</sup>に合つたので、久しぶりに細君を喜ばせてやつた  
自覚があるばかりだつたから、別段そこには気がつかなかつた。

御米もちよつと宗助の顔を見たなりその時は何にも云わなかつた。けれども夜<sup>よ</sup>に入つて寝る時間が来るまで御米はそれをわざと延ばしておいたのである。

二人はいつもの通り十時過床に入つたが、夫の眼がまだ覚めている頃を見計らつて、御米は宗助の方を向いて話しかけた。

「あなた先刻<sup>さつき</sup>小供がないと淋<sup>さむ</sup>しくつていけないとおつしやつてね」

宗助はこれに類似の事を普般的に云つた覺<sup>おぼえ</sup>はたしかにあつた。

けれどもそれは強<sup>あな</sup>がちに、自分達の身の上について、特に御米の注意を惹<sup>ひ</sup>くために口にした、故意の觀察でないのだから、こう改たまつて聞き糺<sup>ただ</sup>されると、困るよりほかはなかつた。

「何も宅<sup>うち</sup>の事を云つたのじやないよ」

この返事を受けた御米は、しばらく黙っていた。やがて、「でも宅の事を始終淋しい淋しいと思つていらつしやるから、必竟あんな事をおつしやるんでしょう」と前とほぼ似たような問を繰り返した。宗助は固よりそうだと答えなければならぬ或物を頭の中に有つていた。けれども御米を憚つて、それほど明白地な自白をあえてし得なかつた。この病氣上りの細君の心を休めるためには、かえつてそれを冗談にして笑つてしまふ方が善かろうと考えたので、

「淋しいと云えば、そりや淋しくないでもないがね」と調子を易かえてなるべく陽気に出たが、そこで詰まつたぎり、新らしい文句も、面白い言葉も容易に思いつけなかつた。やむを得ず、

「まあいいや。心配するな」と云つた。御米はまた何とも答えない  
かつた。宗助は話題を変えようと思つて、  
「ゆうべ昨夕も火事があつたね」と世間話をし出した。すると御米は急  
に、

「私は実にあなたに御氣の毒で」と切なそうに言訳を半分して、  
またそれなり黙つてしまつた。ランプ洋灯はいつものように床の間の上  
に据えてあつた。御米は灯に背そむいていたから、宗助には顔の表情  
が判はつきり然分らなかつたけれども、その声は多少涙でうるんでいる  
ように思われた。今まで仰向あおむいて天井を見ていた彼は、すぐ妻の方へ向き直つた。そして薄暗い影になつた御米の顔をじつと眺ながめた。御米も暗い中からじつと宗助を見ていた。そして、

「疾どうからあなたに打ち明けて謝罪あやまろう謝罪あやまろうと思つていた  
んですが、つい言い悪かつたもんだから、それなりにしておいた  
のです」と途切れ途切れに云つた。宗助には何の意味かまるで解  
らなかつた。多少はヒステリーのせいかとも思つたが、全然そう  
とも決しかねて、しばらく茫然ぼんやりしてゐた。すると御米が思い詰  
めた調子で、

「私にはとても子供のできる見込はないのよ」と云い切つて泣き  
出した。

宗助はこの可憐な自白をどう慰さめていいか分別に余つて当惑  
していたうちにも、御米に対してはなはだ氣の毒だという思が非  
常に高まつた。

「子供なんざ、無くてもいいじゃないか。上の坂井さんみたようにたくさん生れて御覧、傍<sup>はた</sup>から見っていても気の毒だよ。まるで幼稚園のようで」

「だつて一人もできないときまつちまつたら、あなただつて好か<sup>よ</sup>ないでしよう」

「まだできないときまりやしないじやないか。これから生れるかも知れないやね」

御米はなおと泣き出した。宗助も途方に暮れて、発作の治まるのを穏やかに待っていた。そうして、緩<sup>ゆつ</sup>くり御米の説明を聞いた。

夫婦は和合同<sup>どうせい</sup>棲<sup>い</sup>という点において、人並<sup>ひそ</sup>以上に成功したと同時に、子供にかけては、一般の隣人よりも不幸であつた。それも

始から宿る種がなかつたのなら、まだしもだが、育つべきものを中途で取り落したのだから、さらに不幸の感が深かつた。

始めて身重になつたのは、二人が京都を去つて、広島に瘠世やせじよ帯たいを張つてゐる時であつた。懷妊かいにんと事がきまつたとき、御米はこの新らしい経験に対して、恐ろしい未来と、嬉しい未来を一度に夢に見るような心持を抱いて日を過ごした。宗助はそれを眼に見えない愛の精に、一種の確証となるべき形を与えた事実と、ひとり解釈して少なからず喜んだ。そうして自分の命を吹き込んで肉の塊かたまりが、目の前に踊る時節を指を折つて楽しみに待つた。ところが胎児は、夫婦の予期に反して、五ヶ月まで育つて突然お下りてしまつた。その時分の夫婦の活計くらしは苦しい苛づらい月ばかり続いて

いた。宗助は流産した御米の蒼い顔を眺めて、これも必竟は世帯の苦勞から起るんだと判じた。そうして愛情の結果が、貧のため打ち崩されて、永く手の裡に捕える事のできなくなつたのを残念がつた。御米はひたすら泣いた。

福岡へ移つてから間もなく、御米はまた酸いものを嗜む人となつた。一度流産すると癪になると聞いたので、御米は万に注意して、つましやかに振舞つていた。そのせいか経過は至極順当に行つたが、どうした訳か、これという原因もないのに、月足らずで生れてしまつた。産婆は首を傾けて、一度医者に見せるように勧めた。医者に診て貰うと、発育が充分でないから、室内の温度を一定の高さにして、昼夜とも変らないくらい、人工的に暖めな

ければいけないと云つた。宗助の手際てぎわでは、室内に暖炉だんろを据えつける設備をするだけでも容易ではなかつた。夫婦はわが時間と算段の許す限りを尽して、専念に赤児の命を護まもつた。けれどもすべては徒労に帰した。一週間の後、二人の血を分けた情の塊なきはまとまりはついに冷たくなつた。御米は幼児の亡骸なきがらを抱いて、

「どうしましよう」と啜すすり泣いた。宗助は再度の打撃を男らしく受けた。冷たい肉が灰になつて、その灰がまた黒い土に和かするまで、一口も愚痴ぐちらしい言葉は出さなかつた。そのうちいつとなく、二人の間に挟はさまつていた影のようなものが、しだいに遠退とおのいて、ほどなく消えてしまつた。

すると三度目の記憶が来た。宗助が東京に移つて始ての年に、

御米はまた懷妊したのである。出京の当座は、だいぶん身體が衰ろえていたので、御米はもちろん、宗助もひどくそこを氣遣つたが、今度こそはという腹は両方にあつたので、張のある月を無事にだんだんと重ねて行つた。ところがちょうど五月目になつて、御米はまた意外の失敗しくじりをやつた。その頃はまだ水道も引いてなかつたから、朝晩下女が井戸端へ出て水を汲んだり、洗濯をしなければならなかつた。御米はある日裏にいる下女に云いつける用ができるので、井戸流いどながしの傍そばに置いた鹽たらいの傍まで行つて話をしたついでに、流ながしむこうを向むけへ渡ろうとして、青い苔こけの生えている濡ぬれた板の上へ尻しり持もつを突いた。御米はまたやり損なつたとは思つたが、自分の粗忽そごつを面白がつて、宗助にはわざと何事も語らずにその場

を通した。けれどもこの震動が、いつまで経つても胎児の発育にこれという影響も及ぼさず、したがつて自分の身体からだにも少しの異状を引き起さなかつた事がたしかに分つた時、御米はようやく安心して、過去の失しつを改めて宗助の前に告げた。宗助は固もとより妻を咎める意もなかつた。ただ、

「よく気をつけないと危ないよ」と穏やかに注意を加えて過ぎた。  
とかくするうちに月が満ちた。いよいよ生れるという間際まぎわまで日が詰つたとき、宗助は役所へ出ながらも、御米の事がしきりに気にかかつた。帰りにはいつも、今日はことによると留守のうちになどと案じ続けては、自分の家の格子こうしの前に立つた。そうして半ば予期している赤児の泣声が聞えないと、かえつて何かの変で

も起つたらしく感じて、急いで宅<sup>うち</sup>へ飛び込んで、自分と自分の粗忽を恥ずる事があつた。

幸に御米の産氣づいたのは、宗助の外に用のない夜中だつたので、傍にいて世話のできると云う点から見ればはなはだ都合が好かつた。産婆も緩<sup>ゆつ</sup>くり間に合うし、脱脂綿その他の準備もことごとく不足なく取り揃<sup>そろ</sup>えてあつた。産も案外軽かつた。けれども肝心の小兒は、ただ子宮を逃れて広い所へ出たといふまでで、浮世の空氣を一口も呼吸しなかつた。産婆は細い硝子<sup>ガラス</sup>の管のようなものを取りつて、小さい口の内<sup>なか</sup>へ強い呼息<sup>いき</sup>をしきりに吹き込んだが、効目はまるでなかつた。生れたものは肉だけであつた。夫婦はこの肉に刻みつけられた、眼と鼻と口とを髣<sup>ほうふつ</sup>髣した。しかしその

咽喉から出る声はついに聞く事ができなかつた。

産婆は出産のあつたつい一週間前に来て、丁寧に胎児の心臓まで聽診して、至極御健全だと保証して行つたのである。よし産婆の云う事に間違があつて、腹の児の發育が今までのうちにどこかで止つていたにしたところで、それが直取り出されない以上、母体は今日まで平気に持ち応える訳がなかつた。そこをだんだん調べて見て、宗助は自分がいまだかつて聞いた事のない事實を発見した時に、思わず恐れ驚ろいた。胎児は出る間際まで健康であつたのである。けれども臍帶纏絡と云つて、俗に云う胞を頸へ捲きつけていた。こう云う異常の場合には、固より産婆の腕で切り抜けるよりほかにしようのないもので、経験のある婆さん

なら、取り上げる時に、**旨く**頸に掛かつた胞を外して引き出すは  
ずであつた。宗助の頼んだ産婆もかなり年を取つてゐるだけに、  
このくらいのことは心得ていた。しかし胎児の頸を絡んでいた臍  
帶は、時たまあるごとく一重ひとつえではなかつた。**二重に**細い咽喉を卷  
いている胞を、あの細い所を通す時に外し損そくなつたので、小兒は  
ぐつと氣管を絞しめられて窒息してしまつたのである。

罪は産婆にもあつた。けれどもなかば以上は御米の落度おちどに違な  
かつた。臍帶纏絡の変状は、御米が井戸端で滑つて痛く尻餅しりもちを  
**搗**ついた五力月前すでに自ら醸みずかかもしたものと知れた。御米は産後の蓐じ  
中よくちゅうにその始末を聞いて、ただ軽く首肯いたぎり何にも云わな  
かつた。そうして、疲労に少し落ち込んだ眼を霧うませて、長い睫ま

毛つけをしきりに動かした。宗助は慰さめながら、手ハンド帛ケチで頬に流れる涙を拭ふいてやつた。

これが子供に関する夫婦の過去であつた。この苦にがい経験を嘗めた彼らは、それ以後幼児について余り多くを語るを好まなかつた。けれども二人の生活の裏側は、この記憶のために淋さむしく染めつけられて、容易に剥はげそうには見えなかつた。時としては、彼ひ我がの笑声を通してさえ、御互の胸に、この裏側が薄暗く映る事もあつた。こういう訳だから、過去の歴史を今夫に向つて新たに繰り返そうとは、御米も思い寄らなかつたのである。宗助も今更妻からそれを聞かせられる必要は少しも認めていなかつたのである。

御米の夫に打ち明けると云つたのは、固より一人の共有してい

た事実についてではなかつた。彼女は三度目の胎児を失つた時、夫からその折の模様を聞いて、いかにも自分が残酷な母であるかのごとく感じた。自分が手を下した覚がないにせよ、考えようによつては、自分と生を与えたものの生を奪うために、暗闇くらやみと明海かるみの途中に待ち受けて、これを絞殺こうさつしたと同じ事であつたらである。こう解釈した時、御米は恐ろしい罪を犯した悪人おのれと己おのれを見做さない訳に行かなかつた。そうして思わざる徳義上の苛責かじやくを人知れず受けた。しかもその苛責を分つて、共に苦しんでもくれるものは世界中に一人もなかつた。御米は夫にさえこの苦しみを語らなかつたのである。

彼女はその時普通の産婦のように、三週間を床の中で暮らした。

それは身体から云うと極めて安静の三週間に違なかつた。同時に心から云うと、恐るべき忍耐の三週間であつた。宗助は亡児のために、小さい柩を拵らえて、人の眼に立たない葬儀を営なんだ。

しかる後、また死んだもののために小さな位牌を作つた。位牌には黒い漆で 戒名かいみょうが書いてあつた。位牌の主は戒名を持つていた。けれども 俗名ぞくみょうは両親ふたおやといえども知らなかつた。宗助は最初それを茶の間の箪笥たんすの上へ載せて、役所から帰ると絶えず線香を焚いた。その香においが六畳に寝てゐる御米の鼻に時々通つた。彼女の官能は当時それほどに鋭どくなつていたのである。しばらくしてから、宗助は何を考えたか、小さい位牌いはいを箪笥たんすの抽出ひきだしの底へしまつてしまつた。そこには福岡で亡くなつた小供の位牌と、

東京で死んだ父の位牌が別々に綿で包んで丁寧に入れてあつた。東京の家を畳むとき宗助は先祖の位牌を一つ残らず携えて、諸所を漂泊するの煩わしさに堪えなかつたので、新らしい父の分だけを鞆の中に収めて、その他はことごとく寺へ預けておいたのである。

御米は宗助のするすべてを寝ながら見たり聞いたりしていた。

そうして布団の上に仰向になつたまま、この二つの小さい位牌を、眼に見えない因果の糸を長く引いて互に結びつけた。それからその糸をなお遠く延ばして、これは位牌にもならずに流れてしまつた、始めから形のない、ぼんやりした影のような死児の上に投げかけた。御米は広島と福岡と東京に残る一つずつの記憶の底に、

動かしがたい運命の厳かな支配を認めて、その厳かな支配の下に立つ、幾月日いくつきひの自分を、不思議にも同じ不幸を繰り返すべく作られた母であると観じた時、時ならぬ呪詛のろいの声を耳の傍はたに聞いた。彼女が三週間の安静を、蒲団ふとんの上に貪むさぼらなければならぬよう<sup>し</sup>に、生理的に強いられている間、彼女の鼓膜はこの呪詛の声でほとんど絶えず鳴っていた。三週間の安臥は、御米に取つて實に比類のない忍耐の三週間であつた。

御米はこの苦しい半月余りを、枕の上でじつと見つめながら過ごした。しまいには我慢して横になつているのが、いかにも苛かつらつたので、看護婦の帰つた明る日に、こつそり起きてぶらぶらして見たが、それでも心に逼せまる不安は、容易に紛まぎらせなかつた。退た

儀な身体を無理に動かす割に、頭の中は少しも動いてくれないので、また落胆りして、ついには取り放しの夜具の下へ潜り込んで、人の世を遠ざけるように、眼を堅く閉つてしまふ事もあつた。

そのうち定期の三週間も過ぎて、御米の身体は自からずつきりなつた。御米は奇麗に床を払つて、新らしい氣のする眉を再び鏡に照らした。それは更衣の時節であつた。御米も久しぶりに綿の入つた重いものを脱ぎ棄てて、肌に垢の触れない軽い気持を爽やかに感じた。春と夏の境をぱつと飾る陽気な日本の風物は、淋しい御米の頭にも幾分かの反響を与えた。けれども、それはただ沈んだものを搔き立てて、賑やかな光りのうちに浮かしたまでであつた。御米の暗い過去の中にその時一種的好奇心が萌したの

である。

天気の勝れて美くしいある日の午前、御米はいつもの通り宗助を送り出してから直に、表へ出た。もう女は日傘ひがさを差して外を行くべき時節であつた。急いで日向ひなたを歩くと額の辺あたリが少し汗ばんだ。御米は歩き歩き、着物を着換える時、箪笥を開けたら、思わず一番目の抽出の底にしまつてあつた、新らしい位牌に手が触れた事を思いつづけて、とうとうある易えきしや者の門を潜くぐつた。

彼女は多数の文明人に共通な迷信を子供の時から持つていた。

けれども平生はその迷信がまた多数の文明人と同じように、遊戯的に外に現われるだけで済んでいた。それが実生活の厳かな部分を冒おかすようになつたのは、全く珍らしいと云わなければならなか

つた。御米はその時真面目な態度と真面目な心をもつて、易者の前に坐つて、自分が将来子を生むべき、また子を育てるべき運命を天から与えられるだろうかを確めた。易者は大道に店を出して、往来の人の身の上を一二錢で占なう人と、少しも違つた様子もなく、算木をいろいろに並べて見たり、籠竹を揉んだり數えたりした後で、仔細らしく腮の下の鬚を握つて何か考えたが、終りに御米の顔をつくづく眺めた末、

「あなたには子供はできません」と落ちつき払つて宣告した。御米は無言のまま、しばらく易者の言葉を頭の中で噛んだり碎いたりした。それから顔を上げて、

「なぜでしよう」と聞き返した。その時御米は易者が返事をする

前に、また考へるだらうと思つた。ところが彼はまともに御米の眼の間を見詰めたまま、すぐ

「あなたは人に對してすまない事をした覺おぼえがある。その罪たたかずが祟たたかずつてゐるから、子供はけつして育たない」と云い切つた。御米はこの一言いちげんに心臓を射抜かれる思があつた。くしやりと首を折つたなり家うちへ帰つて、その夜は夫の顔さえろくろく見上げなかつた。

御米の宗助に打ち明けないで、今まで過したというのは、この易者の判断であつた。宗助は床の間に乗せた細い洋灯ランプの灯ひが、夜の中に沈んで行きそうな静かな晩に、始めて御米の口からその話を聞いたとき、さすがに好い氣味はしなかつた。

「神經の起つた時、わざわざそんな馬鹿な所へ出かけるからさ。

錢<sup>ぜに</sup>を出して下らない事を云われてつまらないじゃないか。その後もその占の宅<sup>うらないうち</sup>へ行くのかい」

「恐ろしいから、もうけつして行かないわ」

「行かないがいい。馬鹿氣<sup>まづき</sup>ている」

宗助はわざと鷹揚<sup>おうよう</sup>な答をしてまた寝てしまつた。

## 十四

宗<sup>そう</sup>助<sup>すけ</sup>と御米<sup>およね</sup>とは仲の好い夫婦に違なかつた。いつしよになつてから今<sup>こんにち</sup>日まで六年ほどの長い月日を、まだ半日も氣不味く暮した事はなかつた。言<sup>いさ</sup>かい逆<sup>か</sup>に顔を赤らめ合つた試<sup>ためし</sup>はなおなかつた。

二人は呉服屋の反物を買つて着た。米屋から米を取つて食つた。けれどもその他には一般の社会に待つところのきわめて少ない人間であつた。彼らは、日常の必要品を供給する以上の意味において、社会の存在をほとんど認めていなかつた。彼らに取つて絶対に必要なものは御互だけで、その御互だけが、彼らにはまた充分であつた。彼らは山の中にいる心を抱いて、都會に住んでいた。

自然の勢として、彼らの生活は單調に流れない訳に行かなかつた。彼らは複雑な社会の煩を避け得たと共に、その社会の活動から出るさまざまの経験に直接触れる機会を、自分と塞いでしまつて、都會に住みながら、都會に住む文明人の特權を棄てたような結果に到着した。彼らも自分達の日常に変化のない事は折々自覚

した。御互あが御互に飽きるの、物足りなくなるのという心は微塵みじんも起らなかつたけれども、御互の頭に受け入れる生活の内容には、刺戟しげきに乏しい或物が潜んでいるような鈍にぶうい訴つたえがあつた。それにもかかわらず、彼らが毎日同じ判を同じ胸に押して、長の月日を倦うまず渡つて来たのは、彼らが始から一般の社会に興味を失つていたためではなかつた。社会の方で彼らを二人ぎりに切りつめて、その二人に冷かな背そびらを向けた結果にほかならなかつた。外に向つて生長する余地を見出しえなかつた二人は、内に向つて深く延び始めたのである。彼らの生活は広さを失なうと同時に、深さを増して來た。彼らは六年の間世間に散漫な交渉を求めなかつた代りに、同じ六年の歳さい月げつを挙げて、互の胸を掘り出した。彼らの命

は、いつの間にか互の底にまで喰い入つた。二人は世間から見れば依然として二人であつた。けれども互から云えば、道義上切れる神経系は、最後の纖維に至るまで、互に抱き合つてでき上つていた。彼らは大きな水盤の表に滴した<sup>はじ</sup>たつた二点の油のようなものであつた。水を弾いて二つがいっしょに集まつたと云うよりも、水に弾かれた勢で、丸く寄り添つた結果、離れる事ができなくなつたと評する方が適當であつた。

彼らはこの抱合の中に、尋常の夫婦に見出しがたい親和と飽<sup>ほ</sup>満<sup>うまん</sup>と、それに伴なう倦怠<sup>けんたい</sup>とを兼ね具えていた。そうしてその倦怠の慵い氣分に支配されながら、自己を幸福と評価する事だけは

忘れなかつた。倦怠は彼らの意識に眠のような幕を掛けて、二人の愛をうつとり霞ます事はあつた。けれども簾で神経を洗われる不安はけつして起し得なかつた。要するに彼らは世間に疎いだけそれだけ仲の好い夫婦であつたのである。

彼らは人並以上に睦ましい月日を渝らずに今日から明日へと繋いで行きながら、常はそこに気がつかずに顔を見合わせていくようなもの、時々自分達の睦まじがる心を、自分で確と認める事があつた。その場合には必ず今まで睦まじく過ごした長の歳月を溯のぼつて、自分達がいかな犠牲を払つて、結婚をあえてしたかと云う当時を憶い出さない訳には行かななかつた。彼らは自然が彼らの前にもたらした恐るべき復讐の下に戦きながら跪づいた。

同時にこの復讐を受けるために得た互の幸福に對して、愛の神に一弁の香を焚く事を忘れなかつた。彼らは鞭むちうたれつつ死に赴くものであつた。ただその鞭の先に、すべてを癒いやす甘い蜜の着さとている事を覺つたのである。

宗助は相當に資産のある東京ものの子弟として、彼らに共通な派出しこうな嗜好を、学生時代には遠慮なく充みたした男である。彼はその時服装なりにも、動作にも、思想にも、ことごとく当世らしい才人の面影おもかげを漲みなぎらして、昂たかい首を世間に擡もたげつつ、行こうと思あたう辺かっぽりを潤歩えりした。彼の襟の白かつたごとく、彼の洋袴ズボンの裾が奇麗に折り返されていたごとく、その下から見える彼の靴足袋くつたびが模様入のカシミヤであつたごとく、彼の頭は華奢きやしゃな世間向きであつた。

彼は生れつき理解の好い男であつた。したがつて大した勉強をする気にはなれなかつた。学問は社会へ出るための方便と心得ていたから、社会を一步退ぞかなくつては達する事のできない、学者という地位には、余り多くの興味をもつていなかつた。彼はただ教場へ出て、普通の学生のする通り、多くのノートブックを黒くした。けれども宅へ帰つて来て、それを読み直したり、手を入れたりした事は滅多になかつた。休んで抜けた所さえ大抵はそのままにして放つて置いた。彼は下宿の机の上に、このノートブックを奇麗に積み上げて、いつ見ても整然と秩序のついた書斎を空にしていた。外を出歩るいた。友達は多く彼の寛闊を羨んだ。宗助も得意であつた。彼の未来は虹のように美くしく彼の眸を照ら

した。

その頃の宗助は今と違つて多くの友達を持つていた。実を云うと、軽快な彼の眼に映するすべての人は、ほとんど誰彼の区別なく友達であつた。彼は敵という言葉の意味を正当に解し得ない楽天家として、若い世をのびのびと渡つた。

「なに不景気な顔さえしなければ、どこへ行つたつて 驚迎され るもんだよ」と学友の安井によく話した事があつた。實際彼の顔は、他<sup>ひと</sup>を不愉快にするほど深刻な表情を示し得た試がなかつた。

「君は身体<sup>からだ</sup>が丈夫だから結構だ」とよくどこかに故障の起る安井が羨ましがつた。この安井というのは国は越<sup>えちぜん</sup>前だが、長く横浜にいたので、言葉や様子は毫も東京ものと異なる点がなかつた。

着物道楽で、髪の毛を長くして真中から分ける癖があつた。高等学校は違つていたけれども、講義のときよく隣合せに並んで、時々聞き損なつた所などを後から質問するので、口を利き出したのが元になつて、つい懇意になつた。それが学年の始りだつたので、京都へ来て日のまだ浅い宗助にはだいぶんの便宜であつた。彼は安井の案内で新らしい土地の印象を酒のごとく吸い込んだ。二人は毎晩のように三条とか四条とかいう賑やかな町を歩いた。時によると京極きょうごくも通り抜けた。橋の真中に立つて鴨川かもがわの水を眺めた。東山ひがしやまの上に出る静かな月を見た。そうして京都の月は東京の月よりも丸くて大きいように感じた。町や人に厭きたときは、土曜と日曜を利用して遠い郊外に出た。宗助は至る所の大竹藪おおたけやぶ

に緑の籠<sup>こも</sup>る深い姿を喜んだ。松の幹の染めたよう赤いのが、日を照り返して幾本となく並ぶ風情<sup>ふぜい</sup>を楽しんだ。ある時は大悲閣へ登つて、即非<sup>そくひ</sup>の額の下に仰向<sup>あおむか</sup>きながら、谷底の流を下る櫓<sup>くだら</sup>の音を聞いた。その音が雁<sup>かり</sup>の鳴声によく似ているのを二人とも面白がつた。ある時は、平八茶屋<sup>へいはぢぢや</sup>まで出掛けて行つて、そこに一日寝ていた。そうして不味<sup>まず</sup>い河魚の串に刺したのを、かみさん<sup>くし</sup>に焼かして酒を呑んだ。そのかみさんは、手拭<sup>てぬぐい</sup>を被<sup>かぶ</sup>つて、紺<sup>こん</sup>の立付<sup>たつつけ</sup>みたようなものを穿いていた。

宗助はこんな新らしい刺戟<sup>しげき</sup>の下に、しばらくは慾求の満足を得た。けれどもひととおり古い都<sup>におい</sup>の臭<sup>か</sup>を嗅いで歩くうちに、すべてがやがて、平板に見えだして來た。その時彼は美くしい山の色と

清い水の色が、最初ほど鮮明な影を自分の頭に宿さないのを物足らず思い始めた。彼は暖かな若い血を抱いて、その熱りを冷す深い縁に逢えなくなつた。そうかといつて、この情熱を焼き尽すほどの烈しい活動には無論出会わなかつた。彼の血は高い脈を打つて、いたずらにむず痒く彼の身体の中を流れた。彼は腕組をして、坐ながら四方の山を眺めた。そうして、

「もうこんな古臭い所には厭きた」と云つた。

安井は笑いながら、比較のため、自分の知つてゐる或友達の故郷の物語をして宗助に聞かした。それは淨瑠璃の間の土山雨が降るとある有名な宿の事であつた。朝起きてから夜寝るまで、眼に入るものは山よりほかにない所で、まるで擂鉢の底に住ん

でいると同じ有様だと告げた上、安井はその友達の小さい時分の経験として、五月雨さみだれの降りつづく折などは、小供心に、今にも自分しゆくの住んでいた宿が、四方の山から流れて来る雨の中に浸かつてしまいそうで、心配でならなかつたと云う話をした。宗助はそんな擂鉢の底で一生を過す人の運命ほど情ないものはあるまいと考えた。

「そう云う所に、人間がよく生きていられるな」と不思議ふしきぎそうな顔をして安井に云つた。安井も笑つていた。そうして土山つちやまから出た人物うちの中では、千両函せんりょうばこを摩り替えて礎はりつけになつたのが一番大きいのだと云う一口話をやはり友達から聞いた通り繰り返した。狭い京都に飽きた宗助は、单调な生活を破る色彩として、そう云

う出来事も百年に一度ぐらいは必要だろうとまで思つた。

その時分の宗助の眼は、常に新らしい世界にばかり注がれていた。だから自然がひととおり四季の色を見せてしまつたあとでは、再び去年の記憶を呼び戻すために、花や紅葉もみじを迎える必要がなくなつた。強く烈しい命に生きたと云う証券を飽あくまで握りたかつた彼には、活きた現在と、これから生れようとする未来が、当面の問題であつたけれども、消えかかる過去は、夢同様に価の乏しあたいい幻影に過ぎなかつた。彼は多くの剥はげかかつた社やしろと、寂果さびはてた寺を見尽して、色の褪さめた歴史の上に、黒い頭を振り向ける勇気を失いかけた。寝ねぼけた昔に 徘徊ていかいするほど、彼の気分は枯れていなかつたのである。

学年の終りに宗助と安井とは再会を約して手を分つた。安井はひとまず郷里の福井へ帰つて、それから横浜へ行くつもりだから、もしその時には手紙を出して通知をしよう、そうしてなるべくならいつしよの汽車で京都へ下ろう、もし時間が許すなら、興津あたりで泊つて、清見寺や三保の松原や、久能山でも見ながら緩くくり遊んで行こうと云つた。宗助は大いによからうと答えて、腹のなかではすでに安井の端書きを手にする時の心持さえ予想した。宗助が東京へ帰つたときは、父は固よりもまだ丈夫であつた。小六は子供であつた。彼は一年ぶりに殷んな都の炎熱と煤煙を呼吸するのをかえつて嬉しく感じた。燐くような日の下に、渦を捲いて狂い出しそうな瓦の色が、幾里となく続く景色を、高い所か

ら眺めて、これでこそ東京だとと思う事さえあつた。今の宗助なら目を眩まわしかねない事々物々が、ことごとく壮快の二字を彼の額に焼き付けべく、その時は反射して来たのである。

彼の未来は封じられた蓄のように、開かない先は他に知れないばかりでなく、自分にも確つかとは分らなかつた。宗助はただ洋々の二字が彼の前途に棚引たなびいている気がしただけであつた。彼はこの暑い休暇中にも卒業後の自分に対する謀を忽はかりごあるがせにはしなかつた。彼は大学を出てから、官途につこうか、または実業に従おうか、それすら、まだ判然はつきりと心にきめていなかつたにかかわらず、どちらの方面でも構わず、今のうちから、進めるだけ進んでおく方が利益だと心づいた。彼は直接父の紹介を得た。父を通して間接

にその知人の紹介を得た。そうして自分の将来を影響し得るような人を物色して、二三の訪問を試みた。彼らのあるものは、避暑という名義の下に、すでに東京を離れていた。あるものは不在であつた。またあるものは多忙のため時を期して、勤務先で会おうと云つた。宗助は日のまだ高くならない七時頃に、エレベーター昇降器で煉瓦造れんがづくりの三階へ案内されて、そこの応接間に、もう七八人も自分と同じように、同じ人を待つている光景を見て驚ろいた事もあつた。彼はこうして新らしい所へ行つて、新らしい物に接するのが、用向の成否に関わらず、今まで眼に付かずに過ぎた活きた世界の断片を頭へ詰め込むような気がして何となく愉快であつた。

父の云いつけで、毎年の通り虫干の手伝をさせられるのも、こ

んな時には、かえつて興味の多い仕事の一部分に數えられた。彼は冷たい風の吹き通す土蔵の戸前の湿つぽい石の上に腰を掛けて、古くから家にあつた江戸名所図会と、江戸砂子という本を物珍しそうに眺めた。畳まで熱くなつた座敷の真中へ胡坐を搔いて、下女の買つて来た樟脣脳を、小さな紙片に取り分けては、医者でくれる散薬のような形に畳んだ。宗助は小供の時から、この樟脣の高い香と、汗の出る土用と、炮烙灸と、蒼空を緩く舞う鳶とを連想していた。

とかくするうちに節は立秋に入つた。二百十日の前には、風が吹いて、雨が降つた。空には薄墨の煮染んだような雲がしきりに動いた。寒暖計が二三日下がり切りに下がつた。宗助はまた行

李<sup>うり</sup>を麻縄<sup>から</sup>で絡<sup>から</sup>げて、京都へ向う支度をしなければならなくなつた。

彼はこの間にも安井と約束のある事は忘れなかつた。家<sup>うち</sup>へ帰つた当座は、まだ二ヶ月も先の事だからと緩くり構えていたが、だんだん時日<sup>せま</sup>が逼<sup>はさま</sup>るに従つて、安井の消息が気になつてきた。安井はその後一枚の端書<sup>はがき</sup>さえ寄こさなかつたのである。宗助は安井の郷里の福井へ向けて手紙を出して見た。けれども返事はついに来なかつた。宗助は横浜の方へ問い合わせて見ようと思つたが、つい番地も町名も聞いて置かなかつたので、どうする事もできなかつた。

立つ前の晩に、父は宗助を呼んで、宗助の請求通り、普通の旅費以外に、途中で二三日滞在した上、京都へ着いてからの当分の

小遣こづかいを渡して、

「なるたけ節せつけん儉せんしなくちやいけない」と諭さとした。

宗助はそれを、普通の子が普通の親の訓戒を聞く時のごとくに聞いた。父はまた、

「来年また帰つて来るまでは会わないから、随分気をつけて」と云つた。その帰つて来る時節には、宗助はもう帰れなくなつていだったのである。そうして帰つて来た時は、父の亡なきがら骸ががらがもう冷たくなつていたのである。宗助は今に至るまでその時の父の面影おもかげを思い浮べてはすまないような気がした。

いよいよ立つと云う間際に、宗助は安井から一通の封書を受取つた。開いて見ると、約束通りいつしょに帰るつもりでいたが、

少し事情があつて先へ立たなければならない事になつたからと云う断を述べた末に、いづれ京都で緩<sup>ゆ</sup>くり会おうと書いてあつた。

宗助はそれを洋服の内<sup>うちぶところ</sup>懷<sup>いだき</sup>に押し込んで汽車に乗つた。約束の興津<sup>おきつ</sup>へ来たとき彼は一人でプラットフォームへ降りて、細長い一筋町を清見<sup>せいみん</sup>寺の方へ歩いた。夏もすでに過ぎた九月の初なので、おおかたの避暑客は早く引き上げた後だから、宿屋は比較的閑静であつた。宗助は海の見える一室の中に腹<sup>はらばい</sup>這<sup>はう</sup>になつて、安井へ送る絵端書<sup>えはがき</sup>へ二三行の文句を書いた。そのなかに、君が来ないから僕一人でここへ來たという言葉を入れた。

翌日も約束通り一人で三保<sup>みほ</sup>と竜華<sup>りゆうげ</sup>寺を見物して、京都へ行つてから安井に話す材料ができるだけ揃えた。しかし天氣のせいか、

當にした連れのないためか、海を見ても、山へ登つても、それほど面白くなかった。宿にじつとしているのは、なお退屈であつた。宗助は匆匆<sup>そうそう</sup>にまた宿の浴衣<sup>ゆかた</sup>を脱ぎ棄てて、絞りの三尺と共に欄干<sup>らんかん</sup>に掛け、興津を去つた。

京都へ着いた一日目は、夜汽車の疲れやら、荷物の整理やらで、往来の日影を知らずに暮らした。二日目になつてようやく学校へ出て見ると、教師はまだ出揃つていなかつた。学生も平日よりは数が不足であつた。不審な事には、自分より三四つか<sup>さんよ</sup>日前に帰つているべきはずの安井の顔さえどこにも見えなかつた。宗助はそれが気にかかるので、帰りにわざわざ安井の下宿へ回つて見た。安井のいる所は樹と水の多い加茂<sup>かも</sup>の社<sup>やしろ</sup>の傍であつた。彼は夏休み前

から、少し閑静な町外れへ移つて勉強するつもりだと云つて、わざわざこの不便な村同様な田舎へ引込んだのである。彼の見つけ出した家からが寂た土壙を二方に回らして、すでに古風に片づいていた。宗助は安井から、そこの主人はもと加茂神社の神官の一人であつたと云う話を聞いた。非常に能弁な京都言葉を操る四十ばかりの細君がいて、安井の世話をしていた。

「世話つて、ただ不味い菜を拵らえて、三度ずつ室へ運んでくれるだけだよ」と安井は移り立てからこの細君の悪口を利いていた。宗助は安井をここに二三度訪ねた縁故で、彼のいわゆる不味い菜を拵らえる主を知っていた。細君の方でも宗助の顔を覚えていた。細君は宗助を見るや否や、例の柔かい舌で懃懃な挨拶を述べ

た後、こつちから聞こうと思つて來た安井の消息を、かえつて向うから尋ねた。細君の云うところによると、彼は郷里へ歸つてから當日に至るまで、一片の音信さえ下宿へは出さなかつたのである。宗助は案外な思で自分の下宿へ帰つて來た。

それから一週間ほどは、学校へ出るたんびに、今日は安井の顔が見えるか、明日は安井の声がするかと、毎日漠然とした予期を抱いては教室の戸を開けた。そうして毎日また漠然とした不足を感じては帰つて來た。もつとも最後の三四日における宗助は早く安井に会いたいと思うよりも、少し事情があるから、失敬して先へ立つとわざわざ通知しながら、いつまで待つても影も見せない彼の安否を、関係者としてむしろ気にかけていたのである。彼

は学友の誰彼に万遍なく安井の動静を聞いて見た。しかし誰も知るものはなかつた。ただ一人が、昨夕四条の人込の中で、安井によく似た浴衣がけの男を見たと答えた事があつた。しかし宗助にはそれが安井だろうとは信じられなかつた。ところがその話を聞いた翌日、すなわち宗助が京都へ着いてから約一週間の後、話の通りの服装なりをした安井が、突然宗助の所へ尋ねて來た。

宗助は着流しのまま麦藁帽むぎわらぼうを手に持つた友達の姿を久し振に眺めた時、夏休み前の彼の顔の上に、新らしい何物かがさらに付け加えられたような気がした。安井は黒い髪に油を塗つて、目立つほど奇麗きれいに頭を分けていた。そうして今床屋へ行つて來たところだと言訳らしい事を云つた。

その晩彼は宗助と一時間余りも雑談に耽ふけつた。彼の重々しい口の利き方、自分を憚はばかつて、思い切れないような話の調子、「しかし」と云う口癖、すべて平生の彼と異なる点はなかつた。ただ彼はなぜ宗助より先へ横浜を立つたかを語らなかつた。また途中どこで暇取ひまどつたため、宗助より後おくれて京都へ着いたかを判はつきり然告げなかつた。しかし彼は三四日前ようやく京都へ着いた事だけを明かにした。そうして、夏休み前にいた下宿へはまだ帰らずにいると云つた。

「それでどこに」と宗助が聞いたとき、彼は自分の今泊つている宿屋の名前を、宗助に教えた。それは三条辺へんの三流位いえの家であつた。宗助はその名前を知つていた。

「どうして、そんな所へ這入<sup>はい</sup>つたのだ。当分そこにいるつもりなのかい」と宗助は重ねて聞いた。安井はただ少し都合があつてとばかり答えたが、

「下宿生活はもうやめて、小さい家<sup>うち</sup>でも借りようかと思つてゐる」と思いがけない計画を打ち明けて、宗助を驚ろかした。

それから一週間ばかりの中に、安井はどうとう宗助に話した通り、学校近くの閑静な所に一戸を構えた。それは京都に共通な暗い陰気な作りの上に、柱や格子<sup>こうし</sup>を黒赤く塗つて、わざと古臭く見せた狭い貸家であつた。門<sup>かどぐち</sup>口<sup>さわ</sup>に誰の所有ともつかない柳が一本あつて、長い枝がほとんど軒に触りそうに風に吹かれる様を宗助は見た。庭も東京と違つて、少しほは整つていた。石の自由にな

る所だけに、比較的大きなのが座敷の真正面に据えてあつた。その下には涼しそうな苔こけがいくらでも生えた。裏には敷居の腐つた物置が空からのままがらんと立つていて、うしろ隣の竹藪たけやぶが便所の出入口に望まれた。

宗助のここを訪問したのは、十月に少し間のある学期の始めてあつた。残暑がまだ強いので宗助は学校の往復に、蝙蝠傘こうもりがさを用いていた事を今に記憶していた。彼は格子の前で傘を畳んで、内のぞを覗き込んだ時、粗い縞あらしまの浴衣ゆかたを着た女の影をちらりと認めた。格子の内は三和土たたきで、それが真直まっすぐに裏まで突き抜けているのだから、這入つてすぐ右手の玄関めいた上り口を上らない以上は、暗いながら一筋に奥の方まで見える訳であつた。宗助は浴衣の後うしろ

影かげが、裏口へ出る所で消えてなくなるまでそこに立っていた。

それから格子を開けた。玄関へは安井自身が現れた。

座敷へ通つてしばらく話していたが、さつきの女は全く顔を出さなかつた。声も立てず、音もさせなかつた。広い家でないから、つい隣の部屋ぐらいにいたのだろうけれども、いないのとまるで違わなかつた。この影のように静かな女が御米であつた。

安井は郷里の事、東京の事、学校の講義の事、何くれとなく話した。けれども、御米の事については一言も口にしなかつた。宗助も聞く勇氣に乏しかつた。その日はそれなり別れた。

次の日二人が顔を合したとき、宗助はやはり女の事を胸の中に記憶していたが、口へ出しては一言も語らなかつた。安井も何

氣ない風をしていた。懇意な若い青年が心易立こころやすだてに話し合う遠慮のない題目は、これまで二人の間に何度もなく交換されたにもかかわらず、安井はここへ来て、息詰つたごとくに見えた。宗助もそこを無理にこじ開けるほどの強い好奇心は有もたなかつた。したがつて女は二人の意識の間に挟まりながら、つい話頭に上らないで、また一週間ばかり過ぎた。

その日曜に彼はまた安井を訪とうた。それは二人の関係している或会について用事が起つたためで、女とは全く縁故のない動機から出た淡泊たんぱくな訪問であつた。けれども座敷へ上がり、同じ所へ坐らせられて、垣根に沿うた小さな梅の木を見ると、この前來た時の事が明らかに思い出された。その日も座敷の外は、しんと

して静しずかであつた。宗助はその静かなうちに忍んでいる若い女の影を想像しない訳に行かなかつた。同時にその若い女はこの前と同じように、けつして自分の前に出て来る気遣きづかいはあるまいと信じていた。

この予期の下もとに、宗助は突然御米に紹介されたのである。その時御米はこの間のように粗い浴衣あらゆかたを着てはいなかつた。これからよそへ行くか、または今外から帰つて來たと云う風な粧よそおいをして、次の間から出て來た。宗助にはそれが意外であつた。しかし大した綺羅きらを着飾つた訳でもないので、衣服の色も、帯の光も、それほど彼を驚かすまでには至らなかつた。その上御米は若い女にありがちの嬌羞きょうしゅうというものを、初対面の宗助に向つて、あまり

多く表わさなかつた。ただ普通の人間を静にして言葉寡なに切りつめただけに見えた。人の前へ出ても、隣の室<sup>へや</sup>に忍んでいる時と、あまり区別のないほど落ちついた女だという事を見出した宗助は、それから推して、御米のひつそりしていたのは、穴<sup>あな</sup>勝<sup>がち</sup>恥かしがつて、人の前へ出るのを避けるためばかりでもなかつたんだと思つた。

### 安井は御米を紹介する時、

「これは僕の妹だ」という言葉を用いた。宗助は四五分対坐して、少し談話を取り換わしているうちに、御米の口調<sup>くちよう</sup>のどこにも、國<sup>くに</sup>訛<sup>なまり</sup>らしい音<sup>おん</sup>の交つていない事に気がついた。

「今まで御国の方に」と聞いたら、御米が返事をする前に安井が、

「いや横浜に長く」と答えた。

その日は二人して町へ買物に出ようと云うので、御米は不斷着ふだんぎを脱ぎ更えて、暑いところをわざわざ新らしい白足袋しろたびまで穿いたものと知れた。宗助はせつかくの出掛けを喰い留めて、邪魔でもしたように氣の毒な思をした。

「なに宅うちを持ち立てだものだから、毎日毎日要いるものを見らしく発見するんで、一週に一二返は是非都まで買い出しに行かなればならない」と云いながら安井は笑つた。

「途までいつしょに出掛けよう」と宗助はすぐ立ち上がつた。ついでに家の様子を見てくれと安井の云うに任せた。宗助は次の間にある亜鉛トタンの落しのついた四角な火鉢ひばちや、黄な安っぽい色をした

眞鑑の薬罐や、古びた流しの傍に置かれた新らし過ぎる手桶を眺めて、門へ出た。安井は門口へ錠をおろして、鍵を裏の家へ預けるとか云つて、走けて行つた。宗助と御米は待つてゐる間、二言、三言、尋常な口を利いた。

宗助はこの三四分間に取り換わした互の言葉を、いまだに覚えていた。それはただの男がただの女に對して人間たる親みを表わすために、やりとりする簡略な言葉に過ぎなかつた。形容すれば水のように浅く淡いものであつた。彼は今日まで路傍道上において、何かの折に触れて、知らない人を相手に、これほどの挨拶をどのくらい繰り返して來たか分らなかつた。

宗助は極めて短かいその時の談話を、一々思い浮べるたびに、

その一々が、ほとんど無着色と云つていいほどに、平淡であつた事を認めた。そうして、かく透明な声が、二人の未来を、どうしてああ真赤まつかに、塗りつけたかを不思議に思つた。今では赤い色が日を経て昔の鮮かさあざやを失つていた。互を焚き焦やがしたこは、自然と変色して黒くなつていた。二人の生活はかようにして暗い中に沈んでいた。宗助は過去を振り向いて、事の成行なりゆきを逆に眺め返しては、この淡泊たんぱくな挨拶あいさつが、いかに自分らの歴史を濃く彩いろどつたかを、胸の中であくまで味わいつつ、平凡な出来事を重大に変化させる運命の力を恐ろしがつた。

宗助は二人で門の前に佇たたずんでいる時、彼らの影が折れ曲つて、半分ばかり土壙どべいに映つたのを記憶していた。御米の影が蝙蝠傘こうもりがさ

で遮<sup>さえ</sup>ぎられて、頭の代りに不規則な傘の形が壁に落ちたのを記憶していた。少し傾むきかけた初秋<sup>はつあき</sup>の日が、じりじり二人を照り付けたのを記憶していた。御米は傘を差したまま、それほど涼しくもない柳の下に寄つた。宗助は白い筋を縁<sup>ふち</sup>に取つた紫<sup>むらさき</sup>の傘の色と、まだ褪<sup>さ</sup>め切らない柳の葉の色を、一步遠<sup>とおの</sup>退いて眺め合わした事を記憶していた。

今考えるとすべてが明らかであつた。したがつて何らの奇もなかつた。二人は土塀の影から再び現われた安井を待ち合わして、町の方へ歩いた。歩く時、男同志は肩を並べた。御米は草履<sup>ぞうり</sup>を引いて後に落ちた。話も多くは男だけで受持つた。それも長くはなかつた。途中まで来て宗助は一人分れて、自分の家<sup>うち</sup>へ帰つたから

である。

けれども彼の頭にはその日の印象が長く残っていた。家へ帰つて、湯に入つて、灯火の前に坐つた後にも、折々色の着いた平たい画として、安井と御米の姿が眼先にちらついた。それのみか床に入つてからは、妹だと云つて紹介された御米が、果して本当の妹であろうかと考え始めた。安井に問いつめない限り、この疑の解決は容易でなかつたけれども、臆断はすぐついた。宗助はこの臆断を許すべき余地が、安井と御米の間に充分存在し得るだろうぐらいに考えて、寝ながらおかしく思った。しかもその臆断に、腹の中で 徘徊する事の馬鹿馬鹿しいのに気がついて、消し忘れた洋灯をようやくふつと吹き消した。

こう云う記憶の、しだいに沈んで痕迹もなくなるまで、御互の顔を見ずに過すほど、宗助と安井とは疎遠ではなかつた。二人は毎日学校で出合うばかりでなく、依然として夏休み前の通り往来を続けていた。けれども宗助が行くたびに、御米は必ず挨拶に出るとは限らなかつた。三返に一返ぐらい、顔を見せないで、始ての時のように、ひつそり隣りの室<sup>へや</sup>に忍んでいる事もあつた。

宗助は別にそれを気にも留めなかつた。それにもかかわらず、二人はようやく接近した。幾何ならずして冗談<sup>いくばくじょうだん</sup>を云うほどの親しみができた。

そのうちまた秋が来た。去年と同じ事情の下に、京都の秋を繰り返す興味に乏しかつた宗助は、安井と御米に誘われて葺狩<sup>たけがり</sup>に

行つた時、朗らかな空氣のうちにまた新らしい香においを見出した。紅も葉みじも三人で觀た。嵯峨さがから山を抜けて高雄たかおへ歩く途中で、御米は着物の裾すそを捲くつて、長襦袢ながじゅばんだけを足袋たびの上まで牽いて、細い傘かさ杖つえにした。山の上から一町も下に見える流れに日が射して、水の底が明らかに遠くから透かされた時、御米は

「京都は好い所ね」と云つて二人を顧かえりみた。それをいつしょに眺めた宗助にも、京都は全く好い所のように思われた。

こう揃そろつて外へ出た事も珍らしくはなかつた。家うちの中で顔を合わせる事はなおしばしばあつた。或時宗助が例のごとく安井を尋ねたら、安井は留守で、御米ばかり淋さみしい秋の中に取り残されたよう一人坐すわつていた。宗助は淋さむしいでしようと云つて、つい座

敷に上り込んで、一つ火鉢の両側に手を翳しながら、思つたより長話をして帰つた。或時宗助がぽかんとして、下宿の机に倚りかかつたまま、珍らしく時間の使い方に困つてゐると、ふと御米がやつて來た。そこまで買物に出たから、ついでに寄つたんだとか云つて、宗助の薦める通り、茶を飲んだり菓子を食べたり、緩くくつり寬ろいだ話をして帰つた。

こんな事が重なつて行くうちに、木の葉こはがいつの間にか落ちてしまつた。そうして高い山の頂いただきが、ある朝眞白に見えた。吹き曝ふさらしの河原かわらが白くなつて、橋を渡る人の影が細く動いた。その年の京都の冬は、音を立てずに肌を透す陰忍いんにんたちな質のものであつた。安井はこの悪性の寒氣かんきにあてられて、苛いインフルエンザに罹かかつ

た。熱が普通の風邪よりもよほど高かつたので、始は御米も驚ろいたが、それは一時の事で、すぐ退いたには退いたから、これでもう全快と思うと、いつまで立つても判然しなかつた。安井は躊躇のような熱に絡みつかれて、毎日その差し引きに苦しんだ。

医者は少し呼吸器を冒されているようだからと云つて、切に転地を勧めた。安井は心ならず押入の中の柳行李に麻繩を掛けた。御米は手提鞄に錠をおろした。宗助は二人を七条まで見送つて、汽車が出るまで室の中へ這入つて、わざと陽気な話をした。プラットフォームへ下りた時、窓の内から、「遊びに来たまえ」と安井が云つた。「どうぞ是非」と御米が言つた。

汽車は血色の好い宗助の前をそろそろ過ぎて、たちまち神戸の方に向つて煙を吐いた。

病人は転地先で年を越した。絵端書(えはがき)は着いた日から毎日のように寄こした。それにいつでも遊びに来いと繰り返して書いてない事はなかつた。御米の文字も一二行ずつは必ず交(まじ)つていた。宗助は安井と御米から届いた絵端書を別にして机の上に重ねて置いた。外から帰るとそれが直眼(すぐ)に着いた。時々はそれを一枚ずつ順に読み直したり、見直したりした。しまいにもうすつかり癒(なお)つたから帰る。しかしせつかくここまで来ながら、ここで君の顔を見ないのは遺憾(いかん)だから、この手紙が着きしだい、ちよつとでいいから来いという端書が来た。無事と退屈(い)を忌む宗助を動かすには、この

じゅうすうげん  
十数言

で充分であつた。宗助は汽車を利用してその夜のうちに安井の宿に着いた。

明るい灯火の下に三人が待設けた顔を合わした時、宗助は何よりもまず病人の色沢の回復して来た事に気がついた。立つ前よりもかえつて好いくらいに見えた。安井自身もそんな心持がすると云つて、わざわざ襯衣の袖を捲り上げて、青筋の入つた腕を独で撫でていた。御米も嬉しそうに眼を輝かした。宗助にはその活潑な目遣がことに珍らしく受取れた。今まで宗助の心に映じた御米は、色と音の撩乱する裏に立つてさえ、極めて落ちついていた。そうしてその落ちつきの大部分はやたらに動かさない眼の働きから來たとしか思われなかつた。

次の日三人は表へ出て遠く濃い色を流す海を眺めた。松の幹から脂の出る空氣を吸つた。冬の日は短い空を赤裸々に横切つておとなしく西へ落ちた。落ちる時、低い雲を黄に赤に竈の火の色に染めて行つた。風は夜に入つても起らなかつた。ただ時々松を鳴らして過ぎた。暖かい好い日が宗助の泊つている三日の間続いた。

宗助はもつと遊んで行きたいと云つた。御米はもつと遊んで行きましたよと云つた。安井は宗助が遊びに來たから好い天氣になつたんだろうと云つた。三人はまた行李こうりと鞆かほんを携えて京都へ歸つた。冬は何事もなく北風を寒い国へ吹きやつた。山の上を明らかにした斑な雪まだらがしだいに落ちて、後から青い色が一度に芽を吹いた。

宗助は当時を憶い出すたびに、自然の進行がそこではたりと留まつて、自分も御米もたちまち化石してしまつたら、かえつて苦はなかつたろうと思つた。事は冬の下から春が頭を擡げる時分に始まつて、散り尽した桜の花が若葉に色を易える頃に終つた。すべてが生死の戦しようせんであつた。青竹を炙あぶつて油を絞しぼるほどの苦しみであつた。大風は突然不用意の二人を吹き倒したのである。二人が起き上がつた時はどこもかしこもすでに砂だらけであつたのである。彼らは砂だらけになつた自分達を認めた。けれどもいつ吹き倒されたかを知らなかつた。

世間は容赦なく彼らに徳義上の罪を背負しょわした。しかし彼ら自身は徳義上の良心に責められる前に、いつたん茫然ぼうぜんとして、彼らの

頭たしかが確たしかであるかを疑つた。彼らは彼らの眼に、不徳義な男女なんによとして恥ずべく映る前に、すでに不合理な男女として、不可思議に映つたのである。そこに言訳らしい言訳が何にもなかつた。だからそこに云うに忍びない苦痛があつた。彼らは残酷な運命が氣きまぐれに罪もない二人の不意を打つて、面白半分おとしあな死死の中に突き落したのを無念に思つた。

曝露ばくろの日ひがまともに彼らの眉間みけんを射たとき、彼らはすでに徳義的に痙攣けいれんの苦痛くどうを乗り切つていた。彼らは蒼白あおしろい額ほの額を素直に前に出して、そこに似た烙印やきいんを受けた。そうして無形の鎖で繫つながれたまま、手たづさを携えてどこまでも、いつしよに歩調を共にしなければならない事を見出した。彼らは親すを棄てた。親類すを棄て

た。友達を棄てた。大きく云えば一般の社会を棄てた。もしくはそれから棄てられた。学校からは無論棄てられた。ただ表向だけはこちらから退学した事になつて、形式の上に人間らしい迹あとを留めた。

これが宗助と御米の過去であつた。

## 十五

この過去を負わされた二人は、広島へ行つても苦しんだ。福岡へ行つても苦しんだ。東京へ出て来ても、依然として重い荷に抑おさえつけられていた。佐伯さえきの家とは親しい関係が結べなくなつた。

叔父は死んだ。叔母と安之助はまだ生きているが、生きている間に打ち解けた交際<sup>つきあい</sup>はできないほど、もう冷淡の日を重ねてしまつた。今年はまだ歳暮にも行かなかつた。<sup>むこう</sup>向からも来なかつた。家に引取つた小六<sup>ころく</sup>さえ腹の底では兄に敬意を払つていなかつた。二人が東京へ出たてには、単純な小供の頭から、正直に御米<sup>およね</sup>を悪んでいた。御米にも宗助<sup>そうすけ</sup>にもそれがよく分つていた。夫婦は日の前に笑み、月の前に考えて、静かな年を送り迎えた。今年ももう尽きる間際<sup>まぎわ</sup>まで來た。

通町<sup>とおりちょう</sup>では暮の内から門並揃<sup>かどなみそろい</sup>の注連飾<sup>しめかざり</sup>をした。往来の左右に何十本となく並んだ、軒より高い筐<sup>さき</sup>が、ことごとく寒い風に吹かれて、さらさらと鳴つた。宗助も二尺余りの細い松を買つ

て、門の柱に釘付くぎづけにした。それから大きな赤い橙だいだいを御供おそなえの上に載のせて、床の間に据すえた。床にはいかがわしい墨画すみえの梅はが、蛤ほの格好かつこうをした月はを吐いてかかっていた。宗助にはこの変な軸の前に、橙と御供を置く意味が解らなかつた。

「いつたいこりや、どう云う了見りょうけんだね」と自分で飾りつけた物を眺めながら、御米に聞いた。御米にも毎年こうする意味はほとんど解らなかつた。

「知らないわ。ただそうしておけばいいのよ」と云つて台所へ去つた。宗助は、

「こうしておいて、つまり食うためか」と首を傾けて御供の位置を直した。

伸餅のしもちは夜業よなべに俎まないたを茶の間まで持ち出して、みんなで切った。

庖丁ほうちょうが足りないので、宗助は始からしまいまで手を出さなかつた。力のあるだけに小六が一番多く切つた。その代り不同も一番多かつた。中には見かけの悪い形のものも交つた。変なのができるたびに清きよが声を出して笑つた。小六は庖丁の背に濡布巾ぬれふきんをあてがつて、硬い耳の所を断ち切りながら、

「格好はどうでも、食いさいすればいいんだ」と、うんと力を入れて耳まで赤くした。

そのほかに迎年げいねんの支度としては、小殿原ごまはらを熬いつて、煮染にしめを詰にするくらいなものであつた。大晦日おおみそかの夜に入つて、宗助は挨拶あいさつかたがた屋賃を持つて、坂井の家に行つた。わざと遠慮し

て勝手口へ回ると、摺硝子すりガラスへ明るい灯ひが映つて、中はざわざわしていた。上り框あががまちに帳面しるしばんてんを持つて腰をかけた掛取らしい小僧かうそうが、立つて宗助に挨拶あいさつをした。茶の間には主人も細君もいた。その片隅かたすみに印しるし畔ばんてん天でいりを着た出入でいりでゆきのものらしいのが、下しもを向いて、小ちかい輪わかざり飾はりをいくつも拵こしらへえていた。傍そばに譲葉ゆずりはと裏白うらじろと半紙はんしと鋏はさみが置いてあつた。若い下女しもめが細君の前に坐つて、釣錢つり銭らしい札さつと銀貨ぎんがいを畳に並べていた。主人は宗助を見て、

「いやどうも」と云つた。「押しつまつてさぞ御忙おいそがしいでしょう。この通りごたごたです。さあどうぞこちらへ。何ですか、御互に正月にはもう飽あきましたな。いくら面白いものでも四十辺べん以上繰り返すと厭いやになりますね」

主人は年の送迎に煩わしいような事を云つたが、その態度にはどこと指してくさくさしたところは認められなかつた。言葉遣は活潑であつた。顔はつやつやしていた。晩食に傾けた酒の勢が、まだ頬の上に差しているごとく思われた。宗助は貰い煙草をして二三十分ばかり話して帰つた。

家では御米が清を連れて湯に行くとか云つて、石鹼入を手拭に包んで、留守居を頼む夫の帰を待ち受けていた。

「どうなすつたの、随分長かつたわね」と云つて時計を眺めた。

時計はもう十時近くであつた。その上清は湯の戻りに髪結の所へ回つて頭を掠えるはずだそうであつた。閑静な宗助の活計も、大晦日にはそれ相応の事件が寄せて來た。

「払はもう皆済んだのかい」と宗助は立ちながら御米に聞いた。

御米はまだ薪屋まきやが一軒残つていると答えた。

「来たら払つてちようだい」と云つて懷ふところの中から汚れた男持の紙入と、銀貨入の蓋がまぐち口を出して、宗助に渡した。

「小六はどうした」と夫はそれを受取ながら云つた。

「先刻大晦日さつきの夜の景色けしきを見て来るつて出て行つたのよ。随分御苦労さまね。この寒いのに」と云う御米の後に追あとついて、清は大きな声を出して笑つた。やがて、

「御若いから」と評しながら、勝手口へ行つて、御米の下駄げたを揃そろえた。

「どこの夜景を見る気なんだ」

「銀座から日本橋通のだつて」

御米はその時もう框から下りかけていた。すぐ腰障子を開ける音がした。宗助はその音を聞き送つて、たつた一人火鉢の前に坐つて、灰になる炭の色を眺めていた。彼の頭には明日の日の丸が映つた。外を乗り回す人の絹帽子の光が見えた。洋剣の音だの、馬の嘶だの、遣羽子の声が聞えた。彼は今から数時間の後また年中行事のうちで、もつとも人の心を新にすべく仕組まれた景物に出逢わなければならなかつた。

陽気そうに見えるもの、賑かそうに見えるものが、幾組となく彼の心の前を通り過ぎたが、その中で彼の臂を把つて、いつしょに引張つて行こうとするものは一つもなかつた。彼はただ饗

宴んに招かれない局外者として、酔う事を禁じられたごとくに、また酔う事を免かれた人であつた。彼は自分と御米の生命を、毎年平凡な波瀾はらん<sup>まぬ</sup>のうちに送る以上に、面前まのあたり大した希望も持つていなかつた。こうして忙がしい大晦日に、一家を守る静かさが、ちようど彼の平生の現実を代表していた。

御米は十時過に帰つて來た。いつもより光沢の好い頬を灯に照らして、湯の温ぬくもりのまだ抜けない襟えりを少し開けるように襦袢じゆばんを重ねていた。長い襟首がよく見えた。

「どうも込んで込んで、洗う事も桶おけを取る事もできないくらいなの」と始めて緩く息を吐いた。

清の帰つたのは十一時過であつた。これも綺麗きれいな頭を障子から

出して、ただ今、どうも遅くなりましたと挨拶あいさつをしたついでに、あれから二人とか三人とか待ち合したと云う話をした。

ただ小六だけは容易に帰らなかつた。十二時を打つたとき、宗助はもう寝ようと云い出した。御米は今日に限つて、先へ寝るのも変なものだと思つて、できるだけ話を繋つないでいた。小六は幸にして間もなく帰つた。日本橋から銀座へ出てそれから、水天宮の方へ廻つたところが、電車が込んで何台も待ち合わしたために遅くなつたという言訳をした。

白牡丹はくぼたんへ這入はいつて、景物の金時計でも取ろうと思つたが、何も買うものがなかつたので、仕方なしに鈴の着いた御手玉おてだまを一箱買って、そうして幾百となく器械で吹き上げられる風船を一つ攫つか

んだら、金時計は当らないで、こんなものがあたつたと云つて、袂から俱楽部洗粉たもとくらぶあらいこを一袋出した。それを御米の前に置いて、「姉さんに上げましよう」と云つた。それから鈴を着けた、梅の花の形に縫つた御手玉を宗助の前に置いて、

「坂井の御嬢さんにでも御上げなさい」と云つた。

事に乏しい一小家族の大晦日おおみそかは、それで終りを告げた。

## 十六

正月は二日目の雪ひきいを率しめて注連飾かざりの都を白くした。降りやんだ屋根の色がもとに復かえる前、夫婦は亞鉛張トタンぱりの庇ひさしすべを滑り落ちる雪の

音に幾遍か驚ろかされた。夜半にはどさと云う響がことにはなはだしかつた。小路の泥濘ぬかるみは雨上りと違つて一日や二日では容易に乾かなかつた。外から靴を汚して帰つて来る宗助そうすけが、御米およねの顔を見るたびに、

「こりやいけない」と云いながら玄関へ上つた。その様子があたかも御米を路を悪くした責任者と見做していゝ風に受取られるので、御米はしまいに、

「どうも済みません。本当に御氣の毒さま」と云つて笑い出した。宗助は別に返すべき冗談じょうだんも有もたなかつた。

「御米ここから出かけるには、どこへ行くにも足駄あしだを穿かなくつちやならないよう видるには、どこへ行くにも足駄あしだを穿かなくつ

どの通もどの通もからからで、かえつて埃ほこりが立つくらいだから、足駄なんぞ穿はいちやきまりが悪くつて歩けやしない。つまりこう云う所に住んでいる我々は一世紀がたおく後れる事になるんだね」

こんな事を口にする宗助は、別に不足らしい顔くびもしていなかつた。御米も夫の鼻の穴を潜くぐる煙草たばこの煙けむを眺めるくらいな氣で、それを聞いていた。

「坂井さんへ行つて、そう云つていらっしやいな」と軽い返事をした。

「そうして屋賃でも負けて貰う事にしよう」と答えたまま、宗助はついに坂井へは行かなかつた。

その坂井には元日の朝早く名刺を投げ込んだだけで、わざと主

人の顔を見ずに門を出たが、義理のある所を一日のうちにほぼ片づけて夕方帰つて見ると、留守の間に坂井がちゃんと来ていたので恐縮した。二日は雪が降つただけで何事もなく過ぎた。三日目の日暮ひくれに下女しもめが使つかに来て、御閑おひまならば、旦の那様と奥さまと、それから若旦わかの那様に是非今晚御遊びにいらつしやるようにと云つて帰つた。

「何をするんだろう」と宗助は疑ぐつた。

「きっと歌加留多うたがるたでしよう。小供が多いから」と御米が云つた。  
「あなた行つていらつしやい」

「せつかくだから御前行くが好い。おれは歌留多は久しく取らないから駄目だ」

「私も久しく取らないから駄目ですわ」

二人は容易に行こうとはしなかった。しまいに、では若旦那がみんなを代表して行くが宜かろうという事になつた。

「若旦那行つて來い」と宗助が小六ころくに云つた。小六は苦笑にがわらいして立つた。夫婦は若旦那と云う名を小六に冠かむらせる事を大変な滑稽つけいのよう<sup>もと</sup>に感<sup>もと</sup>じた。若旦那と呼ばれて、苦笑いする小六の顔を見ると、等しく声を出して笑い出した。小六は春らしい空氣うちの中から出た。そうして一町ほどの寒さを横切つて、また春らしい電灯の下に坐つた。

その晩小六は大晦おおみそか日に買った梅の花の御手玉おてだまを袂たもとに入れて、

これは兄から差上げますとわざわざ断つて、坂井の御嬢さんに贈

物にした。その代り帰りには、福引に当つた小さな裸人形を同じ袂へ入れて來た。その人形の額が少し欠けて、そこだけ墨で塗つてあつた。小六は真面目な顔をして、これが袖萩そではぎだそうですと云つて、それを兄夫婦の前に置いた。なぜ袖萩だか夫婦には分らなかつた。小六には無論分らなかつたのを、坂井の奥さんが叮ていねふに説明してくれたそうであるが、それでも腑に落ちなかつたので、主人がわざわざ半切はんきれに洒落しゃれと本文ほんもんを並べて書いて、歸つたらこれを兄さんと姉さんに御見せなさいと云つて渡したとかいう話であつた。小六は袂を探つてその書付を取り出して見せた。それに「此垣このかき一重ひとつえが黒鉄くろがねの」と認めた後に括弧かっこをして、（此餓このが鬼額きたえが黒欠くろがけの）とつけ加えてあつたので、宗助と御米はまた春

らしい笑を洩<sup>も</sup>らした。

「随分念の入つた趣<sup>しゅこう</sup>向<sup>むか</sup>だね。いつたい誰<sup>かんがえ</sup>の考<sup>かんがえ</sup>だい」と兄が聞いた。

「誰ですかな」と小六はやつぱりつまらなそうな顔をして、人形をそこへ放り出したまま、自分の室<sup>へや</sup>に帰つた。

それから二三日して、たしか七日<sup>なぬか</sup>の夕方に、また例の坂井の下女が来て、もし御閑<sup>おひま</sup>ならどうぞ御話にと、叮<sup>ていねい</sup>嚙<sup>ぱんめし</sup>に主人の命を伝えた。宗助と御米は洋灯<sup>ランプ</sup>をつけてちょうど晩食<sup>ばんめし</sup>を始めたところであつた。宗助はその時茶碗を持ちながら、

「春もようやく一段落が着いた」と語つていた。そこへ清が坂井からの口上を取り次いだので、御米は夫の顔を見て微笑した。宗

助は茶碗を置いて、

「まだ何か催おしがあるのかい」と少し迷惑そうな眉まゆをした。坂井の下女に聞いて見ると、別に来客もなければ、何の支度もないという事であつた。その上細君は子供を連れて親類へ呼ばれて行つて留守だという話までした。

「それじや行こう」と云つて宗助は出掛けた。宗助は一般の社交を嫌きらつていた。やむを得なければ会合の席などへ顔を出す男でなかつた。個人としての朋友ともだちも多くは求めなかつた。訪問はする暇もを有たなかつた。ただ坂井だけは取除とりのけであつた。折々は用もないのにこつちからわざわざ出掛けて行つて、時を潰つぶして来る事さえあつた。その癖坂井は世の中でもつとも社交の人であつた。

この社交的な坂井と、孤独な宗助が二人寄つて話ができるのは、御米にさえ妙に見える現象であつた。坂井は、

「あつちへ行きましょう」と云つて、茶の間を通り越して、廊下伝いに小さな書斎へ入つた。そこには棕梠しゅうろの筆で書いたような、大きな硬こわい字が五字ばかり床の間にかかつていた。棚の上に見事な白い牡丹ぼたんが活けてあつた。そのほか机でも蒲団ふとんでもことごとく綺麗きれいであつた。坂井は始め暗い入口に立つて、

「さあどうぞ」と云いながら、どこかぴちりと捩ひねつて、電氣灯をつけた。それから、

「ちよつと待ちたまえ」と云つて、燐寸マツチで瓦斯ガスだんろを焚たいた。瓦斯暖炉は室へやに比例したごく小さいものであつた。坂井はしかる後

蒲団を薦めた。

「これが僕の洞窟で、面倒になるとここへ避難するんです」  
宗助も厚い綿の上で、一種の静かさを感じた。瓦斯の燃える音  
が微かにしてしだいに背中からほかほか暖まつて来た。

「ここにいると、もうどことも交渉はない。全く気楽です。悠  
りしていらつしやい。実際正月と云うものは予想外に煩瑣いもの  
ですね。私も昨日までほとんどへとへとに降参させられました。  
新年が停滞しているのは実に苦しいですよ。それで今日の午から、  
とうとう塵世を遠ざけて、病気になつてぐつと寝込んじまいま  
した。今しがた眼を覚まして、湯に入つて、それから飯を食つて、  
煙草を呑んで、気がついて見ると、家内が子供を連れて親類へ行

つて留守なんでしょう。なるほど静かなはずだと思いましてね。

すると今度は急に退屈になつたのです。人間も随分わがままなものですよ。しかしいくら退屈だつて、この上おめでたいものを、見たり聞いたりしちや骨が折れますし、また御正月らしいものを呑んだり食つたりするのも恐れますから、それで、御正月らしくない、と云うと失礼だが、まあ世の中とあまり縁のないあなた、と云つてもまだ失敬かも知れないが、つまり一口に云うと、超ぜんぱいちにん然派の一人と話しがして見たくなつたんで、それでわざわざ使を上げたような訳なんです」と坂井は例の調子で、ことごとくすらすらしたものであつた。宗助はこの楽天家の前では、よく自分が過去を忘れる事があつた。そうして時によると、自分がもし

順当に発展して来たら、こんな人物になりはしなかつたろうかと  
考えた。

そこへ下女が三尺の狭い入口を開けて這入はいつて來たが、改ため  
て宗助に鄭重ていちょうな御辞儀をした上、木皿のような菓子皿のよう  
なものを、一つ前に置いた。それから同じ物をもう一つ主人の前  
に置いて、一口もものを云わずに退がつた。木皿の上には護謨ゴム毬まり  
ほどな大きな田舎饅頭いなかまんじゅうが一つ載せてあつた。それに普通の倍  
以上もあろうと思われる楊枝ようじが添えてあつた。

「どうです暖かい内に」と主人が云つたので、宗助は始めてこの  
饅頭の蒸むして間もない新らしさに気がついた。珍らしそうに黄色  
い皮を眺めた。なが

「いやできただてじやありません」と主人がまた云つた。「実は昨夜ある所へ行つて、冗談半分に賞めたら、御土産に持つていらっしやいと云うから貰つて来たんです。その時は全く暖たかだつたんですがね。これは今上げようと思つて蒸し返さしたのです」主人は箸とも楊枝とも片のつかないもので、無難作に饅頭を割つて、むしやむしや食ひ始めた。宗助も饅頭に倣つた。

その間に主人は昨夕行つた料理屋で逢つたとか云つて妙な芸者の話をした。この芸者はポツケツト論語が好きで、汽車へ乗つたり遊びに行つたりするときは、いつでもそれを懐にして出るそうであつた。

「それでね孔子の門人のうちで、子路が一番好だつて云うんです

がね。そのいわれを聞くと、子路と云う男は、一つ何か教わつて、それをまだ行わないうちに、また新らしい事を聞くと苦にするほど正直だからだつて云うんです。実のところ私も子路はあまりよく知らないから困つたが、何しろ一人好い人ができるて、それと夫婦にならない前に、また新らしく好い人ができると苦になるようなものじやないかつて、聞いて見たんです……」

主人はこんな事をはなはだ気楽そうに述べ立てた。その話の様子からして考えると、彼はのべつにこういう場所に出入して、その刺戟しげきにはとうに麻痺まひしながら、因習の結果、依然として月に何度もとなく同じ事を繰り返しているらしかつた。よく聞き糺ただして見ると、しかし平氣な男も、時々は歓樂の飽満ほうまんに疲労して、書斎

のなかで精神を休める必要が起るのだそうであつた。

宗助はそういう方面にまるで経験のない男ではなかつたので、強いて興味を装<sup>よそお</sup>う必要もなく、ただ尋常な挨拶<sup>あいさつ</sup>をするところが、かえつて主人の気に入るらしかつた。彼は平凡な宗助の言葉のなかから、一種異彩のある過去を覗く<sup>のぞ</sup>くような素振<sup>そぶり</sup>を見せた。しかしそちらへは宗助が進みたがらない痕迹<sup>こんせき</sup>が少しでも出ると、すぐ話を転じた。それは政略よりもむしろ礼讓からであつた。したがつて宗助には毫も不愉快<sup>ごう</sup>を与えたかった。

そのうち小六の噂<sup>うわさ</sup>が出た。主人はこの青年について、肉身の兄が見逃すような新らしい觀察<sup>も</sup>を、二三有つていた。宗助は主人の評語を、当ると当らないとに論なく、面白く聞いた。そのなかに、

彼は年に合わしては複雑な実用に適しない頭を有つていながら、年よりも若い単純な性情を平気で露わす子供じやないかという質問があつた。宗助はすぐそれを首肯うけがつた。あらしかし学校教育だけで社会教育のないものは、いくら年を取つてもその傾かたむきがあるだろうと答えた。

「さよう、それと反対で、社会教育だけあつて学校教育のないものは、随分複雑な性情を發揮する代りに、頭はいつまでも小供ですからね。かえつて始末が悪いかも知れない」

主人はここでちよつと笑つたが、やがて、

「どうです、わたし私の所へ書生に寄こしちや、少しは社会教育になるかも知れない」と云つた。主人の書生は彼の犬が病氣で病院へ這は

入る一ヶ月前とかに、徴兵検査に合格して入営したぎり今では一人もいないのだそうであつた。

宗助は小六の所置をつける好機会が、求めざるに先だつて、春と共に自から回つて来たのを喜こんだ。同時に、今まで世間に向つて、積極的に好意と親切を要求する勇気を有もたなかつた彼は、突然この主人の申し出もういでのに逢つて少しまごつくくらい驚いた。けれどもできるならなりたけ早く弟を坂井に預けて置いて、この変動から出る自分の余裕よゆうに、幾分か安之助の補助を足して、そうして本人の希望通り、高等の教育を受けさせてやろうという分別をした。そこで打ち明けた話を腹蔵なく主人にすると、主人はなるほどなるほどと聞いているだけであつたが、しまいに雑作ぞうさなく、

「そいつは好いでしょう」と云つたので、相談はほぼその座で纏まつた。

宗助はそこで辞して帰ればよかつたのである。また辞して帰ろうとしたのである。ところが主人からまあ緩くりなさいと云つて留められた。主人は夜は長い、まだ宵だと云つて時計まで出して見せた。実際彼は退屈らしかつた。宗助も帰ればただ寝るよりほかに用のない身体なので、ついまた尻を据えて、濃い煙草を新らしく吹かし始めた。しまいには主人の例に倣つて、柔らかい座蒲団の上で膝さえ崩した。

主人は小六の事に關聯して、

「いや弟などを持つていると、随分厄介なものですよ。私も一  
おとと  
やつかい  
わたくし  
まと

人やくざなのを世話をした覚えがありますがね」と云つて、自分の弟が大学にいるとき金のかかつた事などを、自分が学生時代の質朴さに比べていろいろ話した。宗助はこの派出<sup>はでずき</sup>好きな弟が、その後どんな径路を取つて、どう発展したかを、気味の悪い運命の意思を窺<sup>うかが</sup>う一端として、主人に聞いて見た。主人は卒然

「冒險者<sup>アドヴェンチャラー</sup>」と、頭も尾もない一句を投げるよう吐いた。

この弟は卒業後主人の紹介で、ある銀行に這入<sup>はい</sup>つたが、何でも金を儲けなくつちやいけないと口癖のように云つていたそうで、日露戦争後間もなく、主人の留めるのも聞かずに、大いに発展して見たいとかとなえてついに満洲へ渡つたのだと云う。そこで何を始めるかと思うと、遼河<sup>りょうが</sup>を利用して、豆粕<sup>まめかすだい</sup>大豆<sup>だいだい</sup>を船で下す、

大仕掛けな運送業を經營して、たちまち失敗してしまつたのだそうである。元より当人は、資本主ではなかつたのだけれども、いよいよという暁に、勘定して見ると大きな欠損と事がきまつたので、無論事業は継続する訳に行かず、当人は必然の結果、地位を失つたぎりになつた。

「それから後私もどうしたかよく知らなかつたんですが、その後ようやく聞いて見ると、驚ろきましたね。蒙古へ這入つて漂浪しているんです。どこまで山氣があるんだか分らないんで、私も少々剣呑になつてるんですよ。それでも離れているうちは、まあどうかしているだらうぐらいに思つて放つておきます。時たま音便があつたつて、蒙古という所は、水に乏しい所で、暑い時には

往来へ泥溝どぶの水を撒まくとかね、またはその泥溝の水が無くなると、今度は馬の小便を撒くとか、したがつてはなはだ臭いとか、まさか離れてさえいれば、まあいいんですが、そいつが去年の暮突然出て来ましてね」

主人は思いついたように、床の柱にかけた、綺麗きれいな房のついた一種の装飾物を取りおろした。

それは錦の袋に這入はいつた一尺ばかりの刀であつた。鞘さやは何とも知れぬ緑色の雲母きららのようなものでできていて、その所々が三才所ほど巻いてあつた。中身は六寸ぐらいしかなかつた。したがつて

刀も薄かつた。けれども鞘の格好はあたかも六角の檍の棒のよう  
に厚かつた。よく見ると、柄の後に細い棒が二本並んで差さつ  
ていた。結果は鞘を重ねて離れないために銀の鉢巻をしたと同じ  
であつた。主人は

「土産にこんなものを持つて来ました。蒙古刀だそうです」と  
云いながら、すぐ抜いて見せた。後に差してあつた象牙のような  
棒も二本抜いて見せた。

「こりや箸ですよ。蒙古人は始終これを腰へぶら下げていて、  
いざ御馳走という段になると、この刀を抜いて肉を切つて、そう  
してこの箸で傍から食うんだそうです」

主人はことさらに刀と箸を両手に持つて、切つたり食つたりす

る真似をして見せた。宗助はひたすらにその精巧な作りを眺めた。

「まだ蒙古人の天幕テンシトに使うフェルトも貰いましたが、まあ昔の毛モ  
氈ウゼンと変ったところもありませんね」

主人は蒙古人の上手に馬を扱う事や、蒙古犬の瘠せて細長くて、  
西洋のグレー・ハウンドに似ている事や、彼らが支那人のために  
だんだん押し狭めせばられて行く事や、——すべて近頃あつちから帰  
つたという弟に聞いたままを宗助に話した。宗助はまた自分のい  
まだかつて耳にした事のない話だけに、一々少なからぬ興味を有モ  
つてそれを聞いて行つた。そのうちに、元来この弟は蒙古で何を  
しているのだろうという好奇心が出た。そこでちょっと主人に尋  
ねて見ると、主人は、

「冒險者」<sup>アドヴェンチャラー</sup>と再び先刻の言葉を力強く繰り返した。「何をしているか分らない。私には、牧畜をやっています。しかも成功していますと云うんですがね、いつこう當にはなりません。今までよく法螺<sup>ぼら</sup>を吹いて私を欺したもんです。それに今度東京へ出て来た用事と云うのがよっぽど妙です。何とか云う蒙古王のために、金を二万円ばかり借りたい。もし借してやらないと自分の信用に関わるつて奔走しているんですからね。そのとっぱじめに捕まつたのは私だが、いくら蒙古王だつて、いくら広い土地を抵当にするつたつて、蒙古と東京じや催促さえできやしませんもの。で、私が断ると、蔭<sup>かげ</sup>へ廻つて妻に、兄さんはあれだから大きな仕事ができっこないつて、威張つてゐるんです。しようがない」

主人はここで少し笑つたが、妙に緊張した宗助の顔を見て、

「どうです一遍逢つて御覧になつちや、わざわざ毛皮の着いただ  
ぶだぶしたものなんか着て、ちょっと面白いですよ。何なら御紹  
介しましょう。ちょうど明日の晩呼んで飯を食わせる事になつ  
ているから。——なに引っ掛けやいけませんがね。黙つて向に  
喋舌らして、聞いている分には、少しも危険はありません。ただ  
面白いだけです」としきりに勧め出した。宗助は多少心を動かし  
た。

「おいでになるのは御令弟だけですか」

「いやほかに一人弟の友達で向からいっしょに來たものが、来る  
はずになつています。安井とか云つて私はまだ逢つた事もない男

ですが、弟がしきりに私に紹介したがるから、実はそれで二人を呼ぶ事にしたんです」

宗助はその夜蒼い顔をして坂井の門を出た。

## 十七

宗助と御米の一生を暗く彩りどつた関係は、二人の影を薄くして、幽霊のような思をどこかに抱かしめた。彼らは自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでいるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合つて年を過した。

当初彼らの頭脳に痛く応えたのは、彼らの過こたが安井の前途に及ぼした影響であった。二人の頭の中で沸わき返つた凄すごい泡あわのようなものがようやく静まつた時、二人は安井もまた半途で学校を退しりぞいたという消息を耳にした。彼らは固もとより安井の前途を傷けた原因をなしたに違なかつた。次に安井が郷里に帰つたという噂うわさを聞いた。次に病氣に罹かかつて家に寝ているという報知しらせを得た。二人はそれを聞くたびに重い胸を痛めた。最後に安井が満洲に行つたと云う音信たよりが来た。宗助は腹の中で、病氣はもう癒なおつたのだろうかと思つた。または満洲行の方が嘘うそではなかろうかと考えた。安井は身体からだから云つても、性質から云つても、満洲や台灣に向く男ではなかつたからである。宗助はできるだけ手を回して、事の真疑まぎを

探つた。そうして、或る関係から、安井がたしかに奉天にいる事を確め得た。同時に彼の健康で、活潑<sup>かっぱつ</sup>で、多忙である事も確か得た。その時夫婦は顔を見合せて、ほつという息を吐いた。

「まあよかろう」と宗助が云つた。

「病気よりはね」と御米が云つた。

二人はそれから以後安井の名を口にするのを避けた。考え出す事さえもあえてしなかつた。彼らは安井を半途で退学させ、郷里へ帰らせ、病気に罹らせ、もしくは満洲へ駆りやつた罪に対して、いかに悔恨の苦しみを重ねても、どうする事もできない地位に立つていたからである。

「御米、御前信仰の心が起つた事があるかい」と或時宗助が御米

に聞いた。御米は、ただ、

「あるわ」と答えただけで、すぐ「あなたは」と聞き返した。

宗助は薄笑いをしたぎり、何とも答えなかつた。その代り推して、御米の信仰について、詳しい質問も掛けなかつた。御米には、それが仕合せかも知れなかつた。彼女はその方面に、これというほど判然した凝り整つた何物も有つていなかつたからである。二人はとかくして会堂の腰掛にも倚らず、寺院の門も潜らずに過ぎた。そうしてただ自然の恵から来る月日と云う緩和剤の力だけで、ようやく落ちついた。時々遠くから不意に現れる訴も、苦しみとか恐れとかいう残酷の名を付けるには、あまり微かに、あまり薄く、あまりに肉体と慾得を離れ過ぎるようになつた。必

竟<sup>よう</sup>するに、彼らの信仰は、神を得なかつたため、仏に逢わなかつたため、互<sup>えが</sup>を目標として働<sup>めじるし</sup>らいた。互に抱<sup>だ</sup>き合つて、丸い円を描<sup>えが</sup>き始めた。彼らの生活は淋<sup>さみ</sup>しいなりに落ちついて來た。その淋しい落ちつきのうちに、一種の甘い悲哀を味わつた。文芸にも哲学にも縁のない彼らは、この味を舐<sup>な</sup>め尽しながら、自分で自分の状態を得意がつて自覺するほどの知識を有<sup>も</sup>たなかつたから、同じ境遇にある詩人や文人などよりも、一層純粹であつた。——これが七日<sup>なのか</sup>の晩に坂井へ呼ばれて、安井の消息を聞くまでの夫婦の有様であつた。

その夜宗助は家に帰つて御米の顔を見るや否<sup>いな</sup>や、「少し具合が悪いから、すぐ寝よう」と云つて、火鉢<sup>ひばち</sup>に倚りなが

ら、帰かえりを待ち受けていた御米を驚ろかした。

「どうなすつたの」と御米は眼を上げて宗助を眺めた。宗助はそこに突つ立つていた。

宗助が外から帰つて来て、こんな風をするのは、ほとんど御米の記憶にないくらい珍らしかつた。御米は卒然何とも知れない恐怖の念に襲おそわれたごとくに立ち上がつたが、ほとんど器械的に、戸棚とだなから夜具蒲團やぐふとんを取り出して、夫の云いつけ通り床を延べ始めた。その間宗助はやつぱり懐ふところ手そばをして傍に立つていた。そして床が敷けるや否や、そこそこに着物を脱ぎ捨てて、すぐその中に潜り込んだ。御米は枕元を離れ得なかつた。

「どうなすつたの」

「何だか、少し心持が悪い。しばらくこうしてじつとていたら、よくなるだろう」

宗助の答は半ば夜着の下から出た。その声が籠つたように御米の耳に響いた時、御米は済まない顔をして、枕元に坐つたなり動かなかつた。

「あつちへ行つていてもいいよ。用があれば呼ぶから」

御米はようやく茶の間へ帰つた。

宗助は夜具を被<sup>かぶ</sup>つたまま、ひとり硬くなつて眼を眠<sup>ねむ</sup>つていた。

彼はこの暗い中で、坂井から聞いた話を何度も反覆した。彼は満洲にいる安井の消息を、家主たる坂井の口を通して知ろうとは、今が今まで予期していなかつた。もう少しの事で、その安井

と同じ家主の家へ同時に招かれて、隣り合せか、向い合せに坐る運命になろうとは、今夜晚食を済ますまで、夢にも思いがけなかつた。彼は寝ながら過去二三時間の経過を考えて、そのクライマックスが突如として、いかにも不意に起つたのを不思議に感じた。かつ悲しく感じた。彼はこれほど偶然な出来事を借りて、後から断りなしに足絡あしがらをかけなければ、倒す事のできないほど強いものとは、自分ながら任じていなかつたのである。自分のような弱い男を放り出すには、もつと穩おんとう当な手段でたくさんでありますうなものだと信じていたのである。

小六こうろくから坂井の弟、それから満洲、蒙古、出京、安井、——こう談話の迹あとたどりを辿れば辿るほど、偶然の度はあまりにはなはだしか

つた。過去の痛恨を新にすべく、普通の人が滅多に出逢わないこの偶然に出逢うために、千百人のうちから撰り出されなければならぬほどの人物であつたかと思うと、宗助は苦しかつた。また腹立たしかつた。彼は暗い夜着の中で熱い息を吐いた。

この二三年の月日でようやく癒りかけた創口が、急に疼き始めた。疼くに伴れて熱つて來た。再び創口が裂けて、毒のある風が容赦なく吹き込みそうになつた。宗助はいつそのこと、万事を御米に打ち明けて、共に苦しみを分つて貰おうかと思つた。

「御米、御米」と二声呼んだ。

御米はすぐ枕元へ来て、上から覗き込むように宗助を見た。宗助は夜具の襟から顔を全く出した。次の間の灯ひが御米の頬を半分

照らしていた。

「熱い湯を一杯貰おう」

宗助はどうとう言おうとした事を言い切る勇気を失つて、嘘を吐いてごまかした。

翌日宗助は例のゞとく起きて、平日と変る事なく食事を済ました。そうして給仕をしてくれる御米の顔に、多少安心の色が見えたのを、嬉しいような懐なつかしさのような一種の情緒をもつて眺めた。

「昨夕は驚いたわ。どうなすつたのかと思つて」

宗助は下を向いて茶碗に注いだ茶を呑んだだけであつた。何と答えていいか、適當な言葉を見出さなかつたからである。

その日は朝からから風が吹き荒んで、折々埃と共に行く人の帽を奪つた。熱があると悪いから、一日休んだらと云う御米の心配を聞き捨てにして、例の通り電車へ乗つた宗助は、風の音と車の音の中に首を縮めちぢて、ただ一つ所を見つめていた。降りる時、ひゆうという音がして、頭の上の針線はりがねが鳴つたのに気がついて、空を見たら、この猛烈な自然の力の狂う間に、いつもより明らかに日がのそりと出ていた。風は洋袴ズボンの股またを冷たくして過ぎた。宗助にはその砂を捲まいて向うの堀の方へ進んで行く影が、斜めに吹かれる雨の脚のようはつきりに判然見えた。

役所では用が手に着かなかつた。筆を持つて頬杖ほおづえを突いたまま何か考えた。時々は不必要な墨を妄みだりに磨すりおろした。煙草たばこは

むやみに呑んだ。そうしては、思い出したように窓硝子まどガラスを通して外を眺めた。外は見るたびに風の世界であつた。宗助はただ早く帰りたかつた。

ようやく時間が来て家うちへ帰つたとき、御米は不安らしく宗助の顔を見て、

「どうもなくつて」と聞いた。宗助はやむを得ず、どうもないが、ただ疲れたと答えて、すぐ炬燵こたつの中へ入つたなり、晩食ばんめしまで動かなかつた。そのうち風は日と共に落ちた。昼の反動で四隣あたりは急にひつそり静まつた。

「好い案あんばい排ぬね、風が無くなつて。昼間のように吹かれると、家に坐つても何だか氣味が悪くつてしまふがいいわ」

御米の言葉には、魔物でもあるかのように、風を恐れる調子があつた。宗助は落ちついて、

「今夜は少し暖あつたかいようだね。穩おだやかで好い御正月だ」と云つた。飯を済まして煙草たばこを一本吸う段になつて、突然、

「御米、寄席よせへでも行つて見ようか」と珍らしく細君を誘つた。

御米は無論否いなむ理由もとを有たなかつた。小六は義太夫などを聞くより、宅うちにて餅もちでも焼いて食つた方が勝手だというので、留守を頼んで二人出た。

少し時間が遅れたので、寄席はいつぱいであつた。二人は座蒲ざぶ団とんを敷く余地もない一番後の方に、立膝たてひざをするように割り込まして貰つた。

「大変な人ね」

「やつぱり春だから入るんだろう」

二人は小声で話しながら、大きな部屋にぎつしり詰まつた人の頭を見回した。その頭のうちで、高座に近い前の方は、煙草の煙で霞んでいるようにぼんやり見えた。宗助にはこの累々たる黒いものが、ことごとくこう云う娯楽の席へ来て、面白く半夜を潰す事のできる余裕のある人らしく思われた。彼はどの顔を見ても羨ましかつた。

彼は高座の方を正視して、熱心に淨瑠璃を聞こうと力めた。

けれどもいくら力めても面白くななかつた。時々眼を外らして、御米の顔を偷み見た。見るたびに御米の視線は正しい所を向いて

いた。傍<sup>そば</sup>に夫のいる事はほとんど忘れて、眞面目<sup>まじめ</sup>に聴いているらしかつた。宗助は羨<sup>うら</sup>やましい人のうちに、御米まで勘定<sup>かんじょう</sup>しなければならなかつた。

中入の時、宗助は御米に、

「どうだ、もう帰ろうか」と云い掛けた。御米はその唐突<sup>とうとつ</sup>なのに驚ろかされた。

「厭なの」と聞いた。宗助は何とも答えなかつた。御米は、「どうでもいいわ」と半分夫の意に忤<sup>さか</sup>らわないような挨拶<sup>あいさつ</sup>をした。宗助はせつから連れて來た御米に対して、かえつて氣の毒な心が起つた。とうとうしまいまで辛抱<sup>しんぱう</sup>して坐つていた。

家<sup>うち</sup>へ帰ると、小六は火鉢<sup>ひばち</sup>の前に胡坐<sup>あぐら</sup>を搔<sup>か</sup>いて、背表紙<sup>せびようし</sup>の反り<sup>そり</sup>

返るのも構わずに、手に持つた本を上から翳して読んでいた。鉄て  
 瓶は傍へ卸したなり、湯は生温るく冷めてしまつた。盆の上に  
 烧き余りの餅が三切か四片載せてあつた。網の下から小皿に残つ  
 た醤油の色が見えた。

小六は席を立つて、

「面白かつたですか」と聞いた。夫婦は十分ほど身体を炬燵で暖  
 めた上すぐ床へ入つた。

翌日になつても宗助の心に落ちつきが来なかつた事は、ほぼ前  
 の日と同じであつた。役所が退けて、例の通り電車へ乗つたが、  
 今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に来ると云う事を想像  
 すると、どうしても、わざわざその人と接近するために、こんな

速力で、家へ帰つて行くのが不合理に思われた。同時に安井はその後どんなに変化したろうと思うと、よそから一目彼の様子が眺めたくもあつた。

坂井が一昨日の晩、自分の弟を評して、一口に「冒險者」と云つた、その音が今宗助の耳に高く響き渡つた。宗助はこの一語の中に、あらゆる自暴と自棄と、不平と憎悪と、乱倫と悖徳と、盲断と決行とを想像して、これらの一角に触れなければならぬほどの坂井の弟と、それと利害を共にすべく満洲からいつしょに出て来た安井が、いかなる程度の人物になつたかを、頭の中で描いて見た。描かれた画は無論冒険者との字面の許す範囲内で、もつとも強い色彩を帯びたものであつた。

かように、堕落の方面をとくに誇張した **冒險者** を頭の中で拵え上げた宗助は、その責任を自身一人で全く負わなければならぬような気がした。彼はただ坂井へ客に来る安井の姿を目見て、その姿から、安井の今日の人格を髣髴したかつた。そうして、自分の想像ほど彼は堕落していないという慰藉を得たかつた。

彼は坂井の家の傍に立つて、向に知れず、他を窺うような便利な場所はあるまいかと考えた。不幸にして、身を隠すべきところを思いつき得なかつた。もし日が落ちてから来るとすれば、こちらが認められない便宜があると同時に、暗い中を通る人の顔の分らない不都合があつた。

アドヴェンチャーラー

そのうち電車が神田へ来た。宗助はいつもの通りそこで乗り換えて、家の方へ向いて行くのが苦痛になつた。彼の神経は一歩でも安井の来る方角へ近づくに堪えなかつた。安井をよそながら見たいという好奇心は、始めからさほど強くなかつただけに、乗換の間際まぎわになつて、全く抑えつけられてしまつた。彼は寒い町を多くの人のごとく歩いた。けれども多くの人のごとくに判然はつきりした目的は有つていなかつた。そのうち店に灯ひが点いた。電車も灯火を照あかりもした。宗助はある牛肉店に上がって酒を呑み出した。一本は夢中に呑んだ。二本目は無理に呑んだ。三本目にも酔えなかつた。宗助は背を壁に持たして、酔つて相手のない人のような眼をして、ほんやりどこかを見つめていた。

時刻が時刻なので、夕飯を食いに来る客は入れ代り立ち代り来た。その多くは用弁的に飲食を済まして、さつさと勘定をして出て行くだけであつた。宗助は周囲のざわつく中に自然として、他の倍も三倍も時を過ごしたごとくに感じた末、ついに坐り切れずに席を立つた。

表は左右から射す店の灯で明らかであつた。軒先を通る人は、帽も衣装もはつきり物色する事ができた。けれども広い寒さを照らすには余りに弱過ぎた。夜は戸ごとの瓦斯<sup>ガス</sup>と電灯を閑却して、依然として暗く大きく見えた。宗助はこの世界と調和するほどな黒味の勝つた外套<sup>マント</sup>に包まれて歩いた。その時彼は自分の呼吸する空気さえ灰色になつて、肺の中の血管に触れるような気が

した。

彼はこの晩に限つて、ベルを鳴らして忙がしそうに眼の前を往つたり来たりする電車を利用する考かんがえが起らなかつた。目的を有つて途みちを行く人と共に、抜目なく足を運ばす事を忘れた。しかも彼は根の締らない人間として、かく漂浪の雛ひながた形を演じつつある自分の心を省みて、もしこの状態が長く続いたらどうしたらよからうと、ひそかに自分の未来を案じ煩つた。今日までの経過から推して、すべての創口きずぐちを癒合するものは時日であるという格言を、彼は自家の経験から割り出して、深く胸に刻みつけていた。それが一昨日の晩にすっかり崩れたのである。

彼は黒い夜の中を歩るきながら、ただどうかしてこの心から逃

れ出たいと思つた。その心はいかにも弱くて落ちつかなくつて、不安で不定で、度胸がなき過ぎて希知に見えた。彼は胸を抑えつける一種の圧迫の下に、いかにせば、今の自分を救う事ができるかという実際の方法のみを考えて、その圧迫の原因になつた自分の罪や過失は全くこの結果から切り放してしまつた。その時の彼は他の事を考える余裕を失つて、ことごとく自己本位になつていった。今までには忍耐で世を渡つて來た。これからは積極的に人世觀を作り易えなければならなかつた。そうしてその人世觀は口で述べるもの、頭で聞くものでは駄目であつた。心の実質が太くなるものでなくては駄目であつた。

彼は行く行く口の中で何遍も宗教の二字を繰り返した。けれど

もその響は繰り返すあとからすぐ消えて行つた。攫んだと思う煙が、手を開けるといつの間にか無くなつてゐるようだに、宗教とははかない文字であつた。

宗教と関聯して宗助は坐禪ざぜんという記憶を呼び起した。昔し京都にいた時分彼の級友に相国寺しょうこくじへ行つて坐禪をするものがあつた。当時彼はその迂闊うかつを笑つていた。「今の世に……」と思つていた。その級友の動作が別に自分と違つたところもないようなのを見て、彼はますます馬鹿馬鹿しい氣を起した。

彼は今更ながら彼の級友が、彼の侮蔑ぶべつに値する以上のある動機から、貴重な時間を惜しまず、相国寺へ行つたのではなかろうかと考え出して、自分の軽薄を深く恥じた。もし昔から世俗で云

う通り 安心とか立命とかいう境地に、坐禅の力で達する事ができるならば、十日や二十日役所を休んでも構わないからやつて見たいと思つた。けれども彼はこの道にかけては全くの門外漢であつた。したがつて、これより以上 明瞭な考も浮ばなかつた。

ようやく家へ辿り着いた時、彼は例のような御米と、例のような小六と、それから例のような茶の間と座敷と洋灯と簾笥を見て、自分が例にない状態の下に、この四五時間暮していだのだといふ自覚を深くした。火鉢には小さな鍋が掛けてあつて、その蓋の隙間から湯気が立つていた。火鉢の傍には彼の常に坐る所に、いつもの座蒲団を敷いて、その前にちゃんと膳立がしてあつた。宗助は糸底を上にしてわざと伏せた自分の茶碗と、この二三

年来朝晩使い慣れた木の箸を眺めて、

「もう飯は食わないよ」と云つた。御米は多少不本意らしい風もした。

「おやそう。余り遅いから、おおかたどこかで召上めしやがつたろうとは思つたけれど、もしまだ大ど<sup>いけない</sup>から」と云いながら、布巾きんで鍋なべの耳つまを撮んで、土瓶敷どびんしきの上におろした。それから清きよを呼んで膳ぜんを台所へ退さげさせた。

宗助はこういう風に、何ぞ事故ができるて、役所の退出ひけからすぐ外へ回つて遅くなる場合には、いつでもその顛末てんまつの大略を、帰宅早々御米に話すのを例にしていた。御米もそれを聞かないうちは気がすまなかつた。けれども今夜に限つて彼は神田で電車を降

りた事も、牛肉屋へ上つた事も、無理に酒を呑んだ事も、まるで話したくなかった。何も知らない御米はまた平常の通り無邪気にそれからそれへと聞きたがつた。

「何別にこれという理由もなかつたのだけれども、——ついあすこいらで牛ぎゅうが食いたくなつただけの事さ」

「そうして御腹おなかを消化こなすために、わざわざここまで歩るいていらしつたの」

「まあ、そうだ」

御米はおかしそうに笑つた。宗助はむしろ苦しかつた。しばらくして、

「留守に坂井さんから迎いに来なかつたかい」と聞いた。

「いいえ、なぜ」

「一昨日の晩行つたとき、御馳走ごちそうするとか云つていたからさ」

「また？」

御米は少し呆あきれた顔をした。宗助はそれなり話を切り上げて寝た。頭の中をざわざわ何か通つた。時々眼を開けて見ると、例のごとく洋灯ランプが暗くして床の間の上に載のせてあつた。御米はさも心地好さそうに眠つていた。ついこの間までは、自分の方がよく寝られて、御米は幾晩も睡眠の不足に悩まされたのであつた。宗助は眼を閉じながら、明らかに次の間の時計の音を聞かなければならぬ今の自分をさらに心苦しく感じた。その時計は最初は幾つも続けざまに打つた。それが過ぎると、びんとただ一つ鳴つた。

その濁つた音が 轆 ほうき 星 ぼし の尾のようにほうと宗助の耳 みみ 栉 たぶ にしばらく響いていた。次には二つ鳴つた。はなはだ淋しい音であつた。宗助はその間に、何とかして、もつと鷹揚 おうよう に生きて行く分別をしなければならないと云う決心だけをした。三時は 蒙朧 もうろう として聞えたような聞えないようなうちに過ぎた。四時、五時、六時はまるで知らなかつた。ただ世の中が膨れた。天が波を打つて伸びかつ縮んだ。地球が糸で釣るした毬 まり のごとくに大きな弧線 こせん を描いて空間に揺いた。すべてが恐ろしい魔の支配する夢であつた。七時過に彼ははつとして、この夢から覚めた。御米がいつもの通り微笑して枕元に曲んでいた。冴えた日は黒い世の中を疾にどこかへ追いやつていた。

## 十八

宗助は一封の紹介状を懷にして山門を入つた。彼はこれを同僚の知人の某から得た。その同僚は役所の往復に、電車の中で洋服の隠袋から菜根譚かくし さいこんたんを出して読む男であつた。こう云う方面に趣味のない宗助は、固より菜根譚の何物なるかを知らなかつた。ある日一つ車の腰掛けに膝を並べて乗つた時、それは何だと聞いて見た。同僚は小形の黄色い表紙を宗助の前に出して、こんな妙な本だと答えた。宗助は重ねてどんな事が書いてあるかと尋ねた。その時同僚は、一口に説明のできる格好かつこうな言葉を有つていなか

つたと見えて、まあ禅学の書物だろうというような妙な挨拶をした。宗助は同僚から聞いたこの返事をよく覚えていた。

紹介状を貰う四五日前(しこんちまえ)、彼はこの同僚の傍(そば)へ行つて、君は禅学をやるのかと、突然質問を掛けた。同僚は強く緊張した宗助の顔を見てすこぶる驚いた様子であつたが、いややらない、ただ慰み半分にあんな書物を読むだけだと、すぐ逃げてしまつた。宗助は多少失望に弛んだ(ゆる)下(した)唇(くちびる)を垂れて自分の席に帰つた。

その日帰りがけに、彼らはまた同じ電車に乗り合わした。先刻(さつき)宗助の様子を、気の毒に観察した同僚は、彼の質問の奥に雑談以上のある意味を認めたものと見えて、前よりはもつと親切にその方面の話をして聞かした。しかし自分はいまだかつて参禅という

事をした経験がないと自白した。もし詳くわしい話が聞きたければ、幸い自分の知り合によく鎌倉へ行く男があるから紹介してやろうと云つた。宗助は車の中でその人の名前と番地を手帳に書き留めた。そうして次の日同僚の手紙を持つてわざわざ回り道をして訪問に出かけた。宗助の懷ふところにした書状はその折席上で認したためて貰つたものであつた。

役所は病氣になつて十日ばかり休む事にした。およね御米の手前もやはり病氣だと取り繕つくろつた。

「少し脳が悪いから、一週間ほど役所を休んで遊あすんで来るよ」と云つた。御米はこの頃の夫の様子のどこかに異状があるらしく思われる所以で、内心では始終心配していた矢先だから、平生煮え

切らない宗助の果斷を喜んだ。けれどもその突然なのにも全く驚ろいた。

「遊びに行くつて、どこへいらっしゃるの」と眼を丸くしないばかりに聞いた。

「やつぱり鎌倉辺が好かろうと思つている」と宗助は落ちついて答えた。地味な宗助とハイカラな鎌倉とはほとんど縁の遠いものであつた。突然二つのものを結びつけるのは滑稽こつけいであつた。御米も微笑を禁じ得なかつた。

「まあ御金持ね。わたし私もいつしよに連れてつてちようだい」と云つた。宗助は愛すべき細君のこの冗談じょうだんを味わう余裕を有たなかつた。眞面目まじめな顔をして、

「そんな贅沢ぜいたくな所へ行くんじやないよ。禪寺へ留めて貰つて、一週間か十日、ただ静かに頭を休めて見るだけの事さ。それもはたしてなくなるか、ならないか分らないが、空氣のいい所へ行くと、頭には大変違みんなうと皆云みんなうから」と弁解した。

「そりや違いますわ。だから行つていらつしやいとも。今のは本当の冗談よ」

御米は善良な夫に調戯からかつたのを、多少済まないよう<sup>と</sup>に感じた。宗助はその翌日あくるひすぐ貰つて置いた紹介状を懐ふところにして、新橋から汽車に乗つたのである。

その紹介状の表には釈宜道様しゃくぎどうと書いてあつた。

「この間まで侍者じしゃをしていましたが、この頃では塔たつ頭ちゆうにある

古い庵室に手を入れて、そこに住んでいるとか聞きました。どうですか、まあ着いたら尋ねて御覧なさい。庵の名はたしか一窓庵あんでした」と書いてくれる時、わざわざ注意があつたので、宗助は礼を云つて手紙を受取りながら、侍者じしゃだの塔たつちゆう頭かしらだのとう自分には全く耳新らしい言葉の説明を聞いて帰つたのである。

山門を入ると、左右には大きな杉があつて、高く空さきを遮さえぎつているために、路が急に暗くなつた。その陰気な空気に触れた時、宗助は世の中と寺の中との区別を急に覚さとつた。静かな境内けいだいの入口に立つた彼は、始めて風邪ふうじやを意識する場合に似た一種の悪寒さむけを催した。

彼はまず真直まっすぐに歩るき出した。左右にも行手いくてにも、堂のようないくつ

ものや、院のようなものがちよいちよい見えた。けれども人の出で  
入はいっさいなかつた。ことごとく寂寥として錆び果てていた。  
宗助はどこへ行つて、宜道のいる所を教えて貰おうかと考えながら、誰も通らない路の真中に立つて四方を見回した。

山の裾すそを切り開いて、一二丁奥へ上るよう<sup>のぼ</sup>に建てた寺だと見えて、後の方は樹きの色で高く塞ふさがつていた。路の左右も山繞やまつづきか丘続の地勢に制せられて、けつして平ではないようであつた。その小高い所々に、下から石段を畳んで、寺らしい門を高く構えたのが二三軒目に着いた。平地に垣を繞らして、点在しているのは、幾多もあつた。近寄つて見ると、いずれも門もん瓦がわらの下に、院号やら庵号やらが額にしてかけてあつた。

宗助は箔の剥げた古い額を一二枚読んで歩いたが、ふと一窓庵から先へ探し出して、もしそこに手紙の名宛の坊さんがいなかつたら、もつと奥へ行つて尋ねる方が便利だらうと思いついた。それから逆戻りをして塔頭を一々調べにかかると、一窓庵は山門を這入るや否やすぐ右手の方の高い石段の上にあつた。丘外れなので、日当の好い、からりとした玄関先を控えて、後の山の懷に暖まつているような位置に冬を凌ぐ氣色に見えた。宗助は玄関を通り越して庫裡の方から土間に足を入れた。上り口の障子の立ててある所まで来て、たのむたのむと二三度呼んで見た。しかし誰も出て来てくれるものはなかつた。宗助はしばらくそこに立つたまま、中の様子を窺つていた。いつまで立つても音沙汰

がないので、宗助は不思議な思いをして、また庫裡を出て門の方へ引返した。すると石段の下から剃立そりたての頭を青く光らした坊さんが上つて來た。年はまだ二十四五としか見えない若い色白の顔であつた。宗助は門の扉の所に待ち合わして、

「宜道さんとおつしやる方はこちらにおいてでしようか」と聞いた。

「私が宜道です」と若い僧は答えた。宗助は少し驚いたが、また嬉しくもあつた。すぐ懐中から例の紹介状を出して渡すと、宜道は立ちながら封を切つて、その場で読み下した。やがて手紙を巻き返して封筒へ入れると、

「ようこそ」と云つて、叮嚀ていねいに会えしゃく釈くだしたなり、先に立つて宗

助を導いた。二人は庫裡に下駄を脱いで、障子を開けて内へ這入つた。そこには大きな囲炉裏が切つてあつた。宜道は鼠木綿の上に羽織つていた薄い粗末な法衣を脱いで釘にかけて、「御寒うございましょう」と云つて、囲炉裏の中に深く埋けてあつた炭を灰の下から掘り出した。

この僧は若いに似合わずはなはだ落ちついた話振をする男であつた。低い声で何か受答えをした後で、にやりと笑う具合などは、まるで女のような感じを宗助に与えた。宗助は心のうちに、この青年がどういう機縁の元に、思い切つて頭を剃つたものどうかと考えて、その様子のしとやかなところを、何となく憐れに思つた。

「大変御静なようですが、今日はどなたも御留守なんですか」

「いえ、今日に限らず、いつも私一人です。だから用のあるときは構わず明け放しにして出ます。今もちよつと下まで行つて用を足して参りました。それがためせつかくおいでのところを失礼致しました」

宜道はこの時改めて遠来の人に対して自分の不在を詫びた。  
この大きな庵を、たつた一人で預かっているさえ、相応に骨が折れるのに、その上に厄介やっかいが増したらさぞ迷惑だろうと、宗助は少し気の毒な色をほかに動かした。すると宜道は、

「いえ、ちつとも御遠慮には及びません。道のためでございますから」とゆかしい事を云つた。そして、目下自分の所に、宗助

のほかに、まだ一人世話になつてゐる居士のある旨を告げた。この居士は山へ来てもう二年になるとかいう話であつた。宗助はそれから二三日して、始めてこの居士を見たが、彼は剽ひょうきん 輕ひらな羅漢らかんのような顔をしている氣樂こいりきそうな男であつた。細い大根だいこんを三四本ぶら下げて、今日は御馳走ごちそうを買つて來たと云つて、それを宜道に煮てもらつて食つた。宜道も宗助もその相伴しょうばんをした。この居士は顔が坊さんらしいので、時々僧堂の衆に交つて、村の御斎おとぎなどに出かける事があるとか云つて宜道が笑つていた。

そのほか俗人で山へ修業に來てゐる人の話もいろいろ聞いた。中に筆墨ふですみを商う男あきながいた。背中へ荷をいっぱい負つて、二十日なり三十日なり、そこら中回つて歩いて、ほぼ売り尽してしま

さんじゅうにち

と山へ帰つて来て坐禪をする。それからしばらくして食うものがなくなると、また筆墨を背に載のせて行商に出る。彼はこの両面の生活を、ほとんど循環じゅんかん小数しょうすうのごとく繰り返して、飽く事を知らないのだと云う。

宗助は一見いつけんこだわりの無さそうなこれらの人々の月日と、自分の内面にある今の生活とを比べて、その懸隔けんかくの甚だしいのに驚ろいた。そんな気楽な身分だから坐禪ざぜんができるのか、あるいは坐禪をした結果そういう気楽な心になれるのか迷つた。

「氣樂ではいけません。道樂にできるものなら、二十年も三十年も雲水うんすいをして苦しむものはありません」と宣道は云つた。

彼は坐禪をするときの一般の心得や、老師ろうしから公案こうあんの出る事

や、その公案に一生懸命<sup>かじ</sup>噛りついて、朝も晩も昼も夜も噛りつづけに噛らなくてはいけない事やら、すべて今の宗助には心元なく見える助<sup>じよごん</sup>言<sup>ごん</sup>を与えた末、

「御室<sup>おへや</sup>へ御案内<sup>まなび</sup>しよう」と云つて立ち上がった。

囲炉裏<sup>いろり</sup>の切つてある所を出て、本堂を横に抜けて、その外れにある六畳<sup>ろくじょう</sup>の座敷の障子<sup>しようじ</sup>を縁から開けて、中へ案内された時、宗助は始めて一人遠くに来た心持がした。けれども頭の中は、周囲の幽静な趣<sup>おもむき</sup>と反照<sup>はんしょう</sup>するためか、かえつて町にいるときよりも動搖した。

約一時間もしたと思う頃宜道の足音がまた本堂の方から響いた。  
「老師<sup>ろうし</sup>が相見<sup>しようけん</sup>になるそうでござりますから、御都合<sup>ようわ</sup>が宜しけ

れば参りましょう」と云つて、丁寧に敷居の上に膝を突いた。

二人はまた寺を空にして連立つて出た。山門の通りをほぼ一丁ほど奥へ来ると、左側に蓮池があつた。寒い時分だから池の中はただ薄濁りに淀んでいるだけで、少しも清淨な趣はなかつたが、向側に見える高い石の崖外れまで、縁に欄干のある座敷が突き出しているところが、文人画にでもありそうな風致を添えた。

「あすこが老師の住んでいられる所です」と宜道は比較的新らしいその建物を指した。

二人は蓮池の前を通り越して、五六級の石段を上つて、その正面にある大きな伽藍の屋根を仰いだまま直左りへ切れた。玄関へ

差しかかつた時、宜道は

「ちよつと失礼します」と云つて、自分だけ裏口の方へ回つたが、やがて奥から出て来て、

「さあどうぞ」と案内をして、老師のいる所へ伴<sup>は</sup>れて行つた。

老師<sup>じゅうじ</sup>というのは五十格好<sup>がつこう</sup>に見えた。赭<sup>あかぐろ</sup>黒<sup>くろ</sup>い光沢<sup>つや</sup>のある顔をしていた。その皮膚も筋肉もことごとく緊<sup>しま</sup>つて、どこにも怠<sup>おこたり</sup>のないところが、銅像<sup>どうぞう</sup>のもたらす印象を、宗助の胸に彫りつけた。ただ唇<sup>くちびる</sup>があまり厚過ぎるので、そこに幾分の弛<sup>ゆる</sup>みが見えた。その代り彼の眼には、普通の人間にとうてい見るべからざる一種の精<sup>せい</sup>彩<sup>さい</sup>が閃<sup>ひら</sup>めいた。宗助が始めてその視線に接した時は、暗中に卒然<sup>そつぜん</sup>として白刃を見る思があつた。

「まあ何から入つても同じであるが」と老師は宗助に向つて云つた。「父母未生以前本來の面目は何んだか、それを一つ考えて見たら善かろう」

宗助には父母未生以前という意味がよく分らなかつたが、何しろ自分と云うものは必竟何物だか、その本体を捕まえて見ると云う意味だろうと判断した。それより以上口を利くには、余り禪といふものの知識に乏しかつたので、黙つてまた宜道に伴られ一窓庵へ帰つて来た。

晩食の時宜道は宗助に、入室の時間の朝夕二回あることと、提唱の時間が午前である事などを話した上、「今夜はまだ見解もできないかも知れませんから、明朝か明

「晩御誘い申しましよう」と親切に云つてくれた。それから最初の  
うちは、つめて坐<sup>す</sup>るのは難儀だから線香を立てて、それで時間  
を計つて、少しずつ休んだら好かろうと云うような注意もしてくれた。

宗助は線香を持つて、本堂の前を通つて自分の室<sup>へや</sup>ときまつた六  
畳に這入<sup>はい</sup>つて、ぼんやりして坐つた。彼から云うといわゆる公  
案なるものの性質が、いかにも自分の現在と縁の遠いような気  
がしてならなかつた。自分は今腹痛で悩んでいる。その腹痛と言  
う訴を抱<sup>いだ</sup>いて来て見ると、あにはからんや、その対症療法として、  
むずかしい数学の問題を出して、まあこれでも考えたらよかろう  
と云われたと一般であつた。考えろと云われれば、考えないでも

ないが、それは一応腹痛が治まつてからの事でなくては無理であった。

同時に彼は勤<sup>つとめ</sup>を休んで、わざわざここまで来た男であつた。紹介状を書いてくれた人、万事に気をつけてくれる宜道に對しても、あまりに軽卒な振舞<sup>ふるまい</sup>はできなかつた。彼はまず現在の自分が許す限りの勇氣<sup>ひつ</sup>を提さげて、公案に向おうと決心した。それがいざれのところに彼を導びいて、どんな結果を彼の心に持ち来すかは、彼自身といえども全く知らなかつた。彼は悟<sup>さとり</sup>という美名<sup>あざむ</sup>に欺かれして、彼の平生に似合わぬ冒險を試みようと企てたのである。そう分を救う事ができはしまいかと、はかない望を抱いたのである。

彼は冷たい火鉢の灰の中に細い線香を燻らして、教えられた通り座蒲団の上に半跏を組んだ。昼のうちにはさまでとは思わなかつた室が、日が落ちてから急に寒くなつた。彼は坐りながら、背中のぞくぞくするほど温度の低い空気に堪たえなかつた。

彼は考えた。けれども考える方向も、考える問題の実質も、ほとんど捕まえようのない空漠なものであつた。彼は考えながら、自分は非常に迂闊な真似まねをしているのではないかと疑うたがつた。

火事見舞に行く間際に、細かい地図を出して、仔細しそいに町名や番地を調べているよりも、ずっと飛び離れた見当違の所作を演じているごとく感じた。

彼の頭の中をいろいろなものが流れた。そのあるものは明らか

に眼に見えた。あるものは混沌として雲のごとくに動いた。どこから来てどこへ行くとも分らなかつた。ただ先のものが消える、すぐ後から次のものが現われた。そうして仕切りなしにそれからそれへと続いた。頭の往来を通るものは、無限で無数で無尽蔵で、けつして宗助の命令によつて、留まる事も休む事もなかつた。断ち切ろうと思えば思うほど、滾々として湧いて出た。

宗助は怖くなつて、急に日常の我を呼び起して、室の中を眺めた。室は微かな灯ひで薄暗く照らされていた。灰の中に立てた線香は、まだ半分ほどしか燃えていなかつた。宗助は恐るべく時間の長いのに始めて気がついた。

宗助はまた考え始めた。すると、すぐ色のあるもの、形のある

ものが頭の中を通り出した。ぞろぞろと群がる蟻のごとくに動いて行く、あとからまたぞろぞろと群がる蟻のごとくに現われた。じつとしているのはただ宗助の身体だけであつた。心は切ないほど、苦しいほど、堪えがたいほど動いた。

そのうちじつとしている身体も、膝<sup>ひざ</sup>頭<sup>がしら</sup>から痛み始めた。真直に延ばしていた脊髄がしだいしだいに前の方に曲つて來た。宗助は両手で左の足の甲を抱えるようにして下へおろした。彼は何をする目的もなく室<sup>へや</sup>の中に立ち上がつた。障子<sup>しようじ</sup>を明けて表へ出て、門前をぐるぐる駆け回つて歩きたくなつた。夜はしんとしていた。寝ている人も起きている人もどこにもおりそうには思えなかつた。宗助は外へ出る勇気を失つた。じつと生きながら妄想<sup>もうぞう</sup>

に苦しめられるのはなお恐ろしかつた。

彼は思い切つてまた新らしい線香を立てた。そうしてまたほぼ前ぜんと同じ過程を繰り返した。最後に、もし考えるのが目的だとすれば、坐つて考えるのも寝て考えるのも同じだらうと分別した。彼は室の隅すみに置んであつた薄汚ない蒲団ふとんを敷いて、その中に潜り込んだ。すると先刻からの疲れで、何を考える暇もないうちに、深い眠りに落ちてしまつた。

眼が覚めると枕元の障子がいつの間にか明るくなつて、白い紙にやがて日の逼るべき色が動いた。昼も留守するすを置かずに済む山寺は、夜に入つても戸を閉てる音を聞かなかつたのである。宗助は自分が坂井の崖がけ下したの暗い部屋に寝ていたのでないと意識するや

否や、すぐ起き上がつた。縁へ出ると、軒端に高く大魔王樹の影が眼に映つた。宗助はまた本堂の仏壇の前を抜けて、囲炉裏の切つてある昨日の茶の間へ出た。そこには昨日の通り宣道の法衣が折釘にかけてあつた。そうして本人は勝手のかまど竈の前に蹲踞まで、火を焚いていた。宗助を見て、

「御早う」と懃懃に礼をした。「先刻御誘い申そそうと思いましたが、よく御寝のようでしたから、失礼して一人参りました」

宗助はこの若い僧が、今朝夜明がたにすでに参禅を済まして、それから帰つて来て、飯を炊いでいるのだという事を知つた。見ると彼は左の手でしきりに薪を差し易えながら、右の手に黒い表紙の本を持つて、用の合間合間にそれを読んでいる様子であ

つた。宗助は宜道に書物の名を尋ねた。それは 碧巖集へきがんしゅう という  
 むずかしい名前のものであつた。宗助は腹の中で、昨夕のように  
 当途あてどもない考かんがえに耽ふけつて脳を疲らすより、いつそその道の書物でも  
 借りて読む方が、要領を得る捷径ちかみちではなかろうかと思いついた。  
 宜道にそう云うと、宜道は一も二もなく宗助の考を排斥した。

「書物を読むのはごく悪うございます。有體ありていに云うと、読書ほど修業さまたげの妨になるものは無いようです。私共でも、こうして碧巖などを見ますが、自分の程度以上のところになると、まるで見当ひとうがつきません。それを好加減いいかげんに揣摩しまする癖きょうがいがつくと、それが坐る時の妨になつて、自分以上の境界きょうがいを予期して見たり、悟とんざを待ち受けて見たり、充分突込んで行くべきところに頓挫とんざがで

きます。大変毒になりますから、御止しになつた方がよいでしょ  
う。もし強いて何か御読みになりたければ、禅関策進という  
ような、人の勇気を鼓舞したり激励したりするものが宜しゆうご  
ざいましょう。それだつて、ただ刺戟の方便として読むだけで、  
道その物とは無関係です」

宗助には宜道の意味がよく解らなかつた。彼はこの生若い青  
い頭をした坊さんの前に立つて、あたかも一個の低能児であるか  
のごとき心持を起した。彼の慢心は京都以来すでに銷磨し尽し  
ていた。彼は平凡を分として、今日まで生きて來た。聞達ほど  
ど彼の心に遠いものはなかつた。彼はただありのままの彼として、  
宜道の前に立つたのである。しかも平生の自分より遙かに無力無  
はる

能な赤子あかごであると、さらに自分を認めざるを得なくなつた。彼に取つては新らしい発見であつた。同時に自尊心を根絶するほどの発見であつた。

宜道が竈へつついの火を消して飯をむらしている間に、宗助は台所から下りて庭の井戸端いどばたへ出て顔を洗つた。鼻の先にはすぐ雑木山ぞうきやまが見えた。その裾すその少し平たいらな所を拓ひらいて、菜園こしらが拵えてあつた。宗助は濡ぬれた頭を冷たい空氣に曝さらして、わざと菜園まで下りて行つた。そうして、そこに崖がけを横に掘つた大きな穴を見出した。宗助はしばらくその前に立つて、暗い奥の方を眺ながめていた。やがて、茶の間へ帰ると、囲炉裏いろりには暖かい火が起つて、鉄瓶てつびんに湯たぎの沸る音が聞えた。

「手がないものだから、つい遅くなりまして御気の毒です。すぐ御膳に致しましよう。しかしこんな所だから上げるもののがなくつて困ります。その代り明日あたりは御馳走に風呂でも立てましょう」と宜道が云つてくれた。宗助はありがたく囲炉裏の向に坐つた。

やがて食事を了えて、わが室へ帰つた宗助は、また父母未生以前と云う稀有な問題を眼の前に据えて、じつと眺めた。けれども、もともと筋の立たない、したがつて発展のしようのない問題だから、いくら考へてもどこからも手を出す事はできなかつた。そうして、すぐ考へるのが厭になつた。宗助はふと御米にここへ着いた消息を書かなければならぬ事に気がついた。彼は俗用の生じ

たのを喜こぶごとくに、すぐ鞄の中から巻紙と封じ袋を取り出して、御米にやる手紙を書き始めた。まずこここの閑静な事、海に近いせいか、東京よりはよほど暖かい事、空気の清朗な事、紹介された坊さんの親切な事、食事の不味い事、夜具蒲団の綺麗に行かない事、などを書き連ねているうちに、はや三尺余りの長さになつたので、そこで筆を擱いたが、公案に苦しめられている事や、坐禅をして膝の関節を痛くしている事や、考えるためにますます神経衰弱が劇しくなりそうな事は、噫にも出さなかつた。彼はこの手紙に切手を貼つて、ポストに入れなければならぬ口実を求めて、早速山を下つた。そうして父母未生以前と、御米と、安井に、脅かされながら、村の中をうろついて帰つた。

午には、宜道から話のあつた居士に会つた。この居士は茶碗を出して、宜道に飯を盛つて貰うとき、憚かり様とも何とも云わずに、ただ合掌して礼を述べたり、相図をしたりした。このくらい静かに物事を為るのが法だと云つた。口を利かず、音を立てないのは、考えの邪魔になると云う精神からだそうであつた。それほど真剣にやるべきものをと、宗助は昨夜からの自分が、何となく恥ずかしく思われた。

食後三人は囲炉裏の傍でしばらく話した。その時居士は、自分が坐禅をしながら、いつか気がつかずにうとうとと眠つてしまつていて、はつと正気に帰る間際に、おや悟つたなど喜ぶことがあるが、さていよいよ眼を開いて見ると、やつぱり元の通の自分が

ので失望するばかりだと云つて、宗助を笑わした。こう云う氣楽な考で、参禅している人もあると思うと、宗助も多少は寛ろいだ。けれども三人が分れ分れに自分の室に入る時、宜道が、

「今夜は御誘い申しますから、これから夕方までしつかり御坐りなさいまし」と真面目に勧めたとき、宗助はまた一種の責任を感じた。消化れない堅い団子が胃に滞おつてゐるような不安な胸を抱いて、わが室へ帰つて來た。そうしてまた線香を焚いて坐わり出した。その癖夕方までは坐り続けられなかつた。どんな解答にしろ一つ揃らえておかなければならぬと思ひながらも、しまいには根気が尽きて、早く宜道が夕食の報知に本堂を通り抜けて来てくれれば好いと、そればかり気にかかつた。

日は懊惱と困憊の裡に傾むいた。障子に映る時の影がし  
だいに遠くへ立ち退くにつれて、寺の空気が床の下から冷え出  
た。風は朝から枝を吹かなかつた。縁側に出て、高い庇を仰ぐ  
と、黒い瓦の小口だけが揃つて、長く一列に見える外に、穩かな  
空が、蒼い光をわが底の方に沈めつつ、自分と薄くなつて行くと  
ころであつた。

## 十九

「危険うございます」と云つて宜道は一足先へ暗い石段を下りた。  
宗助はあとから続いた。町と違つて夜になると足元が悪いので、

宜道は提灯ちょうちんを點つけてわずか一丁ばかりの路みちを照らした。石段を下り切ると、大きな樹の枝が左右から二人の頭に蔽おい被かぶさるよう空さえぎを遮さえぎつた。闇やみだけれども蒼い葉の色が二人の着物の織目ひに染み込むほどに宗助を寒がらせた。提灯の灯ひにもその色が多少映る感じがあつた。その提灯は一方に大きな樹の幹を想像するせいか、はなはだ小さく見えた。光の地面に届く尺数もわずかであつた。照らされた部分は明るい灰色の断片となつて暗い中にほつかり落ちた。そうして二人の影が動くに伴れて動いた。

蓮池れんちを行き過ぎて、左へ上のぼる所は、夜はじめての宗助に取つて、少し足元なめらが滑かに行かなかつた。土の中に根を食つている石に、一二度下駄げたの台を引つ掛けた。蓮池の手前から横に切れる裏路も

あるが、この方は凸凹とつおうが多くて、慣れない宗助には近くても不便だろうと云うので、宜道はわざわざ広い方を案内したのである。玄関を入れると、暗い土間に下駄がだいぶ並んでいた。宗助は曲んで、人の履物はきものを踏まないようそつと上へのぼつた。室は八畳ほどの広さであつた。その壁際かべぎわに列を作つて、六七人の男が一側ひとかわに並んでいた。中に頭を光らして、黒い法衣ころもを着た僧も交つていた。他のものは大概袴はかまを穿いていた。この六七人の男は上り口と奥へ通ずる三尺の廊下口を残して、行儀よく鉤かぎの手に並んでいた。そうして、一言も口を利かなかつた。宗助はこれらの人の顔を一目見て、まずその峻刻しづんこくなにに気を奪られた。彼らは皆固く口を結んでいた。事ありげな眉まゆを強く寄せていた。傍そばに

どんな人がいるか見向きもしなかつた。いかなるものが外から入つて来ても、全く注意しなかつた。彼らは活きた彫刻のように己れをして、火の氣のない室に肅然と坐つていた。宗助の感覚には、山寺の寒さ以上に、一種嚴かな気が加わつた。

やがて寂寥の中に、人の足音が聞えた。初は微かに響いたが、しだいに強く床を踏んで、宗助の坐つている方へ近づいて来た。しまいに一人の僧が廊下口からぬつと現れた。そうして宗助の傍を通つて、黙つて外の暗がりへ抜けて行つた。すると遠くの奥の方で鈴を振る音がした。

この時宗助と並んで厳肅に控えていた男のうちで、小倉の袴を着けた一人が、やはり無言のまま立ち上がり、室の隅の廊

下口の真正面へ来て着座した。そこには高さ二尺幅一尺ほどの木の枠の中に、銅鑼のような形をした、銅鑼よりも、ずっと重くて厚そうなものがかかつていていた。色は蒼黒く貧しい灯に照らされていた。袴を着けた男は、台の上にある撞木を取り上げて、銅鑼に似た鐘の真中を二つほど打ち鳴らした。そうして、ついと立つて、廊下口を出て、奥の方へ進んで行つた。今度は前と反対に、足音がだんだん遠くの方へ去るに従つて、微かになつた。そうして一番しまいにぴたりとどこかで留まつた。宗助は坐ながら、はつとした。彼はこの袴を着けた男の身の上に、今何事が起りつつあるだろうかを想像したのである。けれども奥はしんとして静まり返つていた。宗助と並んでいるものも、一人として顔の筋肉を

動かすものはなかつた。ただ宗助は心の中で、奥からの何物かを待ち受けた。すると忽然として鈴を振る響が彼の耳に応えた。同時に長い廊下を踏んで、こちらへ近づく足音がした。袴を着けた男はまた廊下口から現われて、無言のまま玄関を下りて、霜の裡に消え去つた。入れ代つてまた新らしい男が立つて、最前の鐘を打つた。そうして、また廊下を踏み鳴らして奥の方へ行つた。宗助は沈黙の間に行われるこの順序を見ながら、膝に手を載せて、自分の番の来るのを待つていた。

自分より一人置いて前の男が立つて行つた時は、ややしばらくしてから、わつと云う大きな声が、奥の方で聞えた。その声は距離が遠いので、劇しく宗助の鼓膜を打つほど、強くは響かなかつ

たけれども、たしかに精一杯威を振つたものであつた。そうしてただ一人の咽喉から出た個人の特色を帶びていた。自分のすぐ前の人気が立つた時は、いよいよわが番が回つて来たと云う意識に制せられて、一層落ちつきを失つた。

宗助はこの間の公案に対し、自分だけの解答は準備していた。けれども、それははなはだ覚束ない薄手のものに過ぎなかつた。室中に入る以上は、何か見解を呈しない訳に行かないので、やむを得ず納まらないところを、わざと納まつたように取繕つた、その場限りの挨拶であつた。彼はこの心細い解答で、僥幸にも難関を通過して見たいなどとは、夢にも思い設けなかつた。老師をごまかす気は無論なかつた。その時の宗助はもう少

し真面目まじめであつたのである。単に頭から割り出した、あたかも画えにかいた餅もちのような代物しろものを持つて、義理にも室内に入らなければならぬ自分の空虚な事を恥じたのである。

宗助は人のするごとくに鐘を打つた。しかも打ちながら、自分は人並にこの鐘を撞木で敲たたくべき権能けんのうが無いのを知つていた。それを人並に鳴らして見る猿のごとき己おのれを深く嫌忌けんきした。

彼は弱味のある自分に恐れを抱きつつ、入口を出て冷たい廊下へ足を踏み出した。廊下は長く続いた。右側にある室へやはことごとく暗かつた。角を二つ折れ曲ると、向の外れの障子に灯影ひかげが差した。宗助はその敷居際しきいぎわへ来て留まつた。

室内に入るものは老師に向つて三拝するのが礼であつた。拝し

かたは普通の挨拶のよう<sup>あいさつ</sup>に頭を置に近く下げる<sup>てのひら</sup>と同時に、両手の掌を上<sup>うえ</sup>向<sup>むき</sup>に開いて、それを頭の左右に並べたまま、少し物を抱えた心持に耳の辺まで上げるのである。宗助は敷居際に跪<sup>ひざま</sup>すい形のごとく拝を行なつた。すると座敷の中で、

「一拝<sup>いつぱい</sup>で宜<sup>よろ</sup>しい」と云う会釈<sup>えしゃく</sup>があつた。宗助はあとを略して中へ入つた。

室の中はただ薄暗い灯<sup>ひ</sup>に照らされていた。その弱い光は、いかに大字な書物をも披見<sup>ひけん</sup>せしめぬ程度のものであつた。宗助は今日までの経験に訴えて、これくらい微<sup>かす</sup>かな灯火<sup>ともしび</sup>に、夜を営なむ人間を憶<sup>おも</sup>い起す事ができなかつた。その光は無論月よりも強かつた。かつ月のごとく蒼<sup>あおじろ</sup>白い色ではなかつた。けれどももう少し

で朦朧の境に沈むべき性質のものであつた。

この静かな判然しない灯火の力で、宗助は自分を去る四五尺の正面に、宣道のいわゆる老師なるものを認めた。彼の顔は例によつて鎧物のようになかなか動かなかつた。色は銅あかがねであつた。彼は全身に渋に似た柿かきに似た茶に似た色の法衣ころもを纏つていた。足も手も見えなかつた。ただ頸くびから上が見えた。その頸から上が、嚴げん 肅しゆくと緊張の極度に安んじて、いつまで経つても変る恐おそれを有せざることくに人を魅した。そうして頭には一本の毛もなかつた。

この面前に氣力なく坐すわつた宗助の、口にした言葉はただ一句で尽きた。

「もつと、ぎろりとしたところを持つて来なければ駄目だ」とた

ちまち云われた。「そのくらいな事は少し学問をしたものなら誰

でも云える」

宗助は喪家の犬のごとく室内を退いた。後に鈴を振る音が烈しく響いた。

## 二十

障子の外で野中さん、野中さんと呼ぶ声が二度ほど聞えた。  
 宗助は半睡の裡にはいと応えたつもりであつたが、返事を仕切らない先に、早く知覚を失つて、また正体なく寝入つてしまつた。

二度目に眼が覚めた時、彼は驚ろいて飛び起きた。縁側へ出ると、宜道が鼠木綿の着物に襷を掛けて、甲斐甲斐しくそちらを拭いていた。赤く凍んだ手で、濡雜巾を絞りながら、例のごとく柔軟<sup>やわらか</sup>にこやかな顔をして、

「御早う」と挨拶した。彼は今朝もまたとくに参禪を済ました後<sup>のち</sup>、こうして庵に帰つて働いていたのである。宗助はわざわざ呼び起されても起き得なかつた自分の怠慢<sup>かえり</sup>を省みて、全くきまりの悪い思をした。

「今朝もつい寝忘れて失礼しました」

彼はこそこそ勝手口から井戸端の方へ出た。そうして冷たい水を汲んでできるだけ早く顔を洗つた。延びかかつた鬚<sup>ひげ</sup>が、頬の辺<sup>あたり</sup>

で手を刺すようにざらざらしたが、今の宗助にはそれを苦にするほどの余裕はなかつた。彼はしきりに宜道と自分とを対照して考えた。

紹介状を貰うときに東京で聞いたところによると、この宜道といふ坊さんは、大変性質たちのいい男で、今では修業もだいぶでき上がつていると云う話だつたが、会つて見ると、まるで一丁字もない小廝こもののよう丁寧ていねいであつた。こうして 檻たすき掛がけで働いているところを見ると、どうしても一個の独立した庵あんの主人らしくはなかつた。納所なつしょとも小坊主とも云えた。

この 矮小わいしよう 若僧じゃくそう は、まだ出家をしない前、ただの俗人としてここへ修業に來た時、七日の間結跏けつかしたぎり少しも動かな

かつたのである。しまいには足が痛んで腰が立たなくなつて、廁へ上る折などは、やつとの事壁伝いに身体を運んだのである。その時分の彼は彫刻家であつた。見性した日に、嬉しさの余り、裏の山へ馳け上つて、草木國土悉皆成仏と大きな声を出して叫んだ。そうしてついに頭を剃つてしまつた。

この庵を預かるようになつてから、もう二年になるが、まだ本式に床を延べて、樂に足を延ばして寝た事はないと云つた。冬でも着物のまま壁に倚れて坐睡するだけだと云つた。侍者をしていた頃などは、老師の犢鼻禪まで洗わせられたと云つた。その上少しの暇を偷んで坐りでもすると、後から来て意地の悪い邪魔をされる、毒吐かれる、頭の剃り立てには何の因果で坊主になつたか

と悔む事が多かつたと云つた。

「ようやくこの頃になつて少し樂になりました。しかしながら先が  
ございます。修業は實際苦しいものです。そう容易にできるもの  
なら、いくら私共が馬鹿だつて、こうして十年も二十年も苦しむ  
訳がございません」

宗助はただ惘然<sup>ぼうぜん</sup>とした。自己の根気と精力の足らない事をは  
がゆく思う上に、それほど歳月を掛けなければ 成就<sup>じょうじゅ</sup>できない  
ものなら、自分は何しにこの山の中までやつて來たか、それから  
が第一の矛盾であつた。

「けつして損になる氣遣はございません。十分<sup>じつ</sup>坐れば、十分の  
功があり、二十分坐れば二十分の徳があるのは無論です。その上

最初を一つ奇麗にぶち抜いておけば、あとはこう云う風に始終

ここにおいてにならないでも済みますから」

宗助は義理にもまた自分の室へ帰つて坐らなければならなかつた。

こんな時に宜道が来て、

「野中さん 提唱です」と誘つてくれると、宗助は心から嬉しい気がした。彼は禿頭を捕まえるような手の着けどころのない難題に悩まされて、坐ながらじつと煩悶するのを、いかにも切なく思つた。どんなに精力を消耗する仕事でもいいから、もう少し積極的に身体を働らかしたく思つた。

提唱のある場所は、やはり一窓庵から一町も隔つていた。蓮池

の前を通り越して、それを左へ曲らずに真直に突き当ると、屋根瓦を厳めしく重ねた高い軒が、松の間に仰がれた。宜道は懷に黒い表紙の本を入れていた。宗助は無論手ぶらであつた。提唱と云うのが、学校でいう講義の意味である事さえ、ここへ来て始めて知つた。

室は高い天井に比例して広くかつ寒かつた。色の変つた畳の色が古い柱と映り合つて、昔を物語るように寂び果てていた。そこに坐っている人々も皆地味に見えた。席次不同に思い思いの座を占めてはいるが、高声に語るもの、笑うものは一人もなかつた。僧は皆紺麻の法衣を着て、正面の曲の左右に列を作つて向い合せに並んだ。その曲は朱で塗つてあつた。

やがて老師が現われた。畠を見つめていた宗助には、彼がどこを通つて、どこからここへ出たかさっぱり分らなかつた。ただ彼の落ちつき払つて曲に倚る重々しい姿を見た。一人の若い僧が立ちながら、紫の袱紗を解いて、中から取り出した書物を、恭しく卓上に置くところを見た。またその礼拝して退ぞく態を見た。この時堂上の僧は一斉に合掌して、夢窓国師の遺誠を誦し始めた。思い思いに席を取つた宗助の前後にいる居士も皆同音に調子を合せた。聞いてみると、経文のような、普通の言葉のような、一種の節を帶びた文字であつた。

「我に三等の弟子あり。いわゆる猛烈にして諸縁を放下し、專一に己事を究明するこれを上等と名づく。修業純ならず駭雜学

を好む、これを中等と云う」と云々という、余り長くはないものであつた。宗助は始め夢窓国師の何人なるかを知らなかつた。宜道からこの夢窓国師と大燈国師とは、禪門中興の祖であると云う事を教わつたのである。平生跛<sup>ちんぱ</sup>で充分に足を組む事ができな<sup>いきどお</sup>いのを憤つて、死ぬ間際に、今日こそおれの意のごとくにして見せると云いながら、悪い方の足を無理に折つべしよつて、結跏<sup>けつか</sup>したため、血が流れて法衣<sup>ころも</sup>を煮染<sup>にじ</sup>ましたという大燈国師の話もその折宜道から聞いた。

やがて提唱が始まつた。宜道は懷<sup>ふところ</sup>から例の書物を出して、<sup>ページ</sup>頁<sup>ペー</sup>を半ば擦<sup>なが</sup>らして宗助の前へ置いた。それは宗門無尽燈論<sup>しゆうもんむじんとうろん</sup>と云う書物であつた。始めて聞きに出た時、宜道は、

「ありがたい結構な本です」と宗助に教えてくれた。白隱和尚の弟子の東嶺和尚とかいう人の編輯したもので、重に禅を修行するものが、浅い所から深い所へ進んで行く径路やら、それに伴なう心境の変化やらを秩序立てて書いたものらしかつた。

中途から顔を出した宗助には、よくも解せなかつたけれども、講者は能弁の方で、黙つて聞いているうちに、大変面白いところがあつた。その上参禪の士を鼓舞するためか、古来からこの道に苦しんだ人の閱歴譚などを取り交ぜて、一段の精彩を着けるのが例であつた。この日もその通りであつたが、或所へ来ると、突然語調を改めて、

「この頃室中に来つて、どうも妄想が起つていけないなどと訴

えるものがあるが」と急に入室者の不熱心を戒しめ出したので、宗助は覚えすぎくりとした。室内に入つて、その訴をなしたもののは実際に彼自身であつた。

一時間の後宜道と宗助は袖そでをつらねてまた一窓庵に帰つた。その帰り路に宜道は、

「ああして提唱のある時に、よく参禅者の不心得を諷ふうせられます」と云つた。宗助は何も答えなかつた。

## 二十一

そのうち、山の中の日は、一日一日と経たつつた。御米およねからはかな

り長い手紙がもう二本来た。もつとも二本とも新たに宗助の心を乱すような心配事は書いてなかつた。宗助は常の細君思いに似ずついて返事を出すのを怠つた。彼は山を出る前に、何とかこの間の問題に片をつけなければ、せつかく來た甲斐がないような、また宣道ぎどうに対してもまないような気がしていた。眼が覚めている時は、これがために名状しがたい一種の圧迫を受けづけに受けた。したがつて日が暮れて夜が明けて、寺で見る太陽の数が重なるにつけて、あたかも後から追いかけられでもするごとく気を焦つた。けれども彼は最初の解決よりほかに、一步もこの問題にちかづく術すべを知らなかつた。彼はまたいくら考へてもこの最初の解決は確なものであると信じていた。ただ理窟りくつから割り出したのだ

から、腹の足たしにはいつこうならなかつた。彼はこの確なものを放り出して、さらにまた確なものを求めようとした。けれどもそんなものは少しも出て来なかつた。

彼は自分の室へやでひとり考えた。疲れると、台所から下りて、裏の菜園へ出た。そうして崖がけの下に掘つた横穴この中へ這入はいつて、じつと動かすにいた。宜道は気が散るようでは駄目だと云つた。だんだん集注して凝り固まつて、しまいに鉄の棒のようにならなくては駄目だと云つた。そう云う事を聞けば聞くほど、実際にそういうのが、困難になつた。

「すでに頭の中に、そうしようと云う下心があるからいけないのです」と宜道がまた云つて聞かした。宗助はいよいよ窮した。忽こ

つぜん 然安井の事を考え出した。安井がもし坂井の家へ 頻繁に出入りでもするようになつて、当分満洲へ帰らないとすれば、今のうちあの借家しゃくやを引き上げて、どこかへ転宅するのが 上分別じょうぶんべつだらう。こんな所にぐずぐずしているより、早く東京へ帰つてその方の位置をつけた方がまだ実際的かも知れない。緩くり構えて、御米にでも知れるとまた心配が殖えるだけだと思つた。

「私のようなものにはどうてい悟は開かれそうに有りません」と思いつめたように宜道を捕つかまえて云つた。それは帰る一二三日前の事であつた。

「いえ信念さえあれば誰でも悟れます」と宜道は 躊躇ちゆうちょもなく答えた。「法華ほつけの凝り固まりが夢中に太鼓たたを叩くようにやつて御

覧なさい。頭の巔辺から足の爪先までがことごとく公案で充実したとき、俄然として新天地が現前するのでござります」

宗助は自分の境遇やら性質が、それほど盲目的に猛烈な働くあえてするに適しない事を深く悲しんだ。いわんや自分のこの山で暮らすべき日はすでに限られていた。彼は直截に生活の葛藤を切り払つつもりで、かえつて迂闊に山の中へ迷い込んだ愚物であつた。

彼は腹の中でこう考えながら、宜道の面前で、それだけの事を言い切る力がなかつた。彼は心からこの若い禅僧の勇氣と熱心と真面目と親切とに敬意を表していたのである。

「道は近きにあり、かえつてこれを遠きに求むという言葉がある

が実際です。つい鼻の先にあるのですけれども、どうしても気がつきません」と宜道はさも残念そうであつた。宗助はまた自分のへやしりぞ室に退いて線香を立てた。

こう云う状態は、不幸にして宗助の山を去らなければならぬ日まで、目に立つほどの新生面を開く機会なく続いた。いよいよ出立の朝になつて宗助は潔いさぎよく未練をなげ棄てた。

「永々御世話になりました。残念ですが、どうも仕方がありません。もう当分御眼にかかる折もござりますまいから、随分御機嫌よう」と宜道に挨拶をした。宜道は氣の毒そうであつた。

「御世話どころか、万事不行届でさぞ御窮屈でございましたろう。しかしこれほど御坐りになつてもだいぶ違います。わざわざおい

でになつただけの事は充分ござります」と云つた。しかし宗助にはまるで時間を潰しに来たような自覚が明らかにあつた。それをこう取り繕つくろつて云つて貰うのも、自分の腑甲斐ふがいなさからであると、ひとり恥ひとり恥じ入つた。

「悟の遅速は全く人の性質たちで、それだけでは優劣にはなりません。入りやすくても後あとで塞つかえて動かない人もありますし、また初め長く掛かっても、いよいよと云う場合に非常に痛快にできるのもあります。けつして失望なさる事はございません。ただ熱心が大切です。亡くなられた洪川和尚こうせんおしょうなどは、もと儒教をやられて、中年からの修業でございましたが、僧になつてから三年の間と云うものまるで一則も通らなかつたです。それで私は業が深くて

悟れないのだと云つて、毎朝かわや向つて礼らいはい拝されたくらいであります。後にはあのような知識になられました。これなどはもつとも好い例です」

宜道はこんな話をして、暗に宗助が東京へ帰つてからも、全くこの方を断念しないようにあらかじめ間接の注意を与えるように見えた。宗助は謹んで、宜道のいう事に耳を借した。けれども腹の中では大事がもうすでに半分去つたごとくに感じた。自分は門を開けて貰いに来た。けれども門番は扉の向むこうがわ側側にいて、敲たたかいてもついに顔さえ出してくれなかつた。ただ、

「敲いても駄目だ。ひとりで開けて入れ」と云う声が聞えただけであつた。彼はどうしたらこの門の門を開ける事ができるかを考え

た。そうしてその手段と方法を明らかに頭の中で拵えた。けれどもそれを実地に開ける力は、少しも養成する事ができなかつた。したがつて自分の立つている場所は、この問題を考えない昔と毫も異なるところがなかつた。彼は依然として無能無力に鎖ざされた扉の前に取り残された。彼は平生自分の分別を便に生きて來た。その分別が今は彼に祟つたのを口惜く思つた。そうして始から取捨も商量も容れない愚なものの一徹一図を羨んだ。もしくは信念に篤い善男善女の、知慧も忘れ思議も浮ばぬ精進の程度を崇高と仰いだ。彼自身は長く門外に佇立るべき運命をもつて生れて來たものらしかつた。それは是非もなかつた。けれども、どうせ通れない門なら、わざわざそこまで辿りつくのが矛盾であつた。

彼は後うしろを顧かえりみた。そうしてとうていまた元の路へ引き返す勇氣をもつたなかつた。彼は前まへを眺ながめた。前には堅固な扉がいつまでも展望を遮さえぎついていた。彼は門を通る人ではなかつた。また門を通らないで済む人でもなかつた。要するに、彼は門の下に立ち竦すくんで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であつた。

宗助は立つ前に、宜道と連れだつて、老師の許もとへちよつと暇いとまに行つた。老師は二人を蓮池れんちの上の、縁に勾欄こうらんの着いた座敷に通した。宜道は自ら次の間に立つて、茶を入れて出た。

「東京はまだ寒いでしょう」と老師が云つた。「少しでも手がかりができるからだと、帰つたあとも楽だけれども。惜しい事で」宗助は老師のこの挨拶あいさつに対して、丁寧ていねいに礼を述べて、また

十日前に潜くぐつた山門を出た。糞いらかを圧する杉の色が、冬を封じて黒く彼の後に聳うしろそびえた。

## 二十二

家の敷居またを跨またいだ宗助そうすけは、己おのれにさえ憫然びんぜんな姿えがを描えがいた。彼は過去十日間毎朝頭れいすいを冷水れいすいで濡ぬらしたなり、いまだかつて櫛くしの歯ひげを通した事がなかつた。髭ひげは固もとより剃そる暇いとまを有もたなかつた。三度とも宜道ぎどうの好意で白米かしの炊かしいだのを食べたには食べたが、副食物と云つては、菜の煮たのか、大根の煮たのぐらいなものであつた。彼の顔は自おのから蒼あおかつた。出る前よりも多少面おもやつ寝ねれていた。

その上彼は一窓庵で考えつづけに考えた習慣がまだ全く抜け切らなかつた。どこかに卵を抱く牝鶏のような心持が残つて、頭が平生の通り自由に働くなかつた。その癖一方では坂井の事が気にかかつた。坂井と云うよりも、坂井のいわゆる冒險者として宗助の耳に響いたその弟と、その弟の友達として彼の胸を騒がした安井の消息が気にかかつた。けれども彼は自身に家主の宅へ出向いて、それを聞き糺す勇気を有たなかつた。間接にそれを御米に問うことはなおできなかつた。彼は山にいる間さえ、御米がこの事件について何事も耳にしてくれなければいいがと気遣わない日はなかつたくらいである。宗助は年来住み慣れた家の座敷に坐つて、

「汽車に乗ると短かい道中でも氣のせいか疲れるね。留守中に別段變つた事はなかつたかい」と聞いた。實際彼は短かい汽車旅行にさえ堪えかねる顔つきをしていた。

御米はいかな場合にも夫の前に忘れなかつた笑顔さえ作り得なかつた。と云つて、せつかく保養に行つた転地先から今帰つて来たばかりの夫に、行かない前よりかえつて健康が悪くなつたらしいとは、氣の毒で露骨に話しあつた。<sup>にく</sup>わざと活潑<sup>かつぱつ</sup>に、

「いくら保養でも、家<sup>うち</sup>へ帰ると、少しは氣<sup>きづ</sup>疲れが出るものよ。けれどもあなたは余まり爺々汚<sup>じじむさ</sup>いわ。<sup>ごしよう</sup>後生だから一休<sup>ひとやすみ</sup>したら御湯に行つて頭を刈つて鬚<sup>ひげ</sup>を剃<sup>す</sup>つて来てちようだい」と云いながら、わざわざ机の引出から小さな鏡を出して見せた。

宗助は御米の言葉を聞いて、始めて一窓庵の空気を風で払つた  
ような心持がした。一たび山を出て家へ帰ればやはり元の宗助で  
あつた。

「坂井さんからはその後何とも云つて来ないかい」

「いいえ何とも」

「ころく小六の事も」

「いいえ」

その小六は図書館へ行つて留守だつた。宗助は手拭てぬぐいと石鹼シャボン  
を持つて外へ出た。

明る日役所へ出ると、みんなから病氣はどうだと聞かれた。中  
には少し瘠せたようですねと云うものもあつた。宗助にはそれが

無意識の冷評の意味に聞えた。菜根譚さいこんたんを読む男はただどうです  
旨うまく行きましたかと尋ねた。宗助はこの問にもだいぶ痛い思をし  
た。

その晩はまた御米と小六から代る代る鎌倉の事を根掘り葉掘り  
問われた。

「氣楽でしようね。るすい留守居も何もおかないで出られたら」と御米  
が云つた。

「それで一日いちんちいくら出すと置いてくれるんです」と小六が聞い  
た。「鉄砲でも担かついで行つて、獵りょうでもしたら面白かろう」とも云  
つた。

「しかし退屈ね。そんなに淋さむしくつちや。朝から晩まで寝ていら

つしやる訳にも行かないでしよう」と御米がまた云つた。

「もう少し滋養物が食える所でなくつちやあ、やつぱり身体からだによくないでしよう」と小六がまた云つた。

宗助はその夜床の中へ入つて、明日あしたこそ思い切つて、坂井へ行つて安井の消息をそれとなく聞きただ糺して、もし彼がまだ東京にいて、なおしばしば坂井と往復があるようなら、遠くの方へ引越してしまおうと考えた。

次の日は平凡に宗助の頭を照らして、事なき光を西に落した。

夜よに入つて彼は、

「ちよつと坂井さんまで行つて来る」と云い捨てて門を出た。月のない坂を上つて、瓦斯灯ガスとうに照らされた砂利を鳴らしながら潜くぐり

戸<sup>ど</sup>を開けた時、彼は今夜ここで安井に落ち合うような万一是ま  
ず起らないだろうと度胸を据えた。それでもわざと勝手口へ回つ  
て、御客来ですかと聞くことは忘れなかつた。

「よくおいでです。どうも相変らず寒いじやありませんか」と云  
う常の通り元気の好い主人を見ると、子供を大勢自分の前へ並べ  
て、その中の一人と掛けながら、じやん拳<sup>けん</sup>をやつていた。

相手の女の子の年は、六つばかりに見えた。赤い幅のあるリボン  
を蝶々<sup>ちょうちよう</sup>のようくつつけて、主人に負けないほどの  
勢で、小さな手を握り固めてさつと前へ出した。その断然たる様  
子と、その握り拳の小ささと、これに反して主人の仰山<sup>ぎょうさん</sup>らし  
く大きな拳骨<sup>げんこつ</sup>が、対照になつて皆<sup>みんな</sup>の笑を惹いた。火鉢<sup>ひばち</sup>の傍<sup>はた</sup>に見

ていた細君は、

「そら今度こそ雪子の勝だ」と云つて愉快そうに綺麗な歯を露わした。子供の膝の傍には白だの赤だの藍だの硝子玉がたくさんあつた。主人は、

「どうどう雪子に負けた」と席を外して、宗助の方を向いたが、「どうですまた洞窟へでも引き込みますかな」と云つて立ち上がつた。

書斎の柱には、例のごとく錦の袋に入れた蒙古刀が振ら下がつていた。花活にはどこで咲いたか、もう黄色い菜の花が挿してあつた。宗助は床柱の中途を華やかに彩どる袋に眼を着けて、「相変らず掛かっておりますな」と云つた。そうして主人の気色

を頭の奥から窺つた。主人は、

「ええちと物数奇過ぎますね、蒙古刀は」と答えた。「ところが弟の野郎そんな玩具おもちゃを持って来ては、兄貴を籠絡ろうらくするつもりだから困りものじやありませんか」

「御舎弟はその後どうなさいました」と宗助は何気ない風を示した。

「ええようやく四五日前帰りました。ありや全く蒙古向ですね。御前のような夷狄いてきは東京にや調和しないから早く帰れつたら、わたし私もそう思つて帰つて行きました。どうしても、ありや万里の長城の向むこうがわ側にいるべき人物ですよ。そうしてゴビの沙漠さばくの中でも金剛石ダイヤモンドでも搜していればいいんです」

「もう一人の御伴侶は」

「安井ですか、あれも無論いつしょです。ああなたると落ちついちやいられないと見えますね。何でも元は京都大学にいたこともありますとか云う話ですが。どうして、ああ変化したものですかね」

宗助は腋<sup>わき</sup>の下から汗が出た。安井がどう变つて、どう落ちつか

ないのか、全く聞く気にはならなかつた。ただ自分が主人に安井と同じ大学にいた事を、まだ洩<sup>も</sup>らさなかつたのを天祐<sup>てんゆう</sup>のようにありがたく思つた。けれども主人はその弟と安井とを晩餐<sup>ばんさん</sup>に呼ぶとき、自分をこの二人に紹介しようと申し出た男である。辞退をしてその席へ顔を出す不面目<sup>まぬ</sup>だけはやつと免かれたようなものの、その晩主人が何かの機会<sup>はずみ</sup>につい自分の名を二人に洩<sup>も</sup>らさない

とは限らなかつた。宗助は後うしろぐら暗いのちい人の、変へんみよう名なを用いて世よを渡る便利を切に感じた。彼は主人に向つて、「あなたはもしや私の名を安井の前で口にしやしませんか」と聞いて見たくて堪たまらなかつた。けれども、それだけはどうしても聞けなかつた。

下女が平たい大きな菓子皿に妙な菓子を盛つて出た。一丁の豆腐きんぎょくとうぐらいな大きさの金玉糖きんぎょくとうの中に、金魚が二足透すいて見えるのを、そのまま庖ほうちょう丁じょうの刃を入れて、元の形を崩くずさずに、皿に移したものであつた。宗助は一目見て、ただ珍らしいと感じた。けれども彼の頭はむしろ他の方面に気を奪だつっていた。すると主人が、

「どうです一つ」と例いつもの通りまず自分から手を出した。

「これはね、昨日ある人の銀婚式に呼ばれて、貰つて来たのだから、すこぶるおめでたいのです。あなたも一切ぐら<sup>あやか</sup>い肖つてもいいでしよう」

主人は肖りたい名の下に、甘垂<sup>あまた</sup>るい金玉糖<sup>きんぎょくとう</sup>を幾切か頬張<sup>ほおば</sup>つた。これは酒も呑み、茶も呑み、飯も菓子も食えるようになれた、重宝で健康な男であつた。

「何実を云うと、二十年も三十年も夫婦が皺<sup>しわ</sup>だらけになつて生きていたつて、別におめでたくもありませんが、そこが物は比較的なところでね。私はいつか清水谷の公園の前を通つて驚ろいた事がある」と変な方面へ話を持つて行つた。こういう風に、それからそれへと客を飽<sup>あ</sup>かせないように引張つて行くのが、社交になれ

た主人の平生の調子であつた。

彼の云うところによると、清水谷から弁慶橋へ通じる泥溝のような細い流の中に、春先になると無数の蛙が生れるのだそうである。その蛙が押し合い鳴き合つて生長するうちに、幾百組か幾千組の恋が泥渠どぶの中で成立する。そうしてそれらの愛に生きるもののが重ならないばかりに隙間すきまなく清水谷から弁慶橋へ続いて、互に睦むつまじく浮いていると、通り掛りの小僧だの閑人ひまじんが、石を打ちつけて、無残にも蛙の夫婦を殺して行くものだから、その数がほとんどとんど勘定かんじょうし切れないほど多くなるのだそうである。

「死屍累々しじるいりいとはあの事ですね。それが皆夫婦なんだから実際氣の毒ですよ。つまりあすこを二三丁通るうちに、我々は悲劇にいく

つ出逢うか分らないんです。それを考えると御互は實に幸福でさ  
あ。夫婦になつてるのが悪らしいつて、石で頭を破られる恐れは、  
まあ無いですかね。しかも双方ともに二十年も三十年も安全な  
ら、全くおめでたいに違ありませんよ。だから一切ぐらい肖つて  
おく必要もあるでしよう」と云つて、主人はわざと箸<sup>はし</sup>で金玉糖を  
挟んで、宗助の前に出した。宗助は苦笑しながら、それを受けた。  
こんな冗談<sup>じょうだん</sup>交りの話を、主人はいくらでも続けるので、宗  
助はやむを得ず或る辺までは釣られて行つた。けれども腹の中は  
けつして主人のように太平樂<sup>たいへいらく</sup>には行かななかつた。辞して表へ出  
て、また月のない空を眺めた時は、その深く黒い色の下に、何と  
も知れない一種の悲哀と物<sup>もの</sup>淒<sup>すこ</sup>さを感じた。

彼は坂井の家に、ただいやしくも免かれんとする 料簡りょうけんで行つた。そうして、その目的を達するためには、恥と不愉快を忍んで、好意と真率しんそつの氣に充ちた主人に対して、政略的に談話を駆かつた。しかも知らうと思う事はことごとく知る事ができなかつた。己れの弱点については、一言ひとことも彼の前に自白するの勇氣も必要も認めなかつた。

彼の頭を掠めんとした雨雲あまぐもは、辛うじて、頭に触れずに過ぎたらしかつた。けれども、これに似た不安はこれから先何度も、いろいろな程度において、繰り返さなければすまないような虫の知らせがどこかにあつた。それを繰り返させるのは天の事であつた。それを逃げて回るのは宗助の事であつた。

## 二十三

月が変つてから寒さがだいぶ緩んだ。官吏の増俸問題につれて必然起るべく、多数の噂に上つた局員課員の淘汰も、月末までにほぼ片づいた。その間、ぽつりぽつりと首を斬られる知人や未知人の名前を絶えず耳にした宗助は、時々家へ帰つて御米に、

「今度はおれの番かも知れない」と云う事があつた。御米はそれを冗談とも聞き、また本気とも聞いた。まれには隠れた未来を故意に呼び出す不吉な言葉とも解釈した。それを口にする宗助の胸の中にも、御米と同じような雲が去來した。

月が改つて、役所の動搖もこれで一段落だと沙汰さたせられた時、宗助は生き残った自分の運命を顧かえりみて、当然のようにも思つた。また偶然のようにも思つた。立ちながら、御米を見下して、「まあ助かつた」とむずかし氣に云つた。その嬉うれしくも悲しくもない様子が、御米には天から落ちた滑稽こつけいに見えた。

また二三日して宗助の月給が五円昇つた。

「原則通り二割五分増さないでも仕方があるまい。休められた人も、元給のままでいる人もたくさんあるんだから」と云つた宗助は、この五円に自己以上の価値をもたらし帰つたごとく満足の色を見せた。御米は無論の事心のうちに不足を訴えるべき余地を見出さなかつた。

翌日<sup>あくるひ</sup>の晩宗助はわが膳<sup>ぜん</sup>の上に頭<sup>かしら</sup>つきの魚<sup>うお</sup>の、尾を皿<sup>う</sup>の外に躍<sup>おど</sup>らす態<sup>さま</sup>を眺めた。小豆<sup>あずき</sup>の色に染まつた飯<sup>かおり</sup>の香<sup>か</sup>を嗅いだ。御米<sup>はわ</sup>ざわざ清<sup>きよ</sup>をやつて、坂井<sup>さかい</sup>の家に引き移つた小六<sup>こうろく</sup>を招いた。小六<sup>は</sup>、「やあ御馳走<sup>ごちそう</sup>だなあ」と云つて勝手<sup>い</sup>から入つて來た。

梅<sup>うめ</sup>がちらほらと眼<sup>い</sup>に入るようになつた。早いのはすでに色を失<sup>な</sup>なつて散りかけた。雨<sup>は</sup>は煙<sup>え</sup>るようになり始めた。それが霽<sup>は</sup>れて、日に蒸<sup>む</sup>されるとき、地面<sup>じめん</sup>からも、屋根<sup>やねん</sup>からも、春の記憶<sup>は</sup>を新<sup>に</sup>すべき湿氣<sup>しき</sup>がむらむらと立ち上<sup>のぼ</sup>つた。背戸<sup>せど</sup>に干した雨傘<sup>あまがさ</sup>に、小犬<sup>こいぬ</sup>がじやれかかつて、蛇<sup>じや</sup>の目の色がきらきらする所に陽炎<sup>かげろう</sup>が燃えるごとく長閑<sup>のどか</sup>に思われる日もあつた。

「ようやく冬<sup>ふゆ</sup>が過ぎたようね。あなた今度<sup>こんど</sup>の土曜<sup>さえき</sup>に佐伯<sup>さえき</sup>の叔母<sup>おば</sup>さ

んのところへ回つて、小六さんの事をきめていらつしやいよ。あ  
んまりいつまでも放つておくと、また安さんやすが忘れてしまうから」と御米が催促した。宗助は、

「うん、思い切つて行つて来よう」と答えた。小六は坂井の好意で、そこの書生に住み込んだ。その上に宗助と安之助が、不足のところを分担する事ができたらと小六に云つて聞かしたのは、宗助自身であつた。小六は兄の運動を待たずに、すぐ安之助に直談判んぱんをした。そうして、形式的に宗助の方から依頼すればすぐ安之助が引き受けるまでに自分で埒らちを明けたのである。

小康はかくして事を好まない夫婦の上に落ちた。ある日曜の午ひる宗助は久しぶりに、四日目の垢あかを流すため横町の洗場に行つたら、

五十ばかりの頭を剃つた男と、三十代の商人らしい男が、ようやく春らしくなつたと云つて、時候の挨拶あいさつを取り換わしていた。  
 若い方が、今朝始めて鶯の鳴声を聞いたと話すと、坊さんの方が、  
 私は二三日前にも一度聞いた事があると答えていた。

「まだ鳴きはじめだから下手だね」

「ええ、まだ充分に舌したが回りません」

宗助は家うちへ帰つて御米にこの鶯の問答を繰り返して聞かせた。  
 御米は障子しようじの硝子ガラスに映る麗かな日影をすかして見て、

「本当にありがたいわね。ようやくの事春になつて」と云つて、  
 晴れ晴れしい眉まゆを張つた。宗助は縁に出て長く延びた爪きを剪りな  
 がら、

「うん、しかしまだじき冬になるよ」と答えて、下を向いたまま  
鉗<sup>はさみ</sup>を動かしていた。



# 青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年3月29日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集5」筑摩書房

1971（昭和46）年

初出：「朝日新聞」

1910（明治43）年3月1日～6月12日

入力：柴田卓治

校正：高橋知仁

1999年4月22日公開

2015年3月7日修正

### 青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

門  
夏目漱石

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>